# 禄遒の奏

伯修佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
禄遒の奏

【Ｎコード】
Ｎ３５７９Ｏ

【作者名】
伯修佳

【あらすじ】
王と十七の侯爵が治める異国の物語。
零落した伯爵家の娘、香月（こうげつ）は様々な苦難を経て、ようやく念願の学問の道を歩く事に。
だが新しく足を踏み入れた学者の城『研医殿』では、更なる困難が待ち受けていた。

友人を救う為奔走する香月の前に見え隠れする『奏の鳴声』とは一体何を意味するものなのか？

（この作品は「柳里の華」の続編です。そちらを読了していなくとも一応わかる様にはなっていますが、これから柳里の華を読まれる方はネタバレがありますので先に読まれる事をお勧めします。）

# 黄白（きはく）

序

禄（ろく）は幸いを。

遒（しゅう）は多くを集める意を表す。

奏（かなで）は幸いを謳（うた）う鳥。

一声にして百音を奏でると言われている、伝説の神鳥。

その声を聴いた者は、至上の幸いを得るという。

しかし実際の例（ためし）は無く、故に『奏の鳴声』は“有り得ない事”を表した。

証人がいないのに、何故伝説が生まれたのか――理由は未だ解明されていない。

ただ、まことしやかに受け継がれるもう一つの言い伝えがある。

奏の声を聴いた者は、皆消えているのではないか。

即ち、“至上の幸い”とは『常世に行く』を指しているからだと――

※※※※

無人の館には、灯り一つ灯されていない。自分以外、一体何処に行ってしまったのだろう。

――どうして？

彼女は言い様のない不安と焦燥に駆られて、屋敷じゅうを彷徨(さまよ)っていた。

――父上。苑寿(えんじゅ)。

母を早くに亡くした彼女は、乳母と父親に育てられた。貴族として、伯爵位を戴(いただ)く家ではあったが家人は少なく、屋敷もそう大きくはなかった。けれど今は、どういうわけかいくら廊下を走っても父親の部屋に辿り着けない。

――誰か。

声を限りに叫びながら、彼女は走り続けた。

――……助けて。

後ろから、とても嫌なものが追いかけてくる気がした。走りに走って、遂に足がもつれて転んでしまう。

――捕まりたくない！！

『それ』の気配が彼女に覆い被さって来たと感じた瞬間、目の前にいきなり朱塗りの格子が現れて行く手を遮った。

――見つからない。もう諦めなよ。

自分のものではない、ひどく静かな声が聞こえる。

つい最近、どこかで聞いた事がある声だ――

記憶の片鱗を呼び寄せる暇もなく、彼女は背後から伸びてきた無

数の腕に飲み込まれ、引きずり戻されて行った。

※※※※

香月は寝台の上で目を覚ました。身体は寝汗でしとどに濡れていて、悪夢の余韻に心臓は早鐘を打っている。

――まただ。また、あの夢を見た。

初めて見る夢ではなかった。父親を亡くしてから、暫くはほぼ毎晩の様に見ていたのだから。

内容も全て覚えている位だというのに、見る度に恐怖で震える。しかも。

――最近は見ないで済んでいたのに、どうして……。

不安に打ちひしがれる日々は、もう終わったではないか。それとも、ここまで自分は子供だったのだろうか。

彼女は自分以外誰もいない寝室を見回して、溜息をついた。

刻(とき)はもう朝を迎えているらしく、開いている小半蔀(こはじとみ)から旭光(きょっこう)が入り込んで来る。鳥の囀(さえず)りも聞こえた。

ここはもう、寿楽ではないから――鷹信の添い寝は必要ない筈で、断るしかなかったのだと自分に言い聞かせる。

額の汗を拭って起き上がった。乱れた寝間着の襟を締めると、香月は部屋と廂(ひさし)を隔てる襖障子を明ける。

秋を迎えた王都の空気は幾分ひんやりとしていて、汗が引いていくのが気持ち良かった。更に塗り格子を少しだけ開けて、部屋に光を取り込む。

「まあ、姫様！」

音で眼を覚ましたのか、隣の部屋の障子が開いて、聞き慣れた女性の声がした。途端に香月の顔から憂いの表情が消える。綻んだ笑顔に、向ける相手への愛情が溢れていた。

この屋敷にはかつて住んでいた生家の何十倍もの使用人がいるが、彼女を「姫」と呼ぶ者はごく僅かしかいない。

それは、親しい身内であるという証。

「早いのね、苑寿」

苑寿と呼ばれた女性はだが、渋面を見せて主人に詰め寄った。

「そんな事、妾(わたし)や侍女達を呼んでお命じください！　折角侯爵様が姫様の過ごしやすい様にと人を揃えて下さったのですから」

「少し外の空気を吸いたかったの。それだけだから、人を呼ぶのも悪いでしょう」

「しかもそんなお姿で――いいですか、もう少し姫様は貴婦人としての嗜(たしな)みというものを――」

叱られているというのに、香月はくすくすと笑い出した。

「聞いていらっしゃいますか！？」

「ごめんなさい、何だか懐かしくて。久しぶりね、苑寿の小言を聞くのも」

「……姫様」

乳母はうっすらと涙ぐんで、主の華奢な身体を抱き寄せた。
香月も甘える様に苑寿の肩に頭を凭れかける。
懐かしい、心安らぐ匂い。それでも別れたあの日に比べて鬢(びん)に白いものが増えている。
父玄達(げんたつ)が何者かによって毒殺された後、それまで困窮していたとも思わなかったのに、家には莫大な借財だけが残された。
返済の為と、どこからともなく現れた人買いに、香月を始め若い娘は皆遊郭に売られ、男や苑寿の様な年配の者は王都の郊外で奉公に出されたのである。
鷹信が全員の居所を突き止め対価を払って引き取ってくれた時、苑寿は酷使され酷く衰弱していたと聞く。
彼女は彼女で大変だったに違いないのに。再会してからこの乳母は、香月の心配ばかりしていた。
今もこうして、子供の時と同じく背中を優しく叩いてくれる。
失ったものも大きかったが――変わらないものが取り戻せたのは奇跡だと思った。

「本当に。……これも皆、倉嶋侯のおかげでございますね。あのお方には、感謝してもし足りない程の恩義を受けました。苦界に入ったにも関わらず、姫様があの様な御方に出会えたのは、天恵と申す外ございません」

「ええ。鷹信様に出会わなければ、こうして貴方がたと再会する事はとても叶わなかったわね……」

しみじみと呟いて、香月は今までの記憶を反芻(はんすう)していた。
そう。恐ろしい事はもうきっとない。鷹信は以前に比べたらすぐ側で、毎日会えるのだ。例え他にいくばくかの問題があろうとも、比べたら些細な事ではないか？

「――姫様っ！」

両腕を掴んで、苑寿はいきなり主を引き離した。

「ど、どうかした？」

もの思いを破られて、香月は眼を瞬(しばたた)く。

「何ですかこの寝汗。着物が湿っているではありませんか。倉嶋侯にお会いするというのに！　すぐ湯浴みなさって下さい、ほらっ」

鬼神の如き形相で、苑寿は手を振って彼女を追い立てた。

「ほらほら、さっさと動く！　今日はただでさえ登殿の日ですよっ！！　湯殿の準備も出来ておりますから」

「わ、わかった！　わかりましたっ」

――まだ時間は余るほどあるのに。

香月は苦笑しながら、乳母の言う通り形ばかり急ぐ事にした。湿った話が――着物も――大嫌いで実際主義な所も、相変わらずだと安堵しながら。

※※※※

国は王と、十七の侯爵位を受くる貴族によって支配されていた。貴族は侯・伯・子・準爵位を以って序列を成し、頂点に立つ国王と合議し政(まつりごと)を為す。

伯爵家の娘にも関わらず、借財により香月が遊郭立ち並ぶ箱庭『

皐乃街(さのまち)』の店に売られ、遊女となったのは一年近く前の出来事。
当時不器用が故に辛酸を舐めていた彼女を救ったのは、侯爵の中でも筆頭に近いと目される倉嶋家の主・鷹信(たかのぶ)だった。
とある事件で彼は毒を身に受け、危うく命を落とす所だった。それを救ったのが縁で、今現在香月は王都にある倉嶋邸に目下居候の身となったわけである。

「今日の登殿は十刻からだったな」

鷹信の問いかけに、長卓にて差し向かいで朝餉(あさげ)を摂っていた香月は「はい」と歯切れ良く返事をした。
食事や共有に使う中殿は他の者が起居する外殿と造りを異にしていて、窓は大きく縦長で玻璃(はり)が埋め込まれている。庶民の昔ながらの文化と、異国のそれとの折衷(せっちゅう)が貴族の屋敷の特徴だった。

「でも、もう半刻ほど早く出るつもりです。局内の仕組みや色々勉強しなければならない事がありまして」

「そうか。では帰ってからでも、琴を弾いてもらえるかな」

鷹信はにこにこしている。まるで、我が子を送り出す父親の様な笑みだ。香月は少しどぎまぎして、顔を赤らめた。
この屋敷に引き取られてから、彼がこんな見る者を虜にする様な表情を見せる機会が増え――毎日に近く会える様になったせいか――、そしてその度に、彼女の動悸は不規則に早くなるのだった。

「はい、必ず。……鷹信様は、今日も王宮に出仕されるのですか？」

彼の格好が屋敷での執務には少々正装に近いものだったので、香月は首を傾げる。領地の責務もある侯爵が、毎日王宮に出向く事は

少ない。あるとすればそれは、重大な決定事項を承認しなくてはならない時だ。

「ああ。少々皆で決めねばならない事があってね」

「もしかして、各府の予算についてでしょうか。ここの所、研医殿でもその話でもちきりです」

「そうか。確かに『現在の』研医殿では、どれだけの予算を割り振られるのか検討もつかないだろうからな」

鷹信は考える素振りを見せた。

「其方の局内の人事はまだ、定まらないのだろう？」

「……はい。恐らくは、それが原因だとも」

香月は表情を曇らせる。

皐乃街での働きを買われて彼女は長たる王后玲彰（おうごれいしょう）に研医殿に招かれた。彼女は自分を過大評価する性質ではなかったので、殿内が数ヶ月前あった事件のせいで慢性の人不足である事も理解している。

だがそれでもまさか――本当に局長にされるとは思わなかった。

「せめて局長を、仙丸様にして頂ければ良かったと思うのですが。あのお方なら、局内の人望も厚く経験も長い。妾よりも何倍も適任だと思います」

「尚暁（なおあき）殿か。確かに有能だと聞いてはいるな」

鷹信は真顔に戻ってじっと彼女を見つめていたが、ふと立ち上が

った。

「だが其方は自分にもっと自信を持った方がいい。玲彰様がお決めになられた事だ。きちんとお考えがあってのご判断だろう」

側近くに寄って、手を差し伸べ頬に触れる。励ます時の、彼の癖だ。

「私の命を救ってくれた時の事を覚えているか」

そのまま、ひたと香月の双眸を覗き込む。銀灰色の瞳はきりと澄んで、吸い込まれそうに美しい。

「……はい」

「あの時、意識を取り戻してから快復するまでも苦痛は続いた。死の方がどれほど良いかと思った時もあった。そんな私を、其方は懸命に看病してくれたな」

「鷹信様……」

「患者と共に其方は医者として闘ってくれた。――あの時の事を思えば、大抵の問題は乗り越えられると私も信じているよ」

この人に隠し事は出来ない、それは彼女もわかっていた。きっともう局内の軋轢（あつれき）など知れているのだろう。だからこそ、香月は頷くしかなかった。

――鷹信様に何もかも頼ってはいけない。

金銭の上でもう、充分に迷惑を掛けている。この上仕事まで寄りかかっては、彼女が望む目的さえ果たせない気がした。
あの苦界を出る時、香月は一つの誓いを立てた。
それはもしかしたら、途方もない望みかもしれない事。
到達するには、第一歩目で躊躇（ちゅうちょ）している場合ではないのは、頭ではわかっている。
だからその一歩目の任務が、今の所局内には誰一人として香月の味方がいないという、誠に心細い状況だとしても断る事は出来なかった。
研医殿に巣食う魔物退治――国王弑逆未遂事件の実行犯、前薬処方局長尾上の一派の残党の炙り出し――という玲彰の依頼は、不可能に近い難題に思えたけれども。

**柳煤竹（やなぎすすたけ）**

「新たに募った人員についての書類です。ご確認を」

堅苦しい科白（せりふ）を、器用なほど軽々しく青年は言ってのけ、上司の卓に書類を積み上げた。

「……新しい方々の書類、って。もう決まった人ですか？　それとも」

「恐れながら。予算編成までに人員数を決めよとの内示が玲彰様よりありましたので、貴女のお手を煩わせるまでもないかと配慮致しました。勿論、お気に召さなければ採用は即取り消します」

一見少女にしか見えない新しい上司――香月に向かって、仙丸尚暁は有無を言わさぬ笑顔で答える。

「現在の局員に付きましては、先日ご裁可を頂いた通り配備致します。この書類ですが、急ぎに付き本日中に目を通して頂けますか」

「あ、あの。今日は局長会議と玲彰様からの依頼の薬剤を仕上げなければな――」

「頂けますか」

顔は隙のない笑顔だったが、声にだけはっきりと苛立ちを顕している上に切れ長の目が全く笑っていない。元から十も年上な上に、押しの強いこの副局長が香月は非常に苦手だった。

「……はい……」

思わず頷く。ただ、一刻も早く彼と一緒にいる時間から開放されたいばかりに。

「玲彰様からのご依頼の方は、私にお任せになって結構ですよ？長には長の職分というものがありますのでね。それをせずして、局長など務まるはずもありませんし」

元通り語調は和らいだが、内容そのものは皮肉に満ちていた。香月も内心全くその通りだとは思ったが、好きでこの地位にいるわけではないので何とも言えない。反論出来ずに黙り込む。

――私って、進歩ない。

男版だけれども、尚暁は皐乃街時代苦手だった先輩遊女の葉山に雰囲気が似ていた。

自分を最初から目の敵にする所もそっくりだ。自我が強くて、自分にも他人にも高いものを要求する。きっと嫌われている理由も同じなのだろう。

「わかり……ました。お願いします」

尚暁が局長室から出て行くのを見送って、香月は椅子の背もたれに倒れ込む。

「――どうせ、意見を言っても聞き入れてもらえないのに……」

ぼそりと呟く。

現在の局員は生き残りだけあって古参の者が多い。貴族出身、反

骨精神が旺盛な故に尾上の権力に屈しなかった。それは畢竟(ひっきょう)、扱いにくいという事。
香月は彼の置き土産をちらりと見て、溜息をついてから局長室をぼんやりと眺めて動かなかった。
広い室内には天井まで所狭しと本棚が並び立ち、窓付近以外内装も良くわからないという部屋。
生家も本が多かったけれども、蔵書数は比較にならない。

――ここは、皐乃街とはまた違った意味で特殊な世界だ。

建物からしてが、見た事もない様な螺旋(らせん)を描く造りになっている。中央にある内廊下を巡って各局は配置され、常に機材の動く音と薬の匂いが充満していた。全部で二十あるという局室は、一体どこが何の局なのか、入って一ヶ月の身でいきなりの激務で覚える暇もなかった。
ましてや一番接する機会が多い部下が、あの態度である。
教えてくれと、最初のうちは言っていた。だがその度に彼は不快さを隠そうともしない。続けば聞く気もなくなろうというもの、今では向こうから来る以外に自分から決して話しかけない。そうしたら彼は勝手に仕事を進めて来る様になった。

『局内にまだ、尾上の息がかかった者がいる可能性がある』

玲彰は香月の初出勤の時に、人払いをしてそう言った。
先の楠王弑逆未遂及び葉山殺害事件の首謀者として前局長尾上が捕らえられた際、薬処方局そのものにも刑吏府の介入は及んだ。
結果、平生より彼に与(くみ)していた者達は一人残らず一旦は縛に付く事となったが――結託の物的証拠は見付からず、管理不行き届きという名目で免職に処分はとどまっている。

『其方に突き止めてもらいたいのは、奴等の結託を記してある筈のその文書だ。尾上や環は勿論、加担したと思しき者の屋敷は全て調べ尽くしたが、どこにも見付からぬ』

初めて拝命した任務。緊張が走ると共に、多少の疑問も生まれた。

『書類があるというのは確かなのですか？』

香月の問いに、玲彰は明言しなかった。

『可能性を潰して行ったらその結論に達しただけで、はっきりとした情報はないが、こういった謀（はかりごと）には不可欠だろう。存在すれば、裏切りを防ぐのにも使えるからな』

捕えた者達のどこか不可解な言動は、“見付かるはずのない脅威”を推理させるからだ、と彼女は無表情に告げた。

『麻珍毒の数が依然として減り続けている事からも、残党がいるのは間違いない。もしかしたら“奏の鳴声”を掘りあてる羽目になるやもしれんが』

最後に彼女は、管理体制を整えるのも香月に一任すると言い置いて会見を打ち切った。

――奏の鳴声とは、玲彰様も訝（おか）しな事をおっしゃる。

記憶にある限り、それは幸いをもたらす奇跡を差すのではなかっただろうか。

この国に生を享（う）けた者ならば、赤子でも知ろうかという神鳥の伝説。一声にして極楽の音色を世界に与えると、伝えられている。

勿論「ありえない」方の話であろうとは香月でさえもわかっているが、非論理を認めない上司に掛かれば、奇跡もものの例えになるのかもしれない。

山積みになった書類に再び目を向けて、彼女は可能性を考える。

新たな局長を快く思わない部下。常識的に考えても、年端もゆかない自分に膝を折るのは屈辱なのだろうとは思うが。

――仙丸様がその『奏』という事はないだろうか。

疑念に神経を研ぎ澄ませていたので、扉を叩く音に香月は驚きの余り心臓が止まるかと思った。

「失礼します。副局長はいらっしゃいますかー？」

部屋の主の返答も待たずに呑気な声がして、扉の陰から金色の癖毛の青年が顔を覗かせた。

「あ、すみません。いないみたいですね」

「……仙丸様なら、調合室にいませんでしたか？　玲彰様からの依頼がありましたので」

何とか笑みを形作って香月が言うと、青年は首を傾げ髪と同じ色の眉をひそめた。

「そうですか。じゃあ入れ違いになったのかな。……どっちにしても、作業が終わるまで声は掛けられませんねえ」

「斎条さん、何かお困りなのですか？」

二十七歳とは思えない愛らしい顔をさも困惑に歪めていた彼は、慌てて手を振って打ち消した。

「い、いえいえ、局長のお手を煩わせるような事ではありませんから」

「でも、貴方が上司の仙丸様を探すのは決まって重要な裁断の時ではありませんか」

青年――斎条弥（さいじょう・あまね）は仙丸と同じく『生き残り』の一人である。とは言え昨年入ったばかりの新参者でもあり、地位がいきなり降って沸いたという点では香月の仲間と言えた。

まだ若輩の身ながら、副局長の次位に当たる施薬殿の責任者としては一応卒なくこなしている秀才らしい。そのきさくな性格は、人見知りな彼女にとってもいささかの救いとなっていた。

「もし良ければ、私も何かお手伝いを――」

尚も彼は勢いよく首を振る。地毛らしい繊細な髪が、動きに合わせて軽やかに跳ね上がった。

「いやホント、とんでもないです！！　局長にお越し頂いたりしたら、僕が副局長に大目玉を食らっちゃいますっ」

香月の笑みが、凍りつく。斎条は「しまった、言っちゃったよ」という言葉を、声には出さず表情であます所なく示した。

「それって……どういう事でしょうか？」

「何でもないです！　『局長を現場に近づけるな』って言われてい

たなんて、絶対そんな事ありませんから！」

「……言われていたんですね」

うっ、と更に彼は言葉に詰まる。まるで悪戯を見つかった子供の様だ。

香月の表情を見て気まずくなったのか、笑って言い繕った。

「あ、ホラ。多分ですけど、副局長は着任まだ間もない局長に気を遣ってそうおっしゃっただけで他意はないんじゃないかと思いますよ。お気になさらないで下さいね」

それじゃっ、と斎条は上司の答えを待たず、来た時同様勝手に去っていってしまった。

「あ！　ちょっと待――」

伸ばした手は空中で停止したまま。ややあって、力なく机に下ろすと、彼女は項垂れた。

与えられた仕事だけ、やっていろという意味なのだろう。

――自分の理では量れない人間っていうのは、どこにでもいるのよ。

かつて自分にそう言って励ましてくれた人の事を思い出す。

「……こんな事で、落ち込んでいたら駄目よね、姐（ねえ）さん……」

自分はまだ、ここでは新参者――異物でしかない。ならばせめて。自らを奮い立たせるようにして、取りあえず香月は目の前の課題を早急に片付けるべく書類をめくった。会議の帰りに、少しでも局

内を見て回る時間を作る為に。

## 瑠璃紺（るりこん）

王が執務を行う内宮（ないぐう）の大殿、亳令宮（はくりょうきゅう）は年に一度の重要議題を前にして緊張した空気を孕（はら）んでいた。

国王楠を正面の最上座に、脇には滅多に会議に顔を出さない筆頭侯爵箕浦と王后玲彰が顔を揃えている。

次位に席を得る鷹信にとっては、最近人口密度が高い――という程度のもの珍しさしかなかったが、王者の覇気に満ち溢れた楠王と人離れした容貌の玲彰が並ぶのは、見る者に名状しがたい威圧感を与えるらしかった。

これで玲彰が単なる后として愚見を挟むならば、姻族の専横と非難されるのだが。幸か不幸か、研医殿始まって以来の天才と謳われた彼女の見識は、十七侯爵にとっても端倪（たんげい）すべからざるものとして畏れられていた。

気が向いた時にしか会議に参加しない事を除けば、国王以上の砦になったかもしれないとも噂されている。

「……ではこれより、各府の予算事案の協議の続きを行いたいと思います」

進行役の鈔納府（しょうのうふ）――財政を司る部署である――長官、鏑木（かぶらぎ）候の重々しい声が響き渡った。

「本日は雅綾府（がりょうふ）及び研医殿の予算についてです。お手元の書簡をご覧頂きまして、各々の説明をお聞き下さいませ」

研医殿、の言葉に周囲から訝しげな囁きが起こった。

書簡を流し読んだ鷹信も、ちらりと玲彰の顔を一瞥する。

――突貫工事で人員をお決めになられたのだろうか。

府の予算は人員数と前年度実績、それに今年度の事業予定の内容によって割り振られる。今朝香月に聞いた時は薬処方局のみがまだ人員数が決まっていないとの話だったが、こうして現に提出されている。理由は一つ、彼女が与り知らぬ所で首尾が進んだとしか考えられない。

「――特に異論がなければ、申請のあった枠にて決議を行います」

鏑木の声が凛と響いて、一同を取り巻いていた緊張の気配が薄れる。

あたかも、これは既に終わって次の審議を迎えるばかりとの如く。

侯爵の中でも中堅と目される鏑木は、四十半ばの神経質そう片眼鏡が特徴の男だった。

色白で文弱にのみ印象を残す官僚肌の彼はまた、この国きっての『財務職人』としても知られる。

即ち、衣食住よりも数字が大事という職業人で、報告書の数字が一文字変わっただけであっても全体の余波を見抜く特技を持っていた。

「研医殿におきましては、年次の予算に加えまして薬処方局の新薬開発、及び人件費の増額の要望を受けております」

「お待ち下さい――人件費とな。人ならば減りこそすれ、増やすべき理由は見当たりませぬが」

と声を上げたのは、宮廷のご意見板と畏怖される老侯網淵であった。

齢八十を数える彼は、一見白髭の好々爺にしか見えない。だが例

え相手が国王であっても怯まず諫言する手厳しさから、『言を通したければまず彼を陥とせ』と噂されている。

「これには重大な理由がある。私は本日、遊里(ゆうり)皐乃街について新懸案を提出致します」

玲彰の返答に、誰とはなしにざわめきが起こった。

「網淵候のみならず、諸侯のお手元にもその旨の書簡があると思うが、漏れでもあったろうか」

網淵侯爵は白筆にも似た眉をひそめて書簡を睨んでいたが、ふと苦笑して顔を上げた。居並ぶ侯爵達も慌てた様に手元の小冊子――上質の紙を束ねて背を糸でかがり綴じされたものだ――を見返す。

一同の中で楠王と玲彰の父の箕浦侯爵、そして鷹信だけが顔色一つ変えないでその場を見守っていた。

「これは儂も耄碌(もうろく)したもの。気づきませなんだ。しかし玲彰様、王族の方が皐乃街に干渉するなど、前例がございませぬぞ」

「皐乃街は他の町と同じく、一自治区に過ぎぬと考えている。なれば住まう者達を気遣うのは当然の話。侯爵はあの中に生きる民を何と看(みな)做しているのか」

「仰る事はご尤もでございますが、単なる街ならばあれほどの独自な法は罷りますまい。そもそも遊郭という生業自体が、庶民のそれとは全く違った仕組みに成り立っているではありませぬか」

「私も網淵候と同意見にございます。あの街は独自に発展しているからこそ、現在の様な美しさを保ち続けているのですよ」

網淵の横からそう口を挟んだのは、雅綾府長官の元良(もとら)侯爵である。
「玲彰様の慈悲深いお考えはわかりますが、研医殿の人員も無限に補充出来るわけではありますまい。派遣というならば、他の街になさっては如何ですか？」

自称玲彰の信者とあって、元良の福福しい丸顔には追従の色が浮かんでいる。
生身の女性に興味がないと、兎角の噂があるこの男は芸術家としては超一流の腕前を持っていて、描いた絵が動き出した事があるという伝説の持ち主であった。
鷹信がちらりと楠王を見ると、彼は元良の濡羽の様な黒髪を忌々しそうに眺めている。どうも元良の油っぽい外見が、つくづく気に入らないらしい。
くだらぬ、と玲彰は切り捨てた。

「一体この国のどれだけの人間が、あの街に金を落としたと思うのだ。経済的に介在している以上、独自文化であろうとなかろうと国の一部だ。それに其方等は、あの街に通って病に罹った客が、外にそれをばらまいても仕方ないで済ますと言うのか」

他の侯爵達の反論はない。彼等の応酬に宮内は先程までとは違い、困惑の気配が訪れた。
老候と玲彰の舌戦は実にいつもの事であるから仕方ないにしても、皐乃街は侯爵達にとって異国と同じ扱い、開けてはならない匣の様なものであったからだ。
しかも先般、他ならぬ国王自身が足繁くそこに通い、大層な金を落として遊女の一人を寵愛している。
彼の妻たる玲彰は女性らしい嫉妬や邪推をする様な人間ではない

と知れ渡っているが、周囲の方が何かと気を遣わざるを得ない、繊細な問題だ。

「仕方ないなどとは申しませんが。街にも医者がいるでしょう。彼等を再教育なさる、というわけには行かないのですかな？」

「知っている者も居ようが、私は先日あの街に行ってみた。もし医者を再教育するのなら、一度街から引き上げて研医殿と入れ替えをすべきだ」

一同にどよめきが起こった。

「……これはまた、思い切ったお話で」

網淵に怒りの様子はない。呆れた様な声音には、賞賛の意すら籠っている。

二人がよく衝突するのは、それだけ率直に意見を述べているからとも取れた。他の侯爵であれば、自分の立場を考えて計算をするものを、この二人にはそれがない。

目的の為には手段を選ばない玲彰と、慣例を遵守する彼との方向性の違いは常に議論を過熱させる。

だが大体において、網淵は納得しさえすれば引き際を見極められる分別を持っていた。

「皐乃街に王の力を介入させるのは、悪くない案だと思います。むしろ取り込むのならば半端にではなく、一つの領土として公平に取り入れるべきです」

そう口を挟んだ鏑木を、網淵はじろりと睨んだ。

「お主、もはや租税の収益を試算しておろう」

鏑木の片眼鏡の奥の瞳が、薄く笑みを浮かべた。

「皐乃街があの場所に押し込められてから百有余年の歳月が経っております。その間、生産性がない事を理由に租税は免除されて参りました。しかし、毎年納められてきた上納金とは、街の盛況を考えれば些細なものかと。見直しを掛けるべき時が来たのかもしれませんな」

他に何かご意見は、と彼は周囲を見渡した。

「異を唱えるわけではありませんが、その決定の際には原案を全員に見せていただけるのですね」

鷹信の問いに、鏑木は「勿論です」と眉を上げた。

「お待ちなされい、まだ儂は是とは申して居りませぬぞ」

網淵の食い下がりに、玲彰はいつも以上の冷ややかな眼差しを向けた。

「旧弊を守っていては、民は倦むばかりだ」

「しかし問題の根本がそこではありますまい。民が身売りをする時勢を変えなければ――」

その通り、と初めて玲彰は網淵に同意を見せた。

「身売りする場所がなければ、商売も成り立つまい。私はいっその

事、皐乃街自体をなくしてしまえば良いと思っている」

※※※※

「玲彰様。少しばかりお時間を頂けますか」

会議が一旦休憩に入った時、楠王が席を外した時を狙って鷹信は目指す相手に近寄った。玲彰が一人になるのを待ったのは、特に疚しい所があったわけではない。

内容を聞けばあの国王は間違いなく面白がって彼を揶揄(やゆ)すると思ったのだ。

「構わぬが」

無表情な双眸を上げただけで、動こうとはしない。彼は片膝を付いて目線を下げると小声で囁く。

「薬処方局の事で……お話を伺いたいのですが」

ああ、と事もなげな頷きが返ってきた。

「委細は後で話そう。少し話が長くなるかもしれない」

「――畏まりました」

その一言で彼はある予測に思い至り、故にあっさりと引き下がった。もし己の考えが当たっているなら、また別の手を打たねばならない――

「おお、どうした鷹信。また香月の事で何か心配性の虫が騒ぎ出し

たのか？」

にやにや笑いの主君が席に戻って来たので、慌てて鷹信は退散の姿勢を取った。

その背中をむんずと掴まれる。

「まあそう照れなくとも良いではないか。今まで公務一筋の朴念仁で来たお前の事、慣れない駆け引きに迷いも多かろう。遠慮なく相談しろといつも言っているじゃないか」

「――迷いなんかありません」

「嘘を申せ。顔に出ているぞ」

鷹信は休憩の為空席が目立つ卓を一瞥して反撃した。

「陛下こそ、いくら元良候が玲彰様の絵を描きたいと散々言っているからって、あそこまで睨む事はないのでは？　ご本人は気づかれていない様ですが」

「……何の話かな」

「自覚されていないのでしたら結構です。玲彰様も、王族の方は肖像画を残さなくてはならないのですから、この際引き受けては如何かと」

冗談じゃない、と怒りを露にしたのは絵を描かれる本人ではなかった。

「お前も見ただろう、あの男の粘着質な視線を！　どうせ現実には

何もしないだろうが、あんなのと長時間二人一緒にいるのかと思うだけで私は嫌だ！」

「皓慧（こうけい）様、絵を描かれるのは私ですが……」

苦笑する鷹信と渋面を見せる楠王、二人を見比べながら玲彰は不思議そうな顔をしている。

「それに倉嶋候。私は慣例には興味がないし、絵を描かれる間動けないのだろう。そんな時間があれば研究していたい。だから今後も受けるつもりは全くないぞ」

楠王は我が意を得たりと言わんばかりの表情を浮かべた。

「というわけだ。人の事より鷹信、お前香月とはその後どうなった？　上手くやっているのか」

「ご心配には及びません」

いつの間にか不仲を解消したらしく、ここの所楠王は上機嫌な日々が続いていた。

玲彰はあまり以前と変わらない様な気もするが、こうして並んでいても二人の間に漂う雰囲気が変わったので、やはりそうなのだろうと思う。

歓迎すべきだとは思うが、こちらにまで水を向けて来るのに鷹信は辟易していた。

「お前の事だ、どうせいつまでも手をこまねいているのではないのか？　大事にするのも良いが、逃げられぬ様注意するのだな」

いつまでも続きそうな主君のお節介から逃げるべく、彼はそそくさと自分の席に戻った。かつては漁色で聞こえた国王、確かに男女に関しては詳しいのだろうが――

少なくとも、勘は鋭い。

――そんなに顔に出ているのだろうか。

次の議題の資料を眺めながら、鷹信は己の整理しきれない感情をひとまず頭から追い払った。

## 鴇（とき）

研医殿の最上階での局長会議を終えて、香月は一人目指す場所に向かうべく昇降機へと足を踏み入れた。

施設に入ってまず最初に彼女を驚愕させた機械仕掛けのこの匣も、考え事をしながらの今の注意を逸らすものではなかった。

内部の壁には幾つかの把手（とって）が突き出している。その内、『四』の把手を下に下げると、匣は振動する様な音を立てて動き出した。

研医殿において、彼女が勤務する薬処方局は四階。一階は共有施設で、二～四階はそれぞれの分野の研究棟となっている。

一階位なら階段を使いたいと思うのだが、おかしな事にここには階段というものが存在しない。部屋が周囲に位置している為、確かに中央の吹き抜けは大きなものである。だが、昇降機がもし故障したらどうやって移動するのだろうか。

そんな素朴な疑問さえ、ここには答えてくれそうな者はいないのだけれども。

会議は定例のものなので、新しい報告事案などを連絡する程度と短かった。人前に立つのが大の苦手の彼女だったが、なんとか仙丸の提出した採用人員の件を報告して終了。局長達の中には、技術者出身も少なくないと聞いている。

そのせいか、いきなり着任した薬処方局の長を軽んじる者はいなかった。――逆に言えば、無関心だったとも取れたが。

四階に降りると、香月は局長室とは逆方向に向かって歩き出した。

「どちらに行かれるんですか、嵯峨局長」

背後から掛けられた低い美声に、ぎくりと立ち止まる。

「もしかして、施術局にご用ですか」

恐る恐る振り返ると、すぐ後ろに壁の様に聳(そび)え立つ胸板に視界を遮られた。顔を探して上を見上げる。
不意に彼女は息苦しさを感じた。

「……姉小路局長」

姉小路匡(あねこうじ・たすく)は民間出身の施術局の責任者である。年は三十、六尺（約１８０センチ）余りの長身な上に武術家顔負けの体格を持っており、顔もそれに見合った彫りの深い顔立ちをしていた。朝剃刀を当てても昼には髭が伸びてくるという顎には既に無精髭が発生して、ますます恐いご面相を醸し出している。

「患者さんのいる施設の様子を見ておきたいと常々思っていましたので。……よろしいでしょうか？」

姉小路は笑みを浮かべた。そうすると恐さは薄れて、人の良さそうな印象に変わる。無骨な態度ながら、悪い人ではないのだろうと思った。

「勿論歓迎致しますよ。薬処方局とうちは、連携が第一の深い仲ですからね」

ご案内しましょう、と彼は先に立って歩き出した。
背後から気配が遠ざかって、香月は胸を撫で下ろす。

――いい人なのはわかっているのに。

味方というほどではないが、誰とでも分け隔てなく接する姉小路は嫌いではなかった。しかし、皐乃街で散々男に恐怖を与えられ続

けた彼女にとって、野生的な風貌の男性というのは生理的に受付けにくくなっているらしい。
偏見にもなりかねない自分の怯懦（きょうだ）を申し訳なく思いながら、香月はその広い背中に従って歩みを再開した。

「ご存知かと思いますが、こちらでは軽症の患者は取り扱っておりません。民間の施術院では手に余る難病患者を引き受け、それと共に技術の研鑽（けんさん）を行っております」

施術局の扉を開けながら、姉小路は説明し始める。

「失礼ながら、貴女は嵯峨伯の娘御と伺いましたが」

『香月』は遊郭皐乃街での源氏名だ。彼女は本名を『嵯峨紫泉（さが・しせん）』と言った。

「――はい」

彼は感嘆の声を上げた。

「倉嶋候の折にも、もしやと思っていたのですが。――お父上には私もお世話になりました。遺志をお継ぎになられたとは、きっとお喜びになっているでしょう」

扉の向こうには、真っ直ぐに伸びた廊下の両壁に幾つもの扉が向かい合って並んでいた。内一番手前の右側の扉を引き開けると、中には診療台と椅子が幾つも設置されている。

「今は使用されていないので、ゆっくりと見る事が出来ます。こちらで身体を消毒して頂けますか」

そう言うと、彼は机に置いてある薬瓶と布を彼女に手渡した。
手指を薬剤を浸した布で拭う。

「術着も今だけお着替えになってください」

「はい。ありがとうございます」

いつの間にか手にして来た清潔な術着を受け取って、着物の上から着用する。
研医殿に勤める者に共通の布着は外套に似た作りになっていて、左の鎖骨付近と脇腹辺りの二箇所で付属の紐を結んで固定する。手首も袖がはみ出ない様窄(すぼ)まった形だ。
ただ色だけは、局によって分けられているのでわかりやすい。ちなみに施術局は白緑(びゃくろく)が使用色だった。

「では、次の部屋に参りましょうか」

姉小路に促されて、その後も次々と室内を見学させてもらった。緊急の治療用の部屋が幾つか、検査用の部屋、患者達がいる病棟。
局内はきちんと手入れされ、清潔に整えられている。
独特の雰囲気に気分を高揚させながらも、香月の内心は複雑だった。
――本当なら、私はここに来るはずではなかったのだろうか。

施術する場所があるのなら、野にあって人々を治療したいと願う彼女には、臨床こそが相応しい。鷹信が死に掛けた時、公には出来ないとして確かに局長不在の薬処方局を治療場所に使った。仙丸を説き伏せたのも、この姉小路の手を借りる手配をしたのも玲彰だったのだ。

だからこそ、今回の自分の立場には納得行かないものを感じている。
今日は玲彰が王宮での会議に出席していて不在だが、早いうちにもう一度会って話をすべきだと思った。
「……お父上がご存命の時、私は時折嵯峨邸に伺った事があったのです。玄達様は研医殿においても中枢を担うべきお立場にありながら、ごくお若い内に隠遁しておしまいになられた。後を慕って、多くの学士が門扉を叩いたものです」
病棟内を巡る間、姉小路は父親の思い出話を聞かせてくれた。苑寿やごく親しい使用人以外に亡き人を偲ばせてくれる相手に出会って、驚くと共にしんみりとした気持ちになる。
自慢の父が第一線で働く人からも尊敬されていたのだと、嬉しくもあった。
「父はお客様がいらしている時は、私を部屋に決して近づけなかったものですから……もしかしたら、過去にお見かけしているのかもしれませんね」
「はは、やはりそうでしたか。ひょっとしたらお父上は心配だったのではないですか。嵯峨伯の姫君の噂は、学士の間では結構有名でしたから」
香月が怪訝そうな顔をすると、彼は決まり悪そうに頭を掻こうとした。
「ああいけない」と手を下ろす。
「噂ですか？　一体どんな」

「いやまあ、悪い噂ではなかったので……ご心配には及びませんよ」
丁度近くを通りがかった患者に声を掛け、姉小路の話は中断された。話を逸らされた様な気がして内心彼女は首を傾げる。
「それより、玄達様亡き後ご家族も散り散りになられたと聞いて、我々もいささか案じてはいたのですが。一体どうされていたのです？　いつの間にやら館も無人になってしまっていた様ですし」
今度は香月が言葉に詰まった。
「私は……」
適当な嘘を探して焦る。元々嘘が下手なので、咄嗟の誤魔化しすらままならない。
かといって。言えるわけがない、本当の事なんて。
「ああ、先生。こんにちは」
香月が黙っていると、今度はまた別の患者が通りがかって挨拶してきた。
どうやら患者には自由に歩く事が出来る者も多いらしい。病棟内限定だろうが、寝巻き姿でうろうろしたり患者同士で談笑している者も中にはいた。勿論、車椅子に載ったりしていて、元気そうな格好ではなかったが。
「――姉小路局長は、患者に慕われている様ですね」
「え、ああ。いやあ……そう言って頂けると、何だか面映いです。私はただ出来る事をやっているだけですからね」

おもむろに、彼は病室の窓際に佇む一人の患者を見つけて足を早めた。

「舜橙（しゅんとう）さん！　昼は窓に寄ってはいけないって言ってあるでしょう」

舜橙と呼ばれた男は、悲しげな表情で何も言わずその場を離れた。上司の声に気づいたらしく、廊下の向こうから女性局員が出てきて男の後を追う。

「あの患者は……？」

力を落とした背中には筋肉が全く見られず、老人に見えた。

姉小路は軽く息を吐く。

「月下病（げっかびょう）と我々は呼んでいます。日光に当たると、筋力が衰えてしまう病気なのです」

「呼んでいる……？」

「まだ症例が多くはないので、正式名称の申請はなされていないのです。それで仮の名前を」

通常人は、いや生き物全ては日光を浴びなくては身体の成長を促す事が出来ない。生命の本能がそうさせているのに、背かなくては生きていけないとは。

香月は男の悲しそうな顔を思い返した。

「原因はまだわかっていません。日光に含まれる光の性質が、筋肉の組成に何らかの影響を及ぼしているのは間違いないのですが。二

階の連中にも日光の調査を頼んでいる所でして、月の光には筋肉が反応しない為、月下病と」

一旦言葉を切って、ほんの少し険しい表情をした。

「彼は、ああ見えてもまだ二十六歳なのですよ」

「そうですか……」

胸が締め付けられる感覚を覚えた。

許されるなら、治療の手伝いに加わりたい。

「とまあ、それはさておき。これで施設は一通りお見せしたと思います。いかがでしたか？」

彼女の沈黙の内容を知ってか知らずか、姉小路の問いは冷静そのものだった。

「大変為になりました。ありがとうございました」

「いえいえ、これからも似たような分野で働く者同士、よろしくお願いします」

姉小路は笑って、右手を差し出して来た。

一瞬躊躇った後、香月も自分のそれを重ねて握手する。

長身の彼は手も大きく、華奢な彼女の手はまるで赤子の様に見えた。

――まるで今の私そのものだ。この小さな手に、出来る事は少ない。

「あの」

思わず口を開いた。

まず、一人でも味方を見つけなければ。あの時の様に。

「ご迷惑でなかったら、これからもちょくちょくこちらに伺ってもよろしいですか」

姉小路は少し眉を上げたが、すぐに相好を崩した。

「勿論ですよ。ぜひ、おいでの際は私に連絡を頂ければ――いつでも、歓迎致します」

※※※※

この世界にやってきてからは周囲にあまり好意的な態度を取ってもらった記憶がないので、姉小路の対応は嬉しかった。

あからさまに態度に示すのは仙丸位ではあるが、局内では誰もが彼女を腫れ物の様に扱う。これが本当に下っ端の新人ならば、それ相応の扱いをしてくれたに違いないのだが。

――姉小路局長には、父上の事を何か聞けるかもしれないし。

自局に戻るべく廊下を歩きながら、香月は亡き父親の不可解な死に思いを馳せた。

父玄達は何者かによって毒殺されたのだ。

亡くなった日、刑吏府の役人が通報を受けて駆けつける前に彼女はその結論に達していた。

最初に父の異常を発見したのは、他ならぬ娘の自分だった。

衝撃に言葉もなくただ震えていたから――今となっては後悔する

ばかりだが――、亡骸を検めたわけではない。それでも自然死でない事は明白だった。反り返った身体、苦悶に見開かれた瞳、開ききった瞳孔。今でもありありと脳裏に浮かぶ。

正に件の事件で殺された、葉山と同じ状態で亡くなっていたのだ。

――父上もまた、麻珍毒で殺されたとしたら……。

麻珍は現在研医殿にしか存在しない、古代の猛毒だ。刑吏府は死亡原因をあろう事か心臓発作と決め付けた。もし麻珍が原因だとしたら、亡骸を調べればすぐわかるのだ。研医殿の大失態に繋がるからではないかと香月は思っている。

玲彰が知らないと言うのは本当だろう。当時麻珍は、尾上の管理下にあった。

だが理由はわからない。伯爵といえども十七侯爵の係累でもなく、代々学者を輩出して来た他には彼ら――研医殿の利益を横取りしようと目論(もくろ)む者達――に恨まれる筋合いなどない筈だ。

――ただ一つ。父上が「何かを知ってしまった」場合を除いては。

先ほど姉小路にも言った通り、父親は客人に娘を会わせるのをひどく嫌っていた。だから彼女は訪ねてきた人間の内容は疎(おろ)か、顔すらほとんど覚えていない。例えば偶然庭に出ていて馬車から降りた姿を遠巻きに――という程度だ。

謎の死と、いきなり降って湧いた嵯峨家の窮状。

姉小路の話が、少しは真相への突破口になれば良いのだが。

軽く戦慄を覚えながらも局に戻ると、山積みの書類を抱えた斎条がちょうど、左手にある調合室に入ろうと苦戦している所だった。

「あ、開けますよ」

そう言って近寄り、先回りして扉を開けてやる。

「局長――」

だが斎条は香月を見るなり、顔色を変えた。

「どうか……しましたか？」

「い、いえ。ありがとうございます」

その狼狽ぶりに違和感を覚える。部屋に入った彼を見届け、扉を閉めようとすると、室内にいた他の局員が数人目に入った。

内目が合った者もいたが、一瞬驚いた様子を見せた後、不自然に目を逸らされる。

斎条が振り返り、おずおずと口を開いた。

「あ……あの。副局長が探していましたよ」

何か答える間もなく、彼はさっさと部屋の奥に向かって遠ざかっていった。その背中を見送って、香月は軽く息を吐く。

――「また」なのか。

この状態には覚えがある。皐乃街で葉山が殺された直後、誰もが香月を疑って噂しながらも直接関わるのを避けていた時と同じ――

怒りに心臓の鼓動が早まった。言いたい事があるのなら、はっきり言ってくれればいいのに、と。

「局長、どちらにいらしていたんですか」

故に背後から聞こえた永久凍土級の声音の持ち主に、八つ当たり半分でいつもよりは強気で対峙した。

「――何かご用ですか、副局長」

頭一つ以上高い位置から降り注がれる視線はともすれば、痛みを覚えそうな程悪意に満ちていた。今日はいつもその端整な顔に張り付いている、愛想笑いさえも浮かんでいない。

「会議はとっくに終わったのではありませんか？　行き先も告げずにふらふらと出歩かれるのは責務ある立場としては歓迎しかねますね。見学に来た子供ならばいざ知らず」

「私は軟禁されているわけではありません。――それとも、机の前以外にいてはならないと、玲彰様からでも命じられたのでしょうか？」

仙丸が玲彰に傾倒しているのは明らかだった。それで皮肉を投げてみる。

それには答えず、彼は踵（きびす）を返しつかつかと局長室に向かって行った。

乱暴に扉を開けてこちらを振り返る。

「とにかくお入り下さい。決裁を仰ぎたい書類がありますので」

書類、の言葉に仕方なく部屋に入ると、彼は即座に扉を閉め内側から鍵を掛けた。その有無を言わさない仕草に香月の堪忍袋の尾が切れる。

「やめてください。鍵なんて掛けなくても、仕事があるなら勝手に

出たりはしません」

「ほう、では『仕事がない』と思われたから、あちこちぶらぶらしていたというわけなのですか？　見上げた根性ですね。流石――学問一辺倒の我々とは考え方が違う」

仙丸の含みある嗤(わら)いに、彼女の顔が屈辱で赤く染まった。

この人はもしかして、何か自分について知っているのだろうか。

「揚げ足を取らないでください！」

「だってそうではありませんか？　仕事とは与えられるのを待つのではなく、自ら探して得るものなのですよ。新人でさえもわかるものが、局長の肩書きを持つ貴女におわかりにならないとは。残念でなりません」

「じゃあ、ここから自由に現場に出入りさせて下さい。現場の仕組みを知らなければ、仕事の内容なんてわからないじゃありませんか」

「ではお伺いしますが、局長は実際に患者の治療にどのぐらい当たっていた経験がございますか？」

香月は答える事が出来なかった。

物心ついてから薬学書や医学書に馴染んではいたものの、実際に患者を診た経験は父親の観察の元何度かと、皐乃街に入ってからのものしかない。

「だから」局長などにされても困る、と思い続けていたのである。

「ろくに実践もない人間に現場をうろうろされても、足手まといになるだけなのですよ。せめて邪魔にならぬ様、大人しく椅子に座っ

ていてもらいたいものです」

最初の慇懃(いんぎん)さは影も形も見当たらない、仙丸の豹変ぶりだった。

「……それが貴方の本音なのですね。よく、わかりました」

奥歯をぎり、と噛み締めながら呟くと、さも意外そうに彼は眉を上げた。

「本音？　とんでもない。隠していた覚えはありません。局長こそ、我々を騙しおおせると思わない事です」

一体何の事を言っているのかわからないが、嫌な予感がした。これ以上彼と同じ部屋にいたくなくて、香月は鍵を開けようと扉に近寄る。

「――とにかく、もう結構です。決裁が終わったら呼びますので、出て行って下さい」

把手に手を掛けたその時、彼女は不意に気配を感じて振り返った。強い力に押されて、背中が扉にぶつかる。

「……遊女上がりが、偉そうに私に指図するな」

仙丸の右手が、術着ごと彼女の胴体を掴んで扉に押し付けていた。左手は華奢な顎を容赦なく鷲？みにしている。無理やりに上向けた顔、その白い首筋に唇を寄せて彼は囁いた。

「あの倉嶋侯ほどの人物を篭絡(ろうらく)したのだ、さぞかしの悪女かと思えば。……見ているがいい。その化けの皮は、私が必ず剥いで白日の

元に晒(さら)してやる」

掴んだ身体を床に投げ出す様にして、手放す。

体勢を整えようと足掻く香月を見もせずに、彼は扉を開け静かに局長室を出て行った。

**鴉（とき）（後書き）**

脚注：ちなみにこの世界の時刻は一時間＝一刻でお送りしています。

宵八刻は、午後八時とお考え下さい。

**藤納戸（ふじなんど）**

「どうしたのだ、香月」

鷹信の気遣わしげな問いに思わず顔を上げた。

時は既に宵八刻を過ぎている。普段洋装を常としている彼だったが、何事もなければこの時間帯には寛いだ姿になるらしい。白無地の襦袢（じゅばん）に白群（びゃくぐん）色の長着、それに鉄紺（てっこん）の帯を締めた姿は、組み木の造形美を極めたこの部屋にあって芸術的な調和を見せていた。

当初香月も見慣れぬせいか、衝撃を受けつつも思ったものである——長身だと和装が似合わない、という風説は嘘だったのだと。

その鷹信は、脇息にやや凭れかかっていた体勢を立て直して、こちらを心配そうに窺っている。

＞i２３８３５—２１２５＜

「手が止まっているぞ。……研医殿で何かあったのか？」

倉嶋邸に戻って後、今朝方の会話通り彼女は鷹信の自室で琴を演奏していた。皐乃街で客となって以来、彼は香月の演奏を楽しみにしてくれる。こちらに引き取られてもそれは変わらない。

多忙な公務の合間を縫って、時間さえあればそれをせがみ——彼女もまた、当たり前に要望に応えるのだった。

「何でも……ありません」

「ならば良いが。もし疲れているのなら、また今度の機会でも」

「い、いいえ！」

思いがけず強く打ち消して、香月は顔を赤らめた。
彼女にとって琴を聞かせるこの時間は、鷹信と過ごせる貴重なものだった。削られては堪らない。

「すみませんっ、大丈夫ですから――」

鷹信は笑った。

「慣れない環境で緊張の連続だろう。疲れるのは当たり前なのだから、無理せぬ様にな。もし何か困った事があるのなら、いつでも力になろう」

楠王が聞きでもしたら、「またそうやって甘やかす」と即座に絡んだかもしれない。だが言われた香月としては、まさかその厚意に甘えて昼間の出来事を告白するわけにもいかず、曖昧(あいまい)に笑って誤魔化すしかなかった。

「ありがとうございます。……でも、大丈夫ですから」

そうか、と鷹信はまた脇息に凭れ掛かる。緩めた襟元が、昼間の貴公子然とした雰囲気とはまた違った風情を醸し出していた。そんな格好でも自堕落に見えないのは流石と言うべきか。
同じ邸内に起居する様になって、香月は鷹信の新たな一面を発見する様になったのが嬉しかった。
にも関わらず、再び所望の曲をかき鳴らしつつも、心は思索に耽っていく。

――それにしても、一体どこから私の素性を知ったのだろう。

玲彰からは、出自以外の一切の経歴を伏せてあると聞いていた。

鷹信が話すわけもないし、第一、彼は仙丸とは親交があまりないらしい。となれば、以前皐乃街時代に客となった貴族の子弟辺りからでも聞いたのだろうか。

あの出来事の後、決裁が終わったと自室に呼び出すのが恐くて、自ら仙丸の元に出向いて書類を渡そうとしたのである。だが当人が席を離れていたので、机に置手紙付で伏せて戻った。以後彼からは何も言ってこなかった所を見ると、余程顔を合わせたくないのだろう。

果たして、自分の経歴を知っているのは彼だけなのだろうか。それとも。

姉小路の出現で少し晴れてきた霧が、また一層濃くなった気がした。

「今日、王宮で玲彰様に研医殿の事を少し伺ったが。人事がとりあえず落ち着いた様だな。予算も決まったので、薬処方局では新たな薬の開発に着手すると聞いた」

鷹信の言葉に、普段なら弾きながらでも会話出来る筈の彼女は思わず顔を上げて指を止めた。

「そう……でしたか」

「その様子では、人事を決めたのはやはり其方ではないのか」

香月は頷く。

「妾に任せていては時間がないと思われたのでしょう。採用する人員の経歴書類は見ましたが……確認した、という程度のものでした」

否があれば即取り消す、と仙丸は言っていた。局内のどの様な担

当者が不足しているのかさえも知りえない自分に、どうして採否が決められようか。

「もしかして、仙丸殿と巧くいっていないのか？」

鷹信の問いに、彼女の脳裏に仙丸の言葉が蘇った。慌てて勢い良く首を横に振る。

――遊女上がりが、偉そうに。

皐乃街に売り飛ばされ、半年の間遊女として見知らぬ男に金で恣（ほしいまま）にされたのは事実だ。

半年経った頃、鷹信と出会い――彼が常連となってくれてからは他の客を取らず、鷹信自身も何を思ってか香月を一度として抱かなかった。

例え、屋敷に引き取られた今でも変わらぬ関係であったとしても、彼女の経歴だけを知れば周囲は思うだろう。

『倉嶋侯爵は遊女を身請けし、自邸に囲っている』と。

そうすれば後は、『実績もないのに、色仕掛けで侯爵に口利きをさせ局長になった』と邪推するだけだ。

仙丸が潔癖な人物であれば、そして――これこそ邪推かもしれないが――自身よりも玲彰に近いとなれば、煙たく思うのは当然なのかもしれない。

「妾はまだ新参者ですから……」

形の良い眉をひそめて彼はしばし考えていたが、次いで「何かあったらすぐ私に言いなさい」と重ねて言った。

香月は出来るだけさりげなさを装って笑ってみせた。

「はい。ありがとうございます」

「新薬の内容は、明日にでも玲彰様より直接お話があるだろう。何でも、今までとは考え方を変えた治療法に関わる薬だと言う。経験の浅い者こそに、活躍の場所も増えよう」

「新しい治療法ですか……」

その方針に自分は関わる事が出来るのだろうか。

――だと、いいのだけれど。

「……ところで香月。其方、もう例の……悪い夢を見てうなされるなんて事は、なくなったのか？」

どうやら気づかぬうちにまた視線を伏せてしまっていたらしい。再び笑みを浮かべて取り繕う。

「え、ええ。もう大丈夫です、鷹信様のおかげですっかり安眠出来る様になりました」

遊女時代、度々香月は父が亡くなった時の悪夢にうなされ、眠れない日々が続いた時期があった。不安や恐怖に見舞われた時にそれは決まって訪れ、気づいた鷹信は自分の元に訪れる時にはいつも、添い寝をし手を握っていてくれたのだ。

「そうか。――良かったな。実は少し、心配していたものだから」

あの温もりが恋しくないと言えば、嘘になる。

慣れない嘘で平静を装うのに必死だった為に、彼女は鷹信の返答

に妙な間がある事には全く気づかなかった。

――鷹信様は、父上ではない。

それがどの様な意味を持つのか、ようやく彼女自身わかりかけてきていた。だからこそ、少しでも対等な立場に近づきたい。例えそれが、叶わぬ願いであったとしても。

遊女であった事実を消せはしない。だから多くは望まないから。

香月は弦を爪弾きながら、今は遠くにある箱庭に取り残された仲間を思った。

分けても――恋をしたが故に地獄に堕とされた、ある人の事を。

※※※※※

あくる日の朝、局内での打ち合わせを終えた香月は玲彰からの呼び出しを受けた。

ここでは各部屋を繋ぐ機械線を通して、備え付けの登記装置に番号と内容を入力すると伝達事項が届けられる仕組みになっている。昇降機もそうだが、他では見た事もない様な機材が諸所に備えられているのだった。

故に香月も仙丸の机にあると聞いていた番号を選んで、玲彰の居室『芭墨(はぼく)』に行くと打ち込み部屋を後にした。

朝の打ち合わせの時に仙丸と顔を合わせはしたものの、他の局員もいたのでいつも通りつつがなく終わった。尤も、彼も香月も決して視線を合わせる事はなかった。最後に一言局長が何か言うのが慣例だが、その時も彼女は敢えて見ない様にしていたのだ。

殿主と幹部の居室は共に最上、五階に並んでいる。それぞれ部屋に名前が付いていて、玲彰は殿主と呼ばれ芭墨の間に、副長二人は

両脇の崇阮（すうげん）、雲霞（うんか）と言う名の部屋を与えられていた。

「倉嶋候からも何か聞いているかとは思うが」

それだけで一つの局と同等の広さと設備を誇る芭墨の間、一角に置かれた古めかしい装飾の椅子に座って玲彰は口火を切った。

研医殿の責任者としての肩書きを持つ彼女はまた、能力とは別にその類まれなる美貌によっても周囲に特異な目で見られていた。

香月も見目形を美しいと褒められる側だったが、上司のそれは全く飛びぬけていた。

金褐色の髪に紫色の双眸を持つ彼女は、造作が余りに整い過ぎていて、人というよりは彫刻か何かに見えるのだ。この世を創った何者かがいるとして、人の中でも完璧を目指して造ってみたものの、最後に喜怒哀楽を入れ忘れたとしか思えない無表情さである。

当の玲彰は研究以外の事に関心がないらしく、芸術を司る雅綾府からの再三の肖像画作成の依頼にも断り続けている、という話は有名だった。

「十刻からの局長会議でも話すが、薬処方局では新たな治療法を目指して新薬の開発を始める事となった。これは其方を責任者として一任しようと考えている」

「その事ですが、玲彰様」

向かい合う形に座って膝に両手を載せ、上半身を思わず前に乗り出して香月は訴えた。

「妾はまだ着任して日も浅く、局内の仕事内容についても把握してはおりません。……仙丸副局長に任じて頂く事は出来ないでしょうか」

「仙丸には私から話しておく。問題ない」
意を決しての申し出は、あっさりと却下される。
「ですがそれでは――」
「何か問題があるのか？　其方、あの街を出る時の事を忘れたのか」
香月は一瞬言葉に詰まり、目を伏せた。己の両手を見る。
「忘れてなど……おりません」
「河西を、皐乃街そのものを救いたいと、其方申したではないか。下っ端に甘んじていては、制度を変える事など出来ぬぞ」
「玲彰様――」
「かく言う私も二十の歳にここに来た。十八の局長も例を見ないが、二十歳の殿主など言語道断扱いだったぞ。下にいても上にいても、問題は出てくるものだ。それに、河西に関しては時間がない。身請けを断っている以上、早く他の手を施さねば、病むのではないか」
「ご存知だったのですか。……どうして」
驚きのあまり息を呑む香月に、玲彰はそれには答えず「私も今回、会議で皐乃街の制度について打診して来た」と続けた。
鷹信が刺客の襲撃に遭って生命の危機を迎えた時、『遊郭内の馬車乗り入れ法度』の決まりを玲彰は破った。
更に異議を唱えた店の者達に向かって宣言した『皐乃街の制度を

改める』という言葉通りに、幾つかの改善点を申請して来たという。

「皐乃街の中に研医殿から医者を派遣する事を、まず手始めに申し上げて来た。街の医者は高い薬礼を取る上に高級な総籬（そうまがき）の遊女の治療ばかりする。実際、遊女が罹患すれば回復する見込みはほとんどないのが現状だ」

感情の伺えなかった玲彰の顔に、僅かだが苦いものが混じった。

「でなければ病の蔓延を防止する目的で『皐乃街そのものを撤廃』とも提案してみたのだが……侯爵のほとんどが反対しおって、叶わなかった。必要悪などと抜かしおってな」

済まなかった、と軽く頭を下げる上司を、慌てて彼女は押しとどめた。

「お止め下さい！　玲彰様のせいではないではありませんか」

「だが、目的を達せられない権力など塵芥も同じだ。権力を行使し、代償として誰よりも重い責任を担う。それが上に立つ者の務めなのだから」

香月の胸がちくり、と傷んだ。

「上に立つ者の務め……」

彼女にはとても、この目の前にいる人の様な考え方など思いつかなかった。新人として患者を治療し、喜ぶ顔が見れるだけで良かったのだ。その一点だけでも、自分が上に立つ器ではないと思い知らされる。

玲彰は生まれながらの頂点に立つべき人間なのだろうと思う。不意に、香月は彼女の比肩する者がいないが故の孤独を感じた。夫や家族がいるのとは、また別種の孤独を。

「何故なのですか？」

思わず疑問が口をついて出ていた。

「どうしてそこまで皐乃街を――妾を気にかけて下さるのですか」

研医殿は確かにその名に『医』を冠するだけあって、発祥は医学の探求の為に創られた機関だという。だが今では作物や機械、そして天文学の研究も殿内で進められていた。ましてや万民の上に立つ王の后、玲彰の優先すべき事柄は他にも多い筈だ。

風紀の乱れとして皐乃街を憂慮するにしても、自分の如き若輩者を取り立てなくとも部下には事欠かないだろう――副長の坂ノ内然り、仙丸然り。

「どうしてだろうな」

意外な事に、珍しく玲彰は返答に困っているらしかった。

「私はどうも自己分析が苦手らしくてな――だが多分、『あの街に全く馴染まない』其方に出会ったからかもしれない」

「それは一体、どう――」

首を傾げる香月の問いを、彼女は遮った。

「勿論、倉嶋候を必死に看病する其方の姿が印象に残ったというの

もある。研医殿の連中にも『患者を救いたい』という思いはあるだろうが、いくら私が仕向けたとは、いえあそこまで設備のない場所で全力を尽くそうと覚悟するには勇気が要る筈だ。知識があるだけに余計に、な」

「そうでしょうか……？」

玲彰の茫洋とした視線は目の前の部下を見ていない。室内の研究機材に向けられている。それを眼前に戻して苦笑を浮かべた。

「後もう一つ理由があるが、説明するのは難しい。この辺りで勘弁してくれると有難いのだが」

「は、はい。わかりました」

全くわからなかったが、必死だったのが良かったのだろうかと、自分なりに意味を測って香月は頷いた。

「新薬の開発についての打ち合わせを明日の午前中にでも行いたいと思うが、其方は登殿日か？」

「あ、いえ一応休み予定でしたが……明後日にでも動かしますから、大丈夫です」

「いや。それならば明後日でも良い。開発に携わる職員は局長会議で発表するが、一刻を争う程ではないからな」

時間だ、と促されて芭墨の間を後にする際に香月がちらりと玲彰の様子を伺うと、彼女はもう椅子には座っていなかった。

冷徹な研究人形だと、殿内で噂されている意味が全くわからない。

そう思えるのが、実はこの国内で自分の他には五指に納まる程度しかいないという事を、香月は知る由もなかった。

## 臙脂（えんじ）（前書き）

ここから少し残酷な表現が入ります。
苦手な方はご注意下さい。

## 臙脂（えんじ）

濃藍（こいあい）色の甍に、朱色の檻。

遊郭『皐乃街』の歴史は、四代程前の王、枢（かなめ）の治世より始まった。

それまで一街に数箇所の遊郭が『置屋』としてあるのが当たり前の風習とされていたものを、全て追い立てて作物の育たぬ窪地に住居を定めたのが今より百五十年近く昔と言われている。

従前より遊女達の位階は存在してはいたが、四方を深い堀に隔離されてより、この苦界は独自の文化を以って栄えた。即ち閉鎖的であるが故に訪れる者達は彼岸を望み、迎える女達もそれを容易く受け入れた。夢は夢らしく、虚飾を極めんとしたのである。女の身を飾る着物や簪などの鮮やかな色彩構図も、この地の他に隆盛したものは少ない。

頽廃に浸る者の習いか、後年異国の文化が王都に訪れる様になっても、この街には入り込まなかった。背の高い建物石造りの建物、洋装なども全て外界のものであると頑として旧態を護り続けた。

堀の内側に長く棲まう者達は、それを『皐乃街の威勢』と呼んでいる。

※※※※

人三人分程あろうかという大きな緋色の木造門は、皐乃街では『大門』の名で知られていた。

街を訪れた外の人間は、一つの例外なくここで馬車を降りて預け、徒歩で行かねばならない。

香月もそれに従って、門番に自分が乗ってきた馬車を預けた。

「本当にお一人で大丈夫でございますか」

怪訝そうな馬丁(ばてい)を宥める様に笑って、彼女は頭巾を頭に被って歩き出した。

皐乃街は外界より実は治安が良い。街を束ねる楼主達が常に目を光らせているから、揚げ代の踏み倒しならばともかく、掏摸(すり)や強盗などのあからさまな犯罪は起きにくいのだ。

用事をあまり人に見られたくないのと、街に半年以上住んでいた気安さもあって、彼女は供を連れずにまっすぐに大路へと繰り出した。

――こんなに度々、ここに戻る事になるなんて。

鷹信に身請けされ外の世界に出たのはついこの間の話。あの時も心残りがなかったわけではないが、外に出さえすればまた道も開けると思っていた。

まさか、河西が香月からの身請け話を断るとは考えもしなかったから。

昼という事もあり、街の中心を縦に走る大路を歩く者は少ない。両脇に並ぶ色鮮やかな格子も今は人の気配もさほどなく、凭れ掛かっている遊女達もどこか気だるげだ。

遊郭は夜だけものもと捉えられがちだが、それはこうして昼に来る者があまりいないだけできちんと昼も見世(みせ)を開けているのである。

見慣れぬ頭巾姿の女一人、道歩きに胡乱(うろん)な目を向けて来る遊女もいたが、咎めてくるわけではない。

皐乃街の遊女は上の太夫から最下級の端(はし)女郎までを含めると二千人を数える。たとえ何年か居ても顔見知りになる者は限られていた。

道沿いに並ぶ鳳凰を象った燈籠に今は灯りが入ってないが、時節を示して紅葉を思わせる黄丹(おうに)色の装飾が施されている。燈籠の隣に並ぶ綽花も今は葉の色を黄に変えつつあり、計算された街並みは相変わらず美しかった。だが香月はそれに頓着する様子もなく、白い玉砂利を踏みしめ大路を急ぐ。

門から何軒か見世を過ごした場所、塗りの剥げた濁り朱の格子の建物が目に入った。見世と言うにはあまりにみすぼらしい、あばら家の様なそれには入り口に戸板もない。だから中が丸見えだった。奥には布団が敷き詰められている。どうやら人が寝ている様だ。

元々は遊女を折檻する為に使われていたという忌まわしい建物――その格子際にただ一人、佇む姿があった。

――河西姐さん。

香月が会いに来たかつての遊女仲間は、格子脇に両手足を投げ出して宙を見上げていた。近寄り、格子に指を掛けてもこちらを見ようともしない。

余りに虚ろな表情に、胸が締め付けられ涙が零れた。

この見世に来るのは今日で二回目だが、以前よりも河西の様子は悪くなっていた。少なくとも、香月に対する意思表示はしてくれたのに。かつては女性らしい生命力に溢れていた身体もひどく肉が削げ落ち、白く粉をはたいた首元の皺や、骨の浮き出た手足が着物から覗いている。

「姐さん。……河西姐さん」

格子を両手で掴んだまま香月はその場に崩れ落ち、膝を付いた。

「私です。香月です。……どうしてなの。こんなになっても、何故」

溢れ出る涙を堪えられなかった。

河西は自分がこの街で辛い日々を送っていた時、仲間として面倒を見てくれた数少ない遊女だった。気風が良く威勢があり、皐乃街一を争うと言われた遊女葉山にも膝を屈しない強い意志の持ち主だった。その人となりは客にも妹遊女にも慕われており、そのまま行

けばいずれは頂点の遊女位『太夫』となる日も遠くはなかっただろう。

――それが今では、最下層の『切見世』で、未来永劫只働きという責め苦を負わされている。客の一人を、よりによってあの『久我義方』を好きになったばかりに。

国王を殺害せんとした尾上の、それが皐乃街に来た折の偽名だった。

「あんた、そいつの知り合いかい？」

背後から物憂げな声がして、香月は涙に濡れた顔を上げた。

振り返ると、そこには擦り切れた着物を胸の谷間が見える程に着崩した女が立ってこちらをじろじろと眺めている。髷（まげ）を低く束ね、飾る簪一つもないが着物の柄は町女のそれではない。しかも手には遊女の使う長煙管（ながぎせる）を持っていた。

「話しかけても無駄じゃないかね。いっつもそんな状態さ。あたしらも最初は稼ぎの邪魔だから色々口出ししてたけど、全く反応しやしない」

女は煙管を口に当て煙草をくゆらせると、「あたし等切見世の遊女は客引き外でやるからさ。昼は寝てるばかりなんだけど」と話を続けた。吐き出される呼気が悪臭を放つ。

「あの河西って奴だけはああして格子から離れやしない。あんた、知り合いなら引き取ってくれないかねえ。見てるこっちが腐っちまう――聞いたとこ、あいつ仕置されてんだろ？」

頭巾を被ったまま、目元だけ覗かせた香月の姿を無遠慮に眺め回し女は渇いた笑みを浮かべた。

「あんたみたいなお金持ちが知り合いなら、こんなあばら家で春をひさがなくたって暮らしていけんじゃないかね。まあどっちみち、ああなっちゃ品物としても使い物にならないけど。……いっそ、死んだ方が増しなんじゃないかね」

「やめて下さい！」

香月の激昂した声にも、女は鼻を鳴らすだけだった。

「だって本当の事じゃないかい？　働いて借金を返すか、誰かに落籍されるのがここから出る手立てだっていうのに、ただでさえこいつにはその一方は閉ざされている。なのに本人に見請け相手を探す意思がまるでない。自殺行為さね」

「私が引き取るんです。だから、そんな事ありません」

「あ、そう。ならいいよ。あたし等の邪魔になりさえしなきゃ」

あっさりと言い置いて、女はゆったりとした足取りで建物の中へと入って行った。

香月は再び河西に向き直ると、袖をたくし上げて格子の隙間から腕を伸ばした。

「河西姐さん、しっかりしてください！」

腕を掴んで軽く揺さぶる。着物から二の腕までが剥き出しになり、その余りの細さに息を呑んだ。しかも。

「……これ」

血の気のない、白い腕に点々と『何か』が出来ていた。
それは水腫にも見える。突き出した部分がほのかに透明で、何かに爛(ただ)れた様子にも似ていた。

「姐さん、貴女もしかして――」

言いかけたその時、それまで焦点を結ばなかった河西の双眸がぐらりと揺れた。

「……あたしは行かないよ。香月ちゃん」

香月は絶句した。渇いてひびの入った唇には紅さえない。血色のまるで感じられない顔に、それでも河西は微笑みを浮かべている。

「これがあたしの犯した罪の償いなんだ……それに、ここにいるとあの人を思い出す……初めて会ったのも、格子を挟んでの事だったから……」

※※※※

「そう言われてもねえ。河西に会って来たのなら、わかるだろう。儂らもああなっちゃもう生きようが死のうがどうでも構わんさ。だが本人がうんと言わない以上、どうにもならんのじゃないかね」

皐乃街きっての総籬(そうまがき)、『寿楽』の楼主夫婦は突然の客人に頭を捻るばかりだった。
上座に通されたにも関わらず、香月は座布団から降りて畳に土下座している。再度楼主に身請けを申し出に来たのだった。
遊女屋はその大きさによって抱える遊女の数と名称が決まってい

た。籬とは見世の格子の正式名称だが、『総て』籬になるのはこの街では大店の証拠である。特にこの寿楽はかつて、遊郭全店を挙げても三人程度しかいなかった『太夫』の内の一人を掲げた事もあり、客も貴族や大尽が多い。楼主も必然的に街の中では権力を持っていた。

その楼主が決めたのである、太夫を殺したのは尾上、加担し口裏を合わせた河西も同罪だと。彼女を切見世に下げたのも彼だった。

「儂も一度、話を受けろと言った事があるんだよ。客を取っている内は良かったんだけど、最近じゃ呆としているからね。――そうしたら、身請けを無理強いするならここで死ぬ、なんて言いやがって。なら好きにしろとしか言えなくてな」

身請け話の持ち上がった遊女を死なせるのは妓楼の名折れだ、これ以上面目を潰してたまるか――そう楼主はぼやいた。

「まあ、とりあえず頭を上げてくれ。もうお前さんはここの者じゃない。侯爵様に関わりのある人間に土下座されちゃ寝覚めが悪いからな」

香月は頭を上げると、懐から布にくるまれた金子を目の前に置いた。

「親父さん、姐さんは病気にかかっているかもしれません。このお金で」

医者に見せてくれ、そう言おうとして思いとどまった。

「――稼ぎの代わりにしてください。出来れば、滋養のあるものを食べさせてあげてもらえませんか」

楼主は毛虫の様な眉をひそめて「そりゃあ金子の分は面倒見てもいいが」と渋面を作った。

「お前さんもしばらくここにいたんだから、わかるだろう？　一時的な憐れみなら、施さない方が良いと儂は思うがね」

「それで気が済むなら、好きにしたらいいんじゃないですか？　珍しいこと、あんたがまともな説教なんて」

傍らで女将が呆れた様に笑った。仏頂面で楼主は返す。

「説教なんかじゃねえ、これ以上の面倒は御免だって言っているんだ。ただでさえ、ここの所王妃様から何やかや言って来て喧しいっていうのに」

楼主の言葉に、香月は目を見開いた。では玲彰はもはや皐乃街に介入して来ているのだ。

「用事が終わったのならさっさと帰んな。ここは堅気の女が長居する場所じゃねえ」

「あ、あの。帰る前に浅尾ちゃんに会わせてもらってもいいですか」

会見は終わりだと言わんばかりに立ち上がった二人に食い下がると、じろりと睨まれた。

「……浅尾なら二階にいるから、客がいなければ会えるだろう。会わせてやってもいいが、手短にな」

楼主は女将に顎で襖を示した。
「やれやれ」と女将が先に立って歩き出す。
「ついといで」
かつての古巣の中は、年月もないせいか全く変わっていなかった。見慣れた回廊、きしむ階段。綺麗に貼られてはいるが、煙草の煙に黄色く変色している襖もそのまま。
「今はあの妓(こ)も部屋に上がってね。中々の稼ぎ手になっているよ」
ここさ、と示された部屋に香月は驚いた。
「ここは、河西姐さんが以前使っていた」
女将は眉を上げた。
「ああそうさ。何の不思議があるものかい。空きが出れば次の部屋女郎はそこから入る。当たり前の話さね」
閉じられた襖に向かって「浅尾、お客さんだよ」と叫んだ。
襖が開いて、中から切り下げ髪の少女が顔を覗かせる。香月を見て眼と口を真円に開いた。
「久しぶりね、彩」
「……香月姐さん！」
「ええっ！！」

奥からばたばたと走る音がして、懐かしい顔が少女の上に現れた。二人揃って同じ表情になる。

「本当だ！　香月姐さんじゃないですかっ！　ど、どうしてここに？」

浅尾も全く変わっていない。生き生き溌剌(はつらつ)としていて、いるだけで周囲を明るくしてくれる雰囲気もそのままだ。引いたはずの涙が、また香月の瞳に浮かびそうになった。

「浅尾ちゃんに会いに。……元気そうで良かった」

「いやまあ、あたしは元気なのが取り柄みたいなもんですから」

照れる様に笑って、「まあ入って下さいよ」と中を指先で示した。

「手短にね」と重ねて言い置いて女将が去って行くのを冷ややかな目で一瞥して、浅尾は座布団を上座に置く。自分は畳に直に座った。

「気を遣わないでいいのよ」

そう苦笑して持参した土産を手渡した。

「うっわー。甘葛(あまつら)餅じゃないですか……こっちこそ、こんな高価なものをすみません」

ほら見て、と浅尾は脇に控えていた二人の少女――禿(かむろ)と呼ばれる見習い遊女だ――に箱の中身を見せびらかした。

「彩と桂ちゃんが部屋付になったのね。祥ちゃんは？」

「あの子は玉寿姐さんのお付に変わりまして。まあ元気でやっているみたいですよ――桂、お茶煎れてもらえる？」

甘いものに目がない浅尾は、きらきらと目を輝かせて上機嫌だった。

「玉寿さんの……そう」

常盤や川瀬でなくて良かった、と香月は内心安堵した。元々対立していた河西の禿、虐められるのは目に見えていたから。

「女将さんから聞いたけど、浅尾ちゃん人気者みたいね」

微笑んで尋ねると、「まあ、あたしは話するの好きですから。お客さんも気が紛れるとか言ってます」と笑って頭を掻いた。

「姐さんこそ、どうですか？　新しい生活は。今は倉嶋様の所にいらっしゃるんでしょう」

湯呑みを置いてくれた桂に礼を言って、香月は苦笑する。

「研医殿に勤める事になったのだけれど、まだまだわからない事ばかりで。四苦八苦しているわ」

「ああ、そう言えば姐さんはお医者様だったんですよね。聞いた時はびっくりしましたよ」

ひとしきり皐乃街の話で盛り上がった後、香月は河西の話を切り出した。

途端に浅尾の顔が曇る。

「あたしもちょくちょく様子を見には行くんですけど、気づかれると最近では『来るな』と言われるんで、遠巻きにしか見ていないんです。……でも、水ぶくれみたいなものって、もしかしてそれ……瘍頭(ようず)じゃ」

皐乃街の学問は客向けの風流なものばかりだが、病について一つだけどんな遊女でもよく知っているものがある。――性病だ。

種類はいくつかあるが、有名なものに『瘍頭』というものがあった。罹ると潜伏期間が長く、放置すれば身体の内外問わず腫瘍に爛れ、廃人となって死に至る恐ろしい病気だ。河西のそれは、瘍頭の初期症状によく似ていた。

「まだわからないわ。血を少しもらって研医殿で検査したいのだけど、そんなわけにも行かないし。症状から見て、もしそうならまだ感染(うつ)されて一月も経っていないと思う」

「で、でも。香月姐さんなら何とか出来ますよね？　親父さん達が話してましたよ、王妃様が直々にお声を掛けたのだから、優秀な医者に違いないって」

香月は言葉に詰まった。自分はとても一人前と呼べる様な代物ではない。でも。

玲彰の言葉を思い出す。

大事なのは治せるか治せないかではない、治すか治さないかだ――

「――勿論、私が治してみせるわ。すぐに薬を作ってまた持ってくるから。浅尾ちゃん、姐さんに飲ませてあげてもらえないかしら」

「はい！　たとえ姐さんが嫌だと言っても口の中に流し込みますっ」
浅尾は真剣な顔で元気よく頷く。それで香月も何とか笑う事が出来た。
「浅尾ちゃんが、変わっていなくて良かった……姐さんが、あんな風になってしまって。身請けも断られるし、私」
目元を潤ませる香月に、だが彼女はほんの少し自嘲気味に笑った。
「香月姐さんはそう仰いますけど、あたしこそ河西姐さんにどれ位救われていたかなって、そう思うんです。信じられるのはお金だけだった筈のこの街で、まともな人でさえも道を踏み外すのに。……今までが、恵まれすぎていたのかもしれません。でも」
河西姐さんを見ていると、時々暗い方に傾く事だってありますよ――かつて聞いた事のない複雑そうな声音で、浅尾は囁いた。
「侯爵様も国王様も、勿論香月姐さんだって正しい事をなさったんですよね。悪いのはあのお客なのだから当然の報いです。――でも時々思ってしまうんです。もし――もしあのままでいられたら、姐さんは」
ごめんなさい、と小さく声を震わせたかつての妹遊女を、香月は手を伸ばして抱きしめた。
もし全てを善と悪とに明確に分けられるものなら、どれほどにこの世は単純だったろう。
いつ来るかわからない未来の夢を見る事程、遊女にとって虚しいものはない。
それでも彼女達は、夢を見るのだ。

借金を払い終えて外に出る夢、愛しい男と添い遂げる夢。
あの時は尾上を捕えるのが最善だと思った。でなければ犠牲者は増え、更に多くの血が流されたかもしれない。
だが他人の幸せを踏みにじってまで、守れる正義とは一体何だったろうか。

「必ず……私が何とかするから……」

縋り付いて嗚咽を漏らす浅尾に、心の中で香月は繰り返し詫びるしかなかった。
これが自由と引き換えに得た、己の背負うべきもの。
本当の意味で救うのがたとえ難しかったとしても、引きずり戻さなければならない。

彼女が完全に――『向こう側』に行ってしまう前に。

## 深緋（こきあけ）

瘍頭の治療法は今現在、確立されていない。

罹れば初期より身体の表面に痛みを伴わない「しこり」を発現させ、膿を生じ或いは皮膚の爛れを認める所から、皐乃街では抗腫瘍効果のある「柴子（さいし）」という生薬を煎じて飲むのが対処に用いられて来た。

――でも、それで完治するわけではない。

皐乃街より帰ったあくる朝、香月はいつもより早く登殿するなり局長室にて書物を積み上げた。片端から生薬を調べ上げてみるが、柴子を超えるものは見つからない。

それでなくとも、一度罹患すれば症状が治まっても耐性が著しく落ちてしまうのがこの病気の恐ろしい所である。原因が細菌である、というのはわかっているのだが、その細菌の撃退法が見つかっていない為、罹患者は生涯高価な柴子を買い求める羽目に陥ってしまう。買えなければ再発――つまり遊郭で働く限り、常に生命の危険にさらされてしまう事になるのだ。

河西は自分の援助を良しとしない。ならば病は長引かぬ様、完治させて外界に出る希望を取り戻してもらわなければ。

書物の頁をめくり、柴子と組み合わせて相乗効果を得られそうなものはないかと探していると、扉を叩く音が聞こえた。

「どうぞ」

失礼致します、と仙丸が部屋に入ってくる。

「おはようございます」

香月は書物に集中したいばかりに、顔を上げもしなかった。
「まだ打ち合わせには早いのではありませんか」と挨拶すらもしない。先日あった出来事も局内での人間関係の軋轢なども、今となってはどうでも良い気さえしてくる。
「書類が届いておりましたので。……何か、調べ物ですか」
仙丸も無視を意に介した風もなく、いつも通りの口調だった。
書類をちらりと見ただけで、香月は作業を続ける。
「ありがとうございます。打ち合わせの時刻になったら出て行きますので、それまでは急を除いてはご遠慮頂けますか」
「これは随分とお急ぎのご様子ですね。何か依頼でもあったのですか？」
珍しく退室しない彼に苛立って、香月は書物から顔をようやく上げてそちらを向いた。
仙丸は思った以上に側に来ていて、開かれた頁を覗き込んでいる。詮索されたくないので、慌てて本を閉じた。
「依頼はありません。特に、玲彰様から何かあれば貴方にお知らせしますからご安心を」
「なるほど。新薬の開発に関する調べ物でもない、というわけですね。柴子に疾梨（しつり）……性病の研究でもなさっているのですか。こんな時に」
侮蔑の気配を感じて、香月はようやく彼が引き下がらない理由に

気づいた。
ぎり、と奥歯を噛み締める。
「病に軽重も、時期も関係ないと思われますが」
「昔のお仲間でも病気になられたのですか？　それとも――ご本人が」
「出て行って下さい！」
音を立てて立ち上がったはずみで、椅子が床に倒れた。
「私の事が気に入らないのなら、放っておけば良いではありませんか！　今は貴方に関わっている暇はないんです。貴方もそうでしょう！」
怒りと悔しさに涙目になりながら、何とか彼女は仙丸の無表情を睨み付けた。切れ長の黒い双眸と香月の茶色のそれが拮抗する。
先に視線を逸らしたのは仙丸だった。
「……私はただ、皐乃街の環境を変えなければ、治療など一時凌ぎだと申し上げたいだけです」
声音は冷ややかな事この上ない。
「おっしゃる通り、治療には優先順位などない。ですがあちらにも医者が居り、研医殿の我々には我々の為すべき優先順位があります。皐乃街の法を無視して治療に当たり、任務を蔑ろにする様な事がもしあれば、本末転倒です。余計な真似はしないで頂きたい」

「……どこまでも私の邪魔をしたい様ですね」

葉山に似ている、と思ったのは勘違いだった――彼女の方が、余程道理の通った人だった気がする。少なくとも正論を振りかざして、遠まわしに相手を蔑むなんて事はしなかった筈だ。

優先順位が聞いて呆れる。それこそ本末転倒だ。

今の自分に、河西を救う以上の重大事なんてないと言うのに。

「心配をされなくとも、どうせ新薬の開発は貴方が実質の指揮を執るおつもりなのでしょう。私は見ているだけでいますから、代わりにこちらにも口出しをしないで頂けませんか」

さぞかし快哉の笑みを浮かべるだろうと思いきや、何故か彼は驚いた様な顔をしていた。

「そうまで仰るのなら、……致し方ありませんね」

一つ咳払いまでして、平静を保とうとしている。

踵を返して扉に手を掛け、こちらを振り返った。

「今のお言葉、くれぐれもお忘れになりません様に」

香月は頷く。真意はわからなくとも、取引はどうやら成立したらしい。確かに殿主直々の命令、受ければこの上ない名誉だろう。――だが、そんなものには端から興味がない。

「その代わり、器材は自由に使わせて頂きます」

「――いいでしょう。会議にだけ出席してくれれば、後はご随意に」

捨て台詞めいて答えると、仙丸はようやく出て行った。いくらか不快だったものか、いつもより派手な音を立てて扉が閉まる。
尤も既に意識を本に戻していた香月には、それすらも露程も気にならなかった。

※※※※

その後新薬の会議が五階で開かれた時、彼女は約束通り発言を控えた。
玲彰の説明を終えた後、場を取り仕切るのは仙丸に任せ、自身は議論を聞き、頷くだけ。
『従来の様に“なってしまった病の治療”ではなく、“予防を目的とした薬”を作る』
主題は概ねその様なものだった。
他にも治療困難な難病の薬剤の開発についても、施術局と連携して今一度見直しを図る――草案を募り、開発日程を詳しく決めて会議は終了した。

「どこか調子でも悪いのですか？」

会議終了後、気づけば横に並んでいた姉小路の問いかけに笑って誤魔化して先を急ぐ。
だが足の長さのせいか、引き離す事は出来なかった。
故にそ知らぬ風で答えを口にする。

「何ともありませんよ。私、どこか変だったでしょうか？」

「会議で一言も発言しなかったでしょう。玲彰様もお気に留められていたご様子でしたよ。貴女をじっと見ていましたからね」

確かに彼女の視線には、香月も気づいていた。その言わんとする処も。

「それでいいのか」と思われたに違いない。

――玲彰様には申し訳ないけれど、今は私に出来る事をしなくては。

「ただ必要ないと思っただけです。副局長は優秀な方ですし経験もおありになります。任せているものですから」

半分は真実だった。性格の悪さを除けば、彼が有能なのは疑い様がない。

「ああ、まあ」

姉小路は辺りにちら、と注意を配り人気が少ないのを確認すると「仕事が出来るのは結構ですがねえ」と苦笑した。

「どういう意味ですか」

「いや、こんな事を言うのは陰口の様ですが……彼を使うのは大変だろうなと。心中お察し申し上げます」

「姉小路局長？」

丁度昇降機の許に辿り着いたので、他に人が待っていた事もあり会話はそれきり立ち消えとなった。

怪訝に思いながらも局に戻り、途中になっていた薬剤の調合の為に薬庫に入る。

薬処方局は入り口から真っ直ぐ廊下が伸び、突き当たりは局長室。向かって右手には手前に書庫があり、薬庫はその奥に位置していた。

薬庫の扉に取り出した鍵を差込み開錠する。
局員ならば調合室内の鍵庫からいちいち鍵を取り出すが、局長と副局長は合鍵の所持を許されていた。自分以外の者が平時詰めている調合室は反対側の左、拠って真っ直ぐ薬庫に行けば誰かに会う事はまずないと言っていい。
薬庫内は密封保管にも関わらず生薬の臭気が混じりあい、埃の匂いにも似た空気が漂っていた。思わず換気が施されているのを確認する。懐から布を取り出して顔半分を覆り、後頭部で留めた。
壁際を埋める戸棚には、細長い玻璃（はり）の器が等間隔に台座に立ち並んでいる。他にも全く中が見えない戸棚もあり、そこには光を当てると変質する薬剤が同じ様に入っていた。生薬を加工した時に入れる一時保管用の調温器も中央の机に置かれている。
研医殿に入って、香月がまず覚えたのがこの薬庫の保管内容だった。どこに何があるかは器に札が付いてはいるが、生薬だけでも数百種類を数える為、探す時間を掛けたくないと暗記する事にしたのだ。
迷う事なく奥の戸棚に入って、柴子と疾梨、それに蛇庄（じゃしょう）が入った器を取り出す。
蛇庄は身体の抵抗力を上げる作用のある生薬だ。皐乃街では強壮に「山薬」が使われているが、内臓に負担を掛けるので長期に亘り使用出来ない――そう判断して、敢えて別のものを選ぶ。

――問題はここから、なのよね。

生薬は擦り下ろして溶液に混ぜ溶かし、器材を使って精製しなくてはならない。結局調合室を使う事になるのだ。
保管簿に記録して元通り施錠すると、仕方なく香月は向かいに位置するその部屋に入る為、薬庫を後にした。
「――しかし扁厨（へんず）は堅質に過ぎる。精製するのは良いが、時間が掛

かって仕方がありませんよ。ただでさえこっちは忙しくて――新薬だなんて」

調合室に入ると、局員の一人の話し声が聞こえた。香月が声の主を探すより、当人が入室に気づいて口を噤む方が早かったらしく、男の声という他はわからない。あまり聞き覚えのない声だった。

室内には見知らぬ顔ばかり四、五人程男女がいたが、彼女に声を掛ける者はいなかった。皆自分の机の上の器材に視線を固定させている。薬を測ったり器を振り続けたり――確認試験を行っているのだろう――見るからに忙しそうだ。

「天秤と薬研（やげん）を借りたいのですが、空いているものはありますか」

とりあえず一番側にいた女性局員に話しかけてみる。白い陶器の上で薬剤に液体を垂らしていた彼女はちらりとこちらを見たものの、すぐさま顔を戻して調合を続けた。

「あ、あの……」

「済みませんが、ここに空きはありません。副局長か斎条さんに確認してもらえますか」

顔を固定したままで、その明らかに香月より二十歳は年上だろうという女性は素っ気無く答えた。

香月は部屋の隅に置かれた手付かずの天秤を見つけ「でも、あそこに使っていないものがありますよ」と尚も聞く。

「今、たまたま使われていないだけです。大体、ここはいつも人手が足りない位忙しいし器材も不足気味です。むしろ、数を増やしてもらいたいですね――相模（さがみ）、照射灯の準備！」

後半彼女は化粧気のまるでない丸顔を隣の席の男性に向け、鋭い声を投げ付けた。相模と呼ばれた青年が受け持ちの実験の手を止めて、足音荒く器材を取りに行く。
鬼気迫る様子に、流石に香月は黙ってその場に立ち尽くしていた。
「まだ何か？　側に黙っていられると気が散るのですが」
「あ、いえ。――ごめんなさい」
室内が明らかに険悪な雰囲気に包まれているのは、自分のせいだろうか。それとも単に忙しいからか。斎条に聞いてみるしかないと、香月は一旦引き上げようと踵を返した。
「うわっ！」
振り向きざま、誰かとぶつかり書類が床に散らばる。
「すみません、いるなんて気がつかなくて――」
謝りながら書類を拾う香月の視界に、金の癖毛が入って来た。
癖毛の持ち主は顔を上げると、「いえ僕も不注意でしたし」と苦笑して見せる。
「斎条さん、実は器材の事なんですけど……」
「あ、はい。副局長から話は伺っています」
「え？」

彼は書類をとりあえずと言わんばかりにまとめて拾い上げ、片端から側の机――持ち主不在の誰かの机だろう――に積み上げた。

「ちょっと、斎条君！　まさかここにあるものを渡す気じゃないでしょうね。元々足りないのよ？」

先ほどの女性局員が勢い良く顔を上げ斎条を睨み付けた。

職位では第三位の斎条は上司に当たる筈だというのに、新人に対する様な態度である。どうやら古参の局員らしい。

「いや、それは大丈夫。保管庫にしまってあるものを使って頂くから」

「は？　まだ眠っている在庫なんてあったの――いや」

女の顔色が明らかに変わった。

斎条は複雑そうな笑みを見せる。

「そう、まだあるよね。一揃い立派なのが使われずに」

「待って。でもあれはもう、処分したんじゃなかった？」

「その予定だったんだけどね。直前に刑吏府から待ったが掛かって、そのまま処分保留さ。いいんじゃないか？　きちんと洗ってあるし」

「だからって――何を考えているのかしら、副局長」

さあね、と斎条は会話について行けずにいる香月を振り返った。

「あ、あの……？」

「前局長が使われていた器材が保管庫にあるんですよ。局長には、そちらを使って頂きます――今話した様に、洗浄されていますのでご安心下さい」

## 紅掛花（べにかけはな）

一体どこまで自分に嫌がらせをすれば気が済むのか。
斎条の言葉にすぐには返答出来ない香月だったが、決断するのにそう時間は掛からなかった。

「わかりました、使います」

「局長……」

先程まで居丈高な態度を取っていた筈の女が、呆然とした呟きを零した。

「斎条さん、保管庫内のどの辺りにあるのか教えてもらえますか」

「あ――はい、では。ご案内します」

部屋の中が訝しな雰囲気に包まれているのがわからないわけではない。提案した斎条自身でさえも、香月の返事は予想外だったものか、呆気に取られた表情をしている。
それはそうだろう、前局長は毒を以て国王を葬り去らんとした罪人だ――あまつさえ彼の最期は壮絶なものだった。刑吏府と大立ち回りを演じ国外に逃亡した挙句、何日か後に死体で発見された。その死は今もって謎に包まれている。
ただでさえ罪人の遺留品を使えなどと言われれば、大抵の人間は屈辱に感じるに違いない。
ややあって歩き出した斎条に従って、香月は調合室の奥へと踵を返した。人が忙しく立ち回る音も、いつの間にかぱたりと止んでいる。

「……あの棚にあるものがそうです」

施錠されていた扉を開け、斎条は保管庫の更に一番奥にしまわれていた道具を指し示した。

立派なの、と称されるのは皮肉ではなかった様だ。天秤も薬研、乳鉢も明らかに上等なものが揃っている。

「粉砕機や丸薬製造機まで……」

世間一般に出回っている薬は散薬が主流である。人体に吸収されやすい代わりに日の光などで劣化する為使用期限は短い。長期に亘って使用する場合に丸薬は重宝されたが、機械がないと作れないので格段と高価なものだった。丸薬や生薬原料を粉砕する機械も、民間では決して手に入らない。

「斎条さん、調合室に丸薬製造機はなかったのではありませんか？これは局員の共有物では」

乳鉢の様なものならばいざ知らず、かつては皆が使っていたであろう機械まで、封印せずとも良いのでは――そう思って聞くと、彼は「刑吏府の許可が出るまでと、副局長から保留にされていまして……」と歯切れ悪く答えた。

「でも、今回私が使って良いという事は、使用許可が出たも同じですよね」

「さあ、その辺りはよくわかりません。確かに理屈としては僕もそうだと思いますが。何かお考えがあっての事でしょう」

曖昧な笑い。含みを持たせている様な気がするが、彼の真意は測りかねた。

「今はただでさえ道具が不足していると、先ほどあの女性の方も話していましたよね？　私から玲彰様に聞いてみましょう」

「あ、いや――それはちょっと不味いのでは」

見るからに慌てた様子の部下に何故、と問うまでもなかった。彼は仙丸の勘気を恐れているのだろう。だが今は薬を作るのが先である。

敢えて追及せずに香月は微笑んだ。

「とりあえず、こちらはお借りして行きます」

両手に余る程の器具を、出来るだけ抱えて運ぼうとすると後ろから斎条が付いてきた。

振り返ると、その両手には大型だからと置いてきた機械類を持っている。

「運ぶの、僕も手伝いますよ」

局長室に道具を運び入れる時、彼は小声で「他にも何かあったら言ってください」と耳打ちして来た。

「それも、指示なんですか？」

不思議に思って問う香月に、彼は複雑そうに笑ってみせた。

「いいえ。――だからこの事は、くれぐれもご内密に」

※※※※

「組織というものは基本的にしがらみだらけです。長く生息したければそれに従うか、或いは自ら流れを作るしかない。前局長が失脚した時点でいくらか少なくなったと思ったのですが、新たな流れが出来てしまいましたか」

姉小路のしみじみと嘆息する声を聞きながら、香月は施術局内の休憩室で目の前に出された茶を啜った。

どうしてこんな話になったのだろうと、内心疑問を禁じえない。河西に渡す薬を作って薬庫に保管した後、まっすぐここを訪れた。確か出迎えてくれた彼と、以前の様に施設内を見せてもらって患者の病態について話をしていた筈だが――

余程自分が浮かない顔をしていたのか。

「斎条君でしたか、彼はここの患者の担当を持っているのもあってよく来るのですよ。経験こそ浅いが、あれで結構骨のある奴ですよ。きっと見るに見かねたのでしょうな」

そう落ち込む事はありませんよ、と笑う所を見ると、やはり自分が悄然としていたかららしい。自覚なく打ち明け話をしてしまうのは、思っている以上に自分が傷付いていたと言うよりも、彼の話術に拠るのだと香月は気づいた。

声は優しく暖かで、安心感を聞く者に与える。病める者達に向かい合うのに、これ程相応しい人もいないだろう。

「そうですね。妾(わたし)も姉小路局長を見習って、出来る事をやろうと思います」

彼女もまた、彼に向かって微笑んで見せた。
思いがけず味方が出現した様で――例え斎条や姉小路が人として最低限の同情を見せただけだとしても――少なくとも自分は一人ではないのだという気がする。
ふと真顔に戻った姉小路が何かを言おうとして口を開いた時、休憩室の扉を叩く音がした。
返答を待たずに、室内に明らかに貴族だという格好をした男が入ってくる。

「おやこれは、邪魔をしてしまったかな」

「――元良侯！」

慌しく椅子から立ち上がった姉小路の声に、香月も突然の訪問客を思わず凝視した。
元良兼親（もとら・かねちか）。雅綾府の長官であるだけでなく、自らも傑出した芸術家として名高い。黄檗（きはだ）色の上着には、淡萌黄（うすもえぎ）色の刺繍が施され目に眩しい。更に紅掛花色の下衣という独自の趣味は彼女の度肝を抜いた。一分の隙もなく撫でつけられた黒髪に艶々と光る恰幅の良い顔という容貌に、服装が何とも似合っていない気がする。
外見はともあれ、楽師としても才能は聞こえている彼を間近に見るのは初めてだった。

「お越しになるのでしたらご一報下されば宜しいではありませんか。出迎えもせず、申し訳ございません」

「いいじゃないか。毎度の事だ、何を今更。君と僕の間で堅苦しいのは抜きにしよう」

恐縮する姉小路にひとしきり爽やかな台詞を投げた元良は、遠巻

きにこちらを見ている今一人の人物に初めて目を向けた。「おや」と言いながら近づいて来る。

「お嬢さん、何処かでお会いしましたか？」

すぐ側で見る元良の顔は思ったよりも脂光りしている。張りのある皮膚だが、もしかしたら思ったよりも歳は上なのかもしれない。香月は原因不明の寒気を感じた。

「い、いえ！　初めてお目に掛かると存じます」

「そうかなあ。君みたいな美的素材、一度見たら忘れないと思うんだけどな」

「元良侯、こちらは新しく薬処方局の局長に着任しました、嵯峨紫泉殿です。嵯峨伯の娘御ですよ」

「嵯峨……ああ、それで！」

姉小路の言葉にようやく思い出したと見えて、元良の細い両目が益々細くなった。

「という事は禎祥殿（ていしょう）の娘という事か！　道理で見覚えがあると思ったよ。いやあ懐かしいな」

「は、母をご存知なのですか」

父親はまだしも、物心つく前に亡くなった母親の知己に会うとは思わなかった。驚きに目を丸くする。

元良は興奮したのか、早口でまくしたてた。

「知っているも何も。僕と禎祥殿は同じ師匠の下で琴を学んだ、いわば同門の徒だったんだよ。――君の母親はそれは素晴らしい琴の弾き手だった。佳人薄命とはよく言ったものだ、当時は最も『奏の鳴声』に近いと噂されたというのに、病に倒れられてね。風の便りに、忘れ形見の姫も琴を能(よ)くすると聞いたが、そうなのかい？」

「はい……あの、母から教わる事は叶いませんでしたが、一応」

徐々に接近してくる顔から逃れる様に、じりじりと後退しながら香月は答えた。

「何と！　実は僕もそれなりに嗜むものでね。是非一度合奏願いたいものだ――」

侯爵様、と背後に控えていた臣下らしき男が小声で窘める。

「お時間がございません。そろそろ」

「ああそうだったね。では姫、約束だよ。また改めて遣いを出そう。姉小路君」

「はい」

芝居がかった動作で彼は踵を返し、部屋の扉に向かった。先に出入り口付近にいた姉小路は香月を振り返る。

「嵯峨局長、申し訳ありませんがこちらで待っていて頂けますか？」

「あ、妾はそろそろお暇を――」

芸術を司る府庁の役人が、病人の施設に何の用があるのだろう。
しかも口ぶりからして、もう何度も足を運んでいる様子だ。
言いながらも香月が眉をひそめていると、視線に気づいたのか元良がこちらを向いた。
にこりと笑いかけられ、またも寒気が襲う。

「何だったら、姫も一緒に来るかい？」

「元良侯、宜しいのですか」

姉小路は怪訝そうな顔をしている。

「構わないだろう。薬処方局の局長ならば、立場上も問題なかろうし。それに、彼女ならばもしかしたら『彼の声』が聞こえるかもしれない」

元良は悦に入った如く上機嫌だった。

「あの、一体何のお話ですか？」

わけがわからず、香月は問いかける。

「うん、実はね。僕はこれから一人の難病患者に会う予定なんだ。日の光に当たると身体が年寄りになってしまう月下病――そんな風に仮に呼ばれている患者さ。これが実に興味深い事に、『声なき声』を出せるらしいんだな。声帯が普通の人間とちょっと違うらしくてね」

名前は何と言ったかな、と彼は姉小路に水を向けた。

「舜橙です」

「そうそう、その舜橙という患者だよ。音を研究するのも雅綾府の仕事の一つ、故にこうしてやってきた次第さ」

聞いた事のある名前に、香月の脳裏にあの日の彼の姿が蘇った。寂しそうに窓の外を眺めていた、老人にしか見えない青年。

「どうする？　僕としては耳の良い人間は一人でも多く連れて行った方が都合がいいんだ。――何しろ、どんな条件で誰の耳に聞こえるか、まだ全くわからないものだから」

「はい、お供させて頂きます」

香月は強い声音で答えると、元良達に従って休憩室を後にした。廊下に出ると、術着を着ていない男女が一人ずつ立っていた。どうやら元良の供の者らしい。

別室で身体を消毒して術着に全員が着替えると、廊下に先立って歩きながら姉小路が説明する。

「最初に異常に気づいた時、舜橙さんの周りには無数の虫が寄っていました。勿論建物の中ですから、窓の外に、でしたが――発見したのは局員で、気味の悪い光景だとは思ったけれども深くは考えなかった様です」

その次の機会には鳥が、また別の折にはやけに付近で獣の吠える声が近くで聞こえたという。誰が見ても、舜橙はただ外を見ていただけとしか思えなかったそうだ。

元良が後を引き取って続ける。

「特定の対象しか聞こえない音の存在は数年前から我が府でも認められていた。音は空気を振動させて伝わるもの。通常人が発する声の質――我々は諧声(かいせい)数と読んでいるが――はごく狭いものだ。これに比べて昆虫や獣類など他の生き物は、遥かに幅広い諧声数を持っている。聞き取れる音も同様だ。獣の方が耳が良いと言われるのはそのせいだ。それで最初は、声帯と声唇といった器官ではなく、違う部位から獣の様に音を振動させているのかと思った」

「舜橙さんは話せないのですか？　その――普通の声という形では」

「そうなんだ。喉自体に特に危害を加えられた形跡はないが、何故か話す事が出来ない。それが月下病の筋肉の低下に拠るものだと、最初は考えられていたのだよ」

だがこの一連の現象から周囲が疑問を持ち始め、玲彰に奏上した。元良は玲彰の依頼を受けて、舜橙の為に研医殿内に専用の研究団を作ったのだと言う。

そうこうしている内に病棟に辿り着き、姉小路が舜橙の病室に入るべく扉を叩いた。

「舜橙さん、起きてるかい？　姉小路だが、入ってもいいかな」

「一人部屋なのですね」

香月の呟きに「とにかく日光に当たれないもので、相部屋にすると色々問題が生じるのです」と彼は答える。

程なくして室内から鈴が一回、凛と鳴った。

「会話が出来ないので、意思表示は文字盤と鈴で行っています。――起きている様ですね」

入った病室は、ごく殺風景なものだった。簡素な寝台に小さな机、角灯、ささやかな荷物を置く為の棚。

遮光の為に窓を覆った一面の黒い布のせいで室内は暗い。角灯の明かりに照らし出された寝台に佇む力ない姿の舜橙は、生命力の衰退を感じさせた。

単なる健康な者の驕りなのかもしれない。それでも、こちらを見返す事もしない虚ろな表情は皮膚の色もくすんで皺となり、顎に掛けてたるんで下がりかけている。

髪こそ色のあるままで――鳶色に近い変わった色だ――毛量を保っているだけに、身体に比べて浮いて見えた。

「身体の具合はどうですか」

正面に回りこんで姉小路は患者と視線を合わせる。舜橙はおもむろに机に載っていた紙の板の文字を指差した。そこには等間隔に文字が並んでいる。

〔よくなんかならない。あかるいばしょにでたい〕

病魔と戦う毎日は、精神風土をも荒らしていく。姉小路も慣れていると見え、特に表情は変わらなかった。

「治療の為にも、協力してくださいね。今日はまた、貴方の『歌』を聴かせてもらいたいんだが。どうかな」

〔はい〕

全く無駄のない返答。最低限の意思表示、それすらも疲労を感じるのだろうか。
悲哀を態度に表してはいけないと思い、黙って香月が見守っていると元良の供の内男の一人が持っていた鞄を開けて小さな匣の様なものを取り出した。

「我が府で開発した蓄音装置だ。楽器の原理を応用している」

誇らしげに元良は彼女に笑ってみせた。匣の蓋を開け、手前にある小さな把手に手を掛ける。

「舜橙君、始めてくれたまえ」

名を呼ばれてもこちらを見るでもなく、舜橙はただ座っていた。
病室が全くの無音に支配された――最初、香月の耳にはそうとしか思えなかった。
不意に、高い音が響き渡った。しかも単音ではない。多数の音が全く同時に鳴っている。あまりの不快感に彼女は頭を押さえた。

――これがもしかして、舜橙さんの『声』なの。

布に遮光された窓が鳴った。外から叩かれている様な音がし、尋常ではない数の鳥の鳴声が聞こえた。

「今日は鳥か――宮村、念の為窓の外を視認しろ。日光を入れない様にな」

元良が興奮した様に言うと、部下の女性が部屋の隅に歩み寄り布の隙間に首を突っ込んだ。

「嵯峨局長？　どうしました」

「……妾、ちょっと――具合が。失礼、致します」

頭痛はひどくなる一方、吐き気すら催して来て姉小路の声すら遠くなり始めた。もうここにはいられないと、香月はふらつく足で扉に向かう。

元良も彼女の異変に気づいたらしく、「ここは大丈夫だから、付いていてやりなさい」と頷いた。

「しっかりしてください。休憩室まで歩けますか？」

姉小路に身体を支えられて、廊下にようやっとの思いで滑り出ると、不思議な事に不快感はほとんどなくなった。

「急に一体、どうなさったのです」

不調の余波はまだ残っていて、急速に脱力するのを感じる。床にへたり込みそうになるのを、大きな手が受け止める。結果として香月は、しゃがんだ彼に身体ごと凭れ掛かる格好になってしまった。

「……もう、大丈夫です。ご迷惑をお掛けしました」

とは言え一人で立てる程、腕に力が入らない。

結局そのまま姉小路に抱きかかえられて、休憩室の長椅子に寝かせられる事になった。

「迷惑などと。しかし驚きました――もしかすると、『聞こえた』のですか？」

香月は黙って頷いた。

――高音域の倍音に似ているが、あんな音は初めてだ。

音が人間の耳に届く時、響きに「揺らぎ幅」を感じる事がある。それを倍音と呼び、楽の音も人の歌声も、これがあると聴くものに特殊な印象を与えるとされている。

或いは妙音と言い美声と賞賛されるが、単調なものの場合逆に聞くと疲れる場合がある――だが今しがた聴いた音は、そんなものでは済まされなかった。

「少し……休ませてもらえますか」

囁いて香月は瞳を閉じる。身体に障害を持つ人間の中には、たまにああいった特異な能力を持つ者が現れると聞いたが、目の当たりにするのは初めてだった。

――奏の鳴声。

元良が禎祥を指して言った言葉だ。あんな不吉な音ではない。

――それを聞いた者は、皆消えている……。

――確かに、母上は亡くなった。

様々な記憶が埒もなく浮かんでは消え、いつしか香月は深い眠りに落ちていった。

## 紅掛花（べにかけはな）（後書き）

脚注：諧声音＝周波数の意味。造語です。
紅掛花＝明るめの青紫色
黄檗＝ビビッドな黄色
淡萌黄＝明るい黄緑色
となっています。

## 黒紅（くろべに）（前書き）

少々残酷な描写があります。苦手な方はご注意ください。

## 黒紅（くろべに）

「……とにかく彼女は連れて帰ります。全く、この忙しい時に何を悠長な」

不意に聞こえて来た何者かの声に、香月は自分が覚醒しつつあるのをぼんやりと感じていた。薬のものらしき匂いを感じる。

――そうだ。私……施術局で倒れて、そのまま……。

「ですからわざわざ自ら来なくても、連絡したでしょう。私が運んでも良かったのですよ」

違う人物の声も聞こえた。笑い含みにも思えるその声は、姉小路のものだとすぐにわかった。

「貴方にしては随分と目の敵になさっているらしいですね。気に入らない相手は端から歯牙にも掛けない貴方が」

「私も出来るものならそうしたいさ。だが玲彰様がやけに肩入れなさっている。粗略には扱えまい」

「玲彰」の言葉で最初に聞こえた声の持ち主に思い至って、香月は目を見開いた。

「気が付きましたか――良かった」

「……姉小路局長」

長椅子の脇に置かれた丸椅子に腰掛けた姉小路が、安堵の表情を浮かべてこちらを覗いている。
他にいた人物が予想通りだったので、即座に起き上がり居住まいを正した。

「詳しくは後日伺います。とりあえず今日はお帰りになった方が宜しいでしょう。立てますか？」

「は、はい。そうします。ご迷惑をお掛けしました」

上の空で答えながらも、視線はその人物に釘付けとなってしまっていた。香月の様子に姉小路も苦笑する。

「もしこのまましばらく目覚めない様でしたら、彼が局まで運ぶと話していた所だったのですよ。そうですよね？　――仙丸副局長」

姉小路の斜め後ろの壁に凭れる様にしてこちらを冷ややかに見下ろしていた仙丸は、上体を起こし扉に向かう。出入り口に辿り着くと振り返り、にこりと笑った。

「局長がお倒れになったというのに、他の局員に介抱に向かわせたとあっては外聞も悪いですからね。だが幸いな事にもう自力でお帰りになれるご様子で、安心しました」

完全無欠の愛想笑いである。

「嵯峨局長、今日はもうお帰りになって結構ですよ。後の事はいつも通り、私が万事抜かりなく務めておきますので」

怖気に身震いをする香月を尻目に、彼は部屋から出て行った。

「これはまた、随分と言い訳めいた……」

姉小路は苦笑していたが、傍らの人物が真っ青な顔をしていたのに気づいて笑いを納めた。

「大丈夫ですか？　また何か不調でも」

「い、いえ……」

何とか立ち上がり、まだぼんやりとした頭で歩き出した。

局までやはり送った方が、との申し出を断って施術局を後にする。

外面の良い仙丸の報復を恐々として薬処方局に戻ったが、彼の姿を見かける事はなかった。

局長室に入り机の上の水差しから水を飲んで、ようやく人心地つく。

――あの音。

思い出せば今でも息苦しくなる程、奇妙な音だった。

幼い頃より学問と楽の音を学んできた身である。一度聴けば、何の音階が用いられているのか大体想像が付いた。

その耳を以ってしても、舜橙の『歌』は理解出来ない。単なる不協和音にも聞こえるが――聞き続ければ、人を狂わせる事が出来るのでは――そう思わせる威力が、あの音にはあったのだ。

音に拠っては、聴力を破壊させるものもあるという。倒れたものの身体に損傷がなくて良かったと、安堵の息をついた。

――今日はもう、帰ろう。

空になった器を机に置くと、局長室を出て薬庫に向かう。帰る前に出来た薬を河西に渡さなくてはならない。
部屋に入った途端、香月は何処か違和感を覚えて眉をひそめた。
室内に特に変わった様子はない様に思える。元々雑然と保管棚が並んだ部屋の事、誰が何かを動かした所で普段なら違いになど気づかないだろう。違和感を覚えた原因がわからないにも関わらず、何かが訝しいと思う自分も不可解だった。
目的は中央の調温器だったが、念のため最奥の劇薬棚を確認に行った。

「――そんな」

香月は愕然とした。
劇薬の棚は棚そのものが載せられたものの重量を測れる様になっている。薬毎に個別に仕切られていて、上には四角い皿。そして棚板の縁には小さな窓が付いていた。ここで皿に載っているものの重量を確認する仕組みであるが、麻珍の重量目盛が明らかに昨日よりも少なくなっている。
局長となって玲彰より拝命してからは毎日の様に確認していたものの、変化はなかった。管理者が変わって鳴りを潜めていただけだったのかもしれない。

――玲彰様に報告しなくては。

香月は調温器から薬を容器ごと掴んで袋に入れると、記録簿に増減を記入してそのまま持ち、部屋から出た。鍵を掛けたのを確認して、昇降機に向かって駆け出す。名残か頭が割鐘の様に痛んだ。
今にも作動する、という昇降機に飛び乗って気づいた。
薬庫の違和感の理由は、『匂い』だ。
常に薬臭い室内に、一際強く香る匂い――先程施術局で嗅いだ匂

いと、同じものだった気がする。

※※※※

息せき切って辿り着いた芭墨の間は、主不在で扉を固く閉ざしていた。

大抵の幹部は室内に補佐官を置くものだが、彼女の所には誰もいない為、清掃以外の不在時は施錠されている。

余りの事に連絡もせずに来てしまったのを悔やんでいると、廊下を歩く坂ノ内副長官に「玲彰様なら、三階に行かれたよ」と気軽に話しかけられた。

五十代半ばのごく普通の風貌の坂ノ内も、本来ならば玲彰に勝るとも劣らない雲上人なのだが、意外と彼は普通に接して来る。気さくというよりは、身分や上下などの俗事にあまり興味がない風にも取れた。

「三階というと、雅綾府の研究の件でしょうか」

「さあ、そこまでは。二刻程で戻ると仰っていたよ」

今は昼三刻だ。後二刻待てば五刻、宵に入って皐乃街では夜の顔見世が始まってしまう。そうなれば浅尾に会うのは難しくなる――薬を一刻も早く渡したい香月は、しばし迷った挙句坂ノ内に伝言を頼む事にした。

「危急の用がありまして、本日は退がらねばなりません。明日改めて伺いますので、今の話、くれぐれもよろしくお伝え下さいませ」

「わかった。伝えておこう」

頷いた坂ノ内に一礼すると、すぐさま踵を返して来た道を引き返す。
保管簿を元の場所に戻し、帰り支度をする間も廊下に局員の姿がないのは幸いだった。建物を出てすぐの場所に呼んでおいた馬車が来ている。駆らせて皐乃街へと急いだ。

――姐さんは、絶対私が治療してみせる。

研医殿のある王都からは馬で一刻、出来る限り急がせたものの大門に到着した時には既に夜見世が始まってしまっていた。

「浅尾ちゃん、私。香月よ」

暮れを迎えて間もない格子楼――上級遊女達が客引きをする場所だ――は燈籠の灯りも朧げで、幻想的な風情を醸し出している。目映いばかりに着飾って籬の中に鎮座していた浅尾は、深紫(こきむらさき)の頭巾姿の彼女にすぐには気づかなかったらしい。声を掛けると白塗りの顔に期待の面持ちを見せた。

「頭巾姿なんて、例の謎のお客以来で驚きました。――もしかして、出来たんですか？」

「ええ。とりあえず七日分だけ持ってきたわ。一日に三回、朝昼晩と飲ませて欲しいのだけど」

夜は彼女もお勤めがあるだろう、と語尾を濁らせると浅尾は「彩に頼みますから、大丈夫です」と請け負ってくれた。

「よう、浅尾ちゃん」

香月の背後から若い男の声がする。

「あらあ、舛屋の若様じゃないですか。お久しぶり。随分とお見限りでしたよね？」

男は間にいる頭巾姿の人物にちらりと流し目をくれたが、「最近家業の方が忙しくってなあ」と笑いながら格子際に割り込んだ。

浅尾に薬の袋を押し付けて、目顔で頷くと足早に香月は格子楼を離れた。大路に出て気づけば道は遊女を買いに来た如何にもな人々や、袖を引く若衆と呼ばれる男達で溢れていた。

――こんなにも、人が。

かつて自分がいた場所ではあったが、出てしまえばまるで異邦人の様な気さえしてくる。

人ごみに揉まれつつも何とか河西のいる場所まで辿り着いた。打って変わって、灯りもなく闇と静寂が支配した町外れへと。

「河西姐さ――」

前に来た時と同じ様に、河西は格子際にその身を投げ出していた。頼りになるのは己の掲げ持つ角灯と、荒屋に灯された蝋燭の明かりのみ。輪郭でようやく彼女だと、判断した香月の目にそれはありえない異物として飛び込んで来た。

河西の足元に、何者かが蹲(うずくま)っている。

立ち竦んで息を呑んでいる香月の耳に、男のものらしき荒い息遣いが聞こえて来た。

はだけられた肉の薄い胸元に、異物から伸ばされた闇が触れている。手に見えた。無骨な指が、河西の乳房を鷲掴みにしている。

小刻みに動く闖入者――それが客に蹂躙されているのだと気付い

た時、香月は悲鳴を上げていた。
河西の表情はわからない。ただ身じろぎ一つせず、男にされるがままになっていた。
「何だ、どうかしたのか！」
大路から憲兵が駆け付けて来る。女が一人で叫んでいるのだと知ると、両肩を掴んで「商売の邪魔をしないでくれ」と連れ出そうとした。
「離して！　姐さんは、姐さんに――あんな！！」
「端女郎が客を取っているだけだろう！　大人しくしないと力ずくで黙らせるぞ」
河西は病気なのに、そう叫べばこの場は助かるだろう。ただの感冒程度ならともかく、誰も好き好んで命取りになる瘍頭持ちを抱こうなどと思わない。――だが、その後はどうなる。
香月は言葉を失くして、力なく踵を返した。叫ぶのを止めたので憲兵も「さっさと帰りな」と後追いはして来ない。遊女の家族とでも思われたのかもしれない。
ここは遊郭なのだ。
「苦」ばかりの世界故に苦界と呼ばれた、少し前までは当たり前の光景だったではないか。
――皐乃街の撤廃を提案したが、叶わなかった。
玲彰の言葉が脳裏に蘇る。馬車に駆け込み椅子に崩れ落ちると、上がってきた息に咳き込んだ。涙を零したのは苦しかったからばかりではない。

息を整えて、それでも更なる涙は何とか堪える。――鷹信を治療する時、嘆く暇などなかった。同じ奇跡をまた、起こしたいと思ったから。

※※※※

『見つからない。もう諦めなよ』

呆れた様な男の声が聞こえる。身体が沢山の手に絡め取られて、またあの夢なのだとわかった。

いつもと違って、今日は夢だというのに早く気づいた。自分が精神的に苦しんでいる時に限って見る、過去の悪夢。

無人の屋敷、追いかけられる廊下。恐らく父が亡くなった時の恐怖と自分を責める気持ちが見せるものだと、繰り返し見るに至って香月は結論づけていた。

玄達が亡くなってから今に至るまで、夢を見なかったのは鷹信が客になって不安を拭ってくれた時だけだった気がする。今思えば、狭い世界に閉じ込められたせいで現実から目を背けていたに過ぎない。

現にこうして鷹信と同じ屋敷にいても悪夢を見るのだから――

――つ。……げつ。

誰かが自分を呼ぶ声が聞こえて腕の幻が消え、また彼女は生家の屋敷内を逃げ回っていた。

訝しい。いつもと違う。

いつもなら、捕まった時点で目が覚める筈なのに。

気づけば香月は、父の部屋の前に立っていた。

辿り、着いた？

今まで決して、「此処」には辿り着かなかったのに。

『……様は、この男が持っていると確信なさっていたが。ないではないか』

部屋の中から男の声が聞こえた。若い男のものの様に思えた。

『だからさっさと殺さずに、拷問にかけて吐かせれば良かったものを』

声は一種類しか聞こえなかったが、誰かを相手に話しているのは明らかだった。

――香月。しっかりしろ。香月。

頭の上辺りから、また自分を呼ぶ声が聞こえた。

『……吐かないさ。自分の……すら犠牲にして……男だ』

――目を覚ませ！　香月！！

『こいつには他に……がいなかったか……』

ああ、と思った瞬間香月は再び走り出していた。

自分は「あれ」から逃げていたのだ。

「あれ」に捕まってはいけない。

……父がその為に、自分を隠していたのだから。

## 椽（つるばみ）

「香月っ！！」

身体が揺すぶられる感覚に、香月はようやく目を覚ました。

あまりに生生しい恐怖の残滓はまだ記憶に新しくて、目の前の状況をすぐに把握する事が出来ない。心臓は早鐘を打っているし、額を伝って汗が流れているのは感じられたのに。

「随分とうなされていたぞ……呼びかけても中々起きないので思わず揺すってしまった。済まない」

「鷹信様……？」

自分の身体を抱え起こしている鷹信は寝間着に丹前を羽織った恰好で、同じく就寝途中かその前と思われた。確か自分は皐乃街から帰り、具合が悪いと言って食事も摂らずに寝台に引きこもった筈。とすれば今はそう遅い時刻ではないのかもしれない。

ではと思い至った矢先、案の定彼の傍らに水差しが載った膳を持って苑寿が現れた。

「姫様、一体どうなさったのです？　研医殿で、何かあったのですか」

「苑寿。……貴方もしかして、鷹信様を呼んだの？」

苑寿は膳を枕元に置くと、眉を吊り上げ「いけませんか」と強い口調で返した。

「夕餉もお摂りにならず湯浴みもされずに一人で寝室に直行されれば、倉嶋候がご心配なさるのも当然でしょう。ご就寝前に候は妾に姫様が何か悩みを抱えているのではないかと、お聞きになられたのです。その時たまたま、楸(ひさぎ)が急を告げに飛び込んで来たというだけの事ですが？」

楸は側仕えの侍女の一人だ。年齢は香月よりも二歳下の十六の娘、いきなりうなされだした主を急病と勘違いしたらしかった。

それ程自分は苦しんでいたのかと溜息を付く香月に、乳母は険しい顔で尚も詰め寄った。

「妾はどうやら悩みさえ打ち明けて頂けない間柄ですので、この際倉嶋候にじっくり相談なさっては如何ですか？　夜毎うなされる様ではお身体に良くありませんし、傍にいる者達も寿命が縮まりますからねっ」

「え、苑寿。違うのよ、これは――」

「では倉嶋候、申し訳ありませんが妾共はこれで失礼致します。お寝みなさいませ」

香月の言葉を全く無視して、苑寿は鷹信に微笑む。鷹信も苦笑しつつ頷いた。

「ああ。お寝み」

乳母が足音もなく去っていった方向を呆然と見送って、彼女はふと置かれた膳に視線を落とした。

水差しの隣には、夜食が整えられてある。寝間着の替えも奥に用意されていた。

「……明日にでも、苑寿に話をしておくのだな。乳母にとって打ち明け話をしてもらえないのは、哀しいものだろう」

複雑な響きを感じ取って、香月は鷹信を振り返る。途端にその双眸が物憂げに自分を見つめていた事に決まり悪くなった。

悪夢を見ないと嘘をついた事が知れてしまった――

「私も悔しかった。彼女の気持ちがよくわかるよ」

彼の言葉は、香月にとって意外なものだった。

「え――それは、どういう」

「何故其方は、何でも一人で背負い込もうとするんだ。玲彰様に長塚伯の……尾上の手の者を探せと言われたのだろう？　それに、河西が病気になったそうだな」

「だ、誰から聞いたのですか」

「いくら其方が隠そうとしても、私の所には逐一話が入ってくるんだよ。皆其方を心配している証だ」

香月は脱力した。自分が見張られている様に思えたのだ。

所詮自分は鷹信の庇護がなければ何も出来ないと、懸念されているのだろうか。

「そう……ですか……」

「その顔だと、誤解しているらしいな。皆が心配しているのは香月、

其方の心の内なのだぞ」

鷹信の声はあくまでも優しい。彼は膳から水差しを取って、中身を器に注ぎいれると香月に渡した。

「皐乃街にいる時に其方がうなされていたのは、てっきり遊女の生業(なりわい)が辛いのかと思っていた。だが、そうではなかったのだろう」

器を受け取りながらも、香月の瞳は問われた相手を凝視している。

「妾――もしかして、何か言いましたか。うなされている時」

「いや特に何もないが。聞かれたくない事でもあるのか？」

彼にしては珍しい不興の気配を感じて、慌てて「いえ、そうではないんです」と付け加えた。

「今まではその……単なる夢だと思っていたものですから」

そう前置きして、彼女は夢の内容を話し始めた。

――正直これが、本当はどんな意味を持つのかはまだわからない。

だが一つだけわかるとすれば、黙っていても事態は進展しないだろうという事だけだった。

父は『自分の存在』以外にも、きっと何かを隠していた。

今見た夢が現実に起こった出来事の封印だったとしたら――父は誰かに、何かを狙われた為に殺されたのだろう。自分と一体どういう関わりがあるものなのかはわからないが。

夢だから、支離滅裂な部分も多い。けれど明敏な鷹信ならば、そ

こから推測するものがありそうだ。
母親の死についても、後で苑寿にきちんと聞いてみようと思った。
「……成程。屋敷に誰かが侵入していたかもしれない、と其方は考えたのだな」
語り終わった後、水を飲み干して香月は頷いた。
鷹信は予想以上に渋い表情をしている。
麻珍の中毒に似ているという部分は省いて、何者かに毒殺された様に見えたとは以前にも話した。加えて今まではただ亡骸を見つけた記憶しかないと思っていたが、だが実際のところ夢の中で見た事は、衝撃のあまり忘れていたものではないかと。考えた事を、そこは正直に。
「残念ながら、途切れ途切れにしか夢には出て来ませんでした。それに、あくまでも単なる夢かもしれないのです。……以前は『辿り着けない』というものでした。誰かに話せば心配させるだけだと思って。だから黙っていました」
「嵯峨伯の死については、私も人を使って調べさせよう。ただでさえ其方は他に考える事も多い筈だ。遠慮する事はない――河西についてもだ」
日中皐乃街に人を遣わして、代わりに様子を見させると彼は提案した。
「薬を作って、渡したのだろう。後はそう頻繁に行く必要はないのではないか」
「ですが、そこまで頼るわけには」

言いかけて香月は首を傾げた。従者が報告したにしては、細に入り過ぎている気がしたからだ。会いに行ったぐらいはわかるだろうが。

重ねて問うのもどうかと思っていると、眩しい程の微笑みが返って来た。

「気にするな。其方は出来るだけの事をしている。今度は研医殿での仕事に集中した方がいい。……流石に私も研医殿には滅多に行けないからな」

食べられるか、と鷹信は膳を引き寄せる。

「……はい」

正直食欲は全くなかったが、折角苑寿が用意してくれたのだ。少しでも食べておこうという気になった。

「じゃあ、口を開けて」

料理に手を伸ばそうとする前に、鷹信が匙を使って粥を掬い上げているのに彼女は仰天した。

「い、いいえ！　そんなとんでもないっ。病人ではありませんから、自分で食べられます！」

「あ、ああ。そうだったな」

大真面目な表情といい、どうやら疑問を持たずにした行動だったらしい。

頬が熱くなったのは温かい出来立ての料理のせいだけではなかったが、香月は黙って食べ続けた。口にしてみると、身に染み入る様に美味しく感じられるのが嬉しい。さっきまでの吐き気が嘘の様だ。

鷹信は去ろうとはせず、寝台に腰掛けて食事を見守ってくれている。

食事が終われば安心して帰ってしまうのだろうと思っていたら、彼は次に寝間着を替える様勧めて来た。もっとも実際に着替えたのは香月自身で、その間鷹信は向こうを向いて手を通しやすい様に寝間着を掲げていたに過ぎないが。

「よし、今度は隣に私が付いていよう。皐乃街にいた時の様にな」

その言葉にようやく香月は気づいた――鷹信は、添い寝してくれようとしているのだ。

大丈夫だと突っぱねるには心もとなく、かといって以前とは違い胸の高鳴りが抑えられない。

考えてみたら、十八の娘が幼子の様に他人の、しかも男性の手を握って安心して眠っているなんて常識的に考えられない状況である。ここは無理にでも、大丈夫だと言っておくべきではないだろうか。

「い……いえその、妾は」

「まさか、この期に及んで『大丈夫だ』と言う気ではないだろうな。そんな顔色をして」

短時間に二度目の鷹信の不機嫌顔に遭って、結局香月は断念した――確かにその後、握っていた手の効力か――再びあの悪夢を見る事はなかったのである。

※※※※

香月が眠りに就くまで、鷹信は以前教えてくれた話の詳細を語っていた。
尾上が畏れ多くも楠王の命を狙ったのは、そもそも研医殿の利権を巡っての争いが原因だという、その続きを。
先代国王の治世までは、研医殿はある一人の侯爵によって管理されていた。
本来侯爵位は十八を数え、十八番目に任を受ける者が領土の代わりにこの学者の城を統べていたのだという。
研医殿は国の全ての産業を開発し、莫大な収益のある一定の割合を受け取る事で運営されていた。それだけでも一侯爵領に匹敵する富だったらしく、見る間に侯爵は蓄えを増やし、自然と権力をも強めていった。
侯爵達は疎か王でさえも、経済を動かす為には彼に許可を取ってから研医殿に研究または開発させねばならず、その度に費用と称して寄付金を取られる始末であった。
国王が代替わりし今の楠王になったのを機に、諸侯は研医殿の利権を王に帰属すべきだと考えたという。表向きは収益を全て研究費用に充てればもっと産業に貢献出来るというもの、実際の所は機密と利益を独り占めしていた侯爵に危惧を抱いたのであった。

『その侯爵様は何というお名前ですか？』

寝物語にしてはあまりに衝撃的な内容だったが、香月は瞼を閉じてさりげない風に問いかけた。研医殿を巡って争いが起きたなどと、鷹信に聞くまでは知らなかったのだ。
『当時は“磴（いしばし）”候を名乗っていた。だがその後彼は研究者の倫理を踏み外した罪科で侯爵位を剥奪され、国外追放の身となったのだよ』

『倫理を……？　一体どんな研究をされたのですか』

『彼の研究の途中成果が尾上や環なのだ。磴候は身体に毒を仕込む暗殺者や、“特定の目的の為だけに生きる人間”を造ろうとした』

思わず香月はその時、両目を開いて起き上がってしまったものである。

隣に並んで横になっていた鷹信は苦笑した。

『済まない、眠るに眠られない話をしてしまったな。……この話はまた、明日にでもゆっくりとしよう』

最後に彼は一つだけ付け加えた――国を追われた磴候は辺境に辿り着き、廃嫡になった母方の姓“長塚”を名乗る様になったらしいと。ある理由で、国内にその名が知れ渡った――話はとりあえず、そこで終わった。

## 黄櫨染（こうろせん）

「嵯峨局長。大丈夫なのですか、昨日の今日で」

懲りずに施術局にやって来た香月に、姉小路は戸惑いを隠せない様子だった。

登殿し玲彰に直に昨日の事を報告しようとしたものの、肝心の本人がまたも不在。よくよく間が悪い、と苦笑する坂ノ内に一礼して帰って来た。

そうなると今の彼女に打つ手はなく、書類に印を押して朝の業務が終われば此処に来るしかない。

「済みません。お仕事の邪魔はしませんから」

「いえ、こちらは良いのです。実はあの後、舜橙さんが貴女の事を気にかけていまして」

「妾の？」

「はい。此処に来てから彼が何かに興味を示したのは初めてだったもので……私としては、叶うなら貴女に話をしてもらいたいのですが」

ただ、万一彼がうっかりまた『歌』を唄うという可能性もあるかもしれませんし――彼は語尾を濁した。

香月は眉をひそめる。確かに今日自分は舜橙に近寄るつもりはなかった。興味がないわけではないが、ただ一声であれほどの不調を訴えたのだ。声なき声という未知の領域だけに、次に何が起こるかわからないという恐怖心があった。

「いや勿論、気が進まないのでしたら無理にとは言いません。忘れてください。今日は斎条君も施薬にやって来るので、他の患者に立会われると良いでしょうし」

表情から内心を読み取ったらしく、姉小路が慌てて言い添える。

「……いえ。話してみましょう」

「よろしいのですか？」

香月は強く頷いた。

「向こうに対話する気があるのなら、『歌』は出さないでいてくれるでしょう。それに、病が自分に害をなすとわかっていても――医者は逃げませんよね」

元気良く答えたというのに、姉小路の返答はない。

それどころかあまりに唖然とした顔をしていたので、徐々に気恥ずかしくなってしまった。

「済みません、偉そうな事を言いました」

「いえ。まあ、それが……理想ですし……」

ようやく答えるなり、何故か姉小路は言葉少なになってしまった。

――呆れてしまわれたのだろうか。

昨晩鷹信に元気をもらって、少し調子に乗りすぎたのかもしれな

い。
彼の後に付いて廊下を病棟に向かいながらそんな事を思う。
でも正直な気持ちなので仕方がない。
自分はこの道を選んだ。だから逃げてはいけないと、己に繰り返し言い聞かせる。
結局頼ってしまったが、あのお方が見守ってくれると知るだけで――こんなに力が湧いてくるなど、考えもしなかった。

「……倉嶋候」

ぼそりと出された名前に、彼女は耳を疑った。
思わず見やったものの、半歩先を行く姉小路の表情はよく見えない。

「人づてに聞いたので、間違っていたら申し訳ないですが……嵯峨局長は倉嶋候とご結婚なされるのですか？」

「はっ！？」

滅多になく大きな声を出してしまって、香月は慌てて口を押さえる。施術局は大声が厳禁なのだ。

「す……すみません」

姉小路は振り返り、精悍な面にほろ苦い笑みを浮かべた。

「いえ。私の方こそ、立ち入った事を聞いてしまって申し訳ない」

複雑そうな表情に首を傾げつつも、彼ならではの温かみを感じて香月は少しだけ安堵する。大分慣れて来たのだと思った。

「あの、そのお話は一体何方(どなた)からお聞きになったのですか」

一瞬表情を凍らせた後、姉小路は「さあ。出所は忘れてしまいました。あくまで噂です」と再び半歩前へと遠ざかってしまった。

――元遊女の自分と結婚するなど、侯爵家の当主が立てられて良い噂ではない。

香月は慌てて彼に走り寄る。

「誤解です。そんな事全くありません！」

「え」

もう会話が終わったと思っていたのか、彼は虚を突かれた様な表情をしていた。

「あ……父がですね、少し倉嶋候と縁故がありまして。ご厚情により後見して頂いているのです。あくまでそれだけですから」

言いながらも香月は複雑な思いに駆られていた。

胸の辺りが苦しいのは、縁故があるなどと嘘を付いたからだろうか。悲しくなる様な内容ではない筈なのに。

彼の隣に立って協力出来る様になるのが、自分に許された分相応な望みなのだから。

「――そうですか。ならば良いのですが」

もの思いに耽りそうだった香月は、低い呟きに姉小路を見返し―

—期せずして彼と見つめ合う形になった。

「姉小路局長……？」

良い、というのはどういう意味だろう。

身分違いはわかっているが、世間の見る目の事を指しているのだろうか？

民間出身の姉小路局長でも、やはり階級社会を無視してはいないらしい。

「そ、そうですよね。妾があんなご立派なお方となんて、釣り合わないですし」

「あ、いや——違います。私は」

慌てて何かを言おうとした姉小路は、ふと周りを見回して咳払いをした。

病棟に差し掛かり、ちらほら歩いている患者も見られる。

「……この話はいずれ、また改めて」

特にもう話す必要もないのではと憮然としつつ、香月も頷いた。

舜橙の病室の前に立つと、やはり前日の記憶が少しばかり警戒を呼び起こさせる。

「本当に、大丈夫ですか？」

姉小路も彼女の態度から察したらしく、訪問を室内に告げながらも心配そうにこちらを伺って来た。

「はい」

淀みなく答えて、香月は扉に手を掛け中に入る。
舜橙はこの前の時と全く変わらぬ位置に座っていた。無気力そうな表情、丸めた背中もそのまま。
ただ違うのは、香月の入室にほんの僅かではあったが首を向ける動作をした事だった。しかも文字盤を膝に自ら置き、指を動かし“話しかける”様子を見せた。

〔ぐあいはもうよいのか〕

唖然とする姉小路からも、それがどれほど珍しい事かわかる。
香月は苦笑した。

「それはこちらの質問ですね。妾はもう平気です」

〔としはいくつだ〕

「十八になります。少しお話をしても宜しいですか？」

〔わたしもおまえにききたいことがある〕

香月は部屋の片隅に立てかけてあった椅子を並べると、姉小路と並んで腰掛け舜橙と向かい合った。

「何でしょうか」

〔げんきゅうてんをもっていないか〕

「え？　すみません。何を持っている、ですか」

聞き慣れない言葉に、字すら浮かばず首を傾げる。

〔おまえのちちおやがもっていたはずだ〕

焦れた様に彼の指は早く動いて――香月は表情を凍らせた。父親。この男は父の事を知っている？

――あの、夢。

何かを探していた侵入者。見つからず、別の方法を探そうとしてはいなかったか。

「……知りません。貴方は一体」

思わず舜橙の顔をまじまじと見つめる。皺とたるんだ皮膚に包まれた顔を。

碧い瞳だけが鈍い光を放ってこちらを鋭く見返していた。

「嵯峨局長？　どうされたのですか」

姉小路の声に緊張が破られたかの如く、彼は再び文字盤に視線を落とした。

〔わたしはただのかんじゃ　いぜんはやまあいのいなかにすんでいた〕

「そう……ですか」

会話をしなくてはと思うのだが、香月の喉から出るのは掠れた短

い相槌だけだった。
もう舜橙は彼女を見なかった。次々と滑る指が言葉を繋ぐ。
〔さびしいばしょだ　わたしとこどもたちと　けものしかいない〕
深い闇と、どこまでも続く階段と。
険しい山に囲まれた土地で、いつも光を恐れて暮らしていたと。
――一体何の意図があって、こんな話を？
「た……いへんですね。その様な場所では、隣の村に行くのも難儀するでしょう」
きっと世間話に変えようとしているのだと、ようやく言葉を返した。
〔だいじょうぶ　わたしたちにはせつしがいたから〕
またも聞いた事がない言葉が出てきた。
「せつし？　ご家族か何かでしょうか。字はどの様な――」
窓をこつ、と軽く叩く音が聞こえて香月は振り返った。
鋭く舜橙に視線を戻すが、彼は全く頓着していない様子だ。
大丈夫だ、今日は何も聞こえないと彼女は自らを宥める。
〔せつなのせつに　うじのし〕
――刹氏。

変換されて始めて、何処かで見覚えがあると気づく。
また窓が音を立てた。今度はさっきよりも強く。
〔よんだから　よかったらみてみれば〕
姉小路が突然勢い良く立ち上がり、窓に近づいた。
彼もまた厳しい表情をしている。
「姉小路局長！？」
「また、窓の外に何かいるのではないかと思いまして」
間髪を置かずに窓を覆う遮光布に手を掛ける。
「駄目です！　見てはいけない」
ひどく不吉な予感がして、香月は思わずそう叫ぶと彼に駆け寄った。
間に合わず少しばかり開けられた布、覗いた姉小路が絶句している。
「もしかして……」
彼の横に割り込み、脇から外を見た彼女もまた言葉を失った。
優に人の背丈の数倍はあろうかという大きな黒い翼が、窓のすぐ傍でゆっくりと羽ばたいている。
嘴（くちばし）は鋭く曲線を描き、足の鱗（うろこ）は禍々しく突起を連ね金色に光る。
先端には猛獣であろうとも一捻りに出来そうな爪が覗いていた。
「……刹氏！」

頭の中で繋がった知識と共に、香月は悲鳴混じりにその名を口に上らせていた。
実在する中でも、最も大きな鳥の名前を。

※※※※

刹氏は正式な鳥名を東鳥（とう）と言い、雄を刹氏、雌を那白（なはく）と呼ぶ。
古来より生存を確認されている猛禽だが、普段は険しい山に棲んでいる為に人目に触れる事はまずない。
彼女達が驚いたのは、何も珍しい鳥がいるからばかりではなかった。
空中で羽ばたきながらこちらを見ている刹氏の大きさは、凡そ聞き知る範囲のものを超えていた。二倍、いや三倍はあるかもしれない。地域に拠って差があるのか、それとも偶然に生まれついたのか。
言葉もなくただ凝視したまま立ち尽くす人間達を刹氏は赤い目で一睨みすると、大翼を翻して去って行った。

「一体今のは――」

狼狽を隠せないまま、部屋の中に視線を戻すと舜橙のそれとかちあった。
まるでこちらが観察されていた様な気がして、香月は寒気を覚える。

――確かに呼んだ、と言った。

声なき声を出せる彼ならば、きっと可能なのだろう。
前日の様なもの以外にも、様々な諧声数を出せるという訳か。

「……刹氏、というのですか？　今の大鳥は」

隣の呆然とした声に、香月は己の過誤を悟った。

「いやあ、びっくりしたなあ。しかし大きいものだ――嵯峨局長はよくご存知でしたね。見た事があるのですか？」

「そ、それは……」

単純にただ驚いている姉小路から視線を移す事が出来ない。

けれど舜橙が自分を見ているのは痛い程わかった。

――何故知っているのか、という目だ。

答えはわかりきっている。幼少の頃より香月は父親の書物を読み耽って育った。王都近辺を出た例（ためし）はなく、情報源は其処から以外にありえない。

では、父がそれに関する書物をどうして持っていたのか。たまたまの知識欲に拠るものだと思いたい。しかしこうなると――

「……さあ。何かの本で読んだのかもしれませんし、人から聞いたのかもしれません。忘れてしまいました」

硬い笑顔しか作れなかったが、何とか笑って誤魔化した。

「ほお、流石に博識でいらっしゃいますね」

姉小路は素直に感心しているというのに、どういうわけか室内の奇妙な緊張感は緩む気配を見せない。

「わ、妾もう今日はこれ位で失礼しますね――」

そそくさと扉に香月が手を掛けたその時、向こう側から三回扉を叩く音が聞こえた。

「舜橙さん、斎条です。入ってもいいでしょうか？」

## 刈安（かりやす）

鳴り響いた鈴の音と共に扉を開けた斎条は、目の前の人物を視界に納めるとひどく驚いた顔をした。

「きょっ、局長！　どうして此処に」

両手にはそれぞれ紙の束と、玻璃の瓶やら注射器やらが載った小さな角盆を掲げ持っている。

咄嗟に答えられずに、香月はただ脇に避けて「どうぞ」と彼を室内に通した。

「ああ、済みません……副局長が探していましたよ。もう少ししたら、打ち合わせを始めるそうです」

「そうですか。わかりました」

返って来ない最初の問いに頓着する様子もなく、斎条は机に盆を置いて立ち尽くしている姉小路に向き直った。

「姉小路局長も、どうかなさったんですか？」

「ああ……いや、何でもない」

扉近くにいる香月に視線を当てていた姉小路は、呪縛から解けたかの様に傍らを見下ろした。

寝台に座っている舜橙と、怪訝そうにしている斎条を。

「舜橙さんが鳥を呼び寄せてね。少し驚いただけだ――それより、

今日の薬の時間だったね」

「はい。天紋糖（てんもんとう）の代わりにというご指示の通り、亜羅薬（あらゞす）を処方して参りました。効能は同じですが、亜羅薬は血肉への作用が早い。滞在時間も長いので、より期待出来るかと思います」

「原料は？」

「野蔓（のかずら）の根を乾燥、後に粉砕し液状にしたものです」

斎条は盆の上から、木の台座に数本固定されている瓶の内一つを取り出した。

注射器を左手に持ち、蓋を開けた薬剤に針を入れて吸い上げる。

舜橙の指が文字盤を滑った。

〔くすりなどきかぬ　むだなことを〕

斎条は苦笑する。

「そんな事ありませんよ。すぐに治るまでは行かなくとも、症状を改善するだけでも大分違うでしょうし」

〔このまえのくすりはくるしいだけだった〕

答えに詰まった彼に姉小路は「拒絶反応が出たのだ。一時的なものだったが」と付け加えた。

「燐酸（りんさん）の数値が上昇して、衰えていた筋肉が固まってしまったのだよ」

「それは――そんな筈は」

狼狽の色を見せた斎条は、未だ部屋から出ずにやりとりを凝視していた香月を認めて「話は後ほど詳しく」と小声で言った。

「斎条さん。天紋糖について妄も詳しくお聞きしたいのですが。打ち合わせが終わったら、局長室に来て頂けますか」

彼は苦いものを飲み込んでしまった様な表情をした。

「はい。わかりました」

冥査（めいさ）という木の果実から精製される天紋糖は、体質が合えば肉体の老化を防ぐものとして妙薬だ。だが合わない場合はひどく苦痛を伴う――賭けにもなりかねない、その様な危険な薬を何故使ったのか。

しかも様子からして、敢えての選択だと想像が付いた。

――もしかして、斎条さんは焦っているのではないだろうか。

疑念は調合室での、局内の打ち合わせの際に一層強くなった。というより、斎条本人が新薬の開発報告の後に自ら提案したのである。中々症状が改善しない為、月下病には荒療治が必要なのではないかと。

「天紋糖を投与すると、血中の燐酸及び乳酸数値が上昇致しました。筋肉の組織破壊速度が三段階早まり、代替として亜羅薬を投与。緩（かん）解（かい）して今に至ります」

仙丸は手元の資料をめくりながら「血糖数値は変化なしの様だな。

それもまた訝しな話だ」と溜息混じりに言った。

「通常の人間が筋肉疲労するには、まず血糖数値が変動する。燃料を使い切れば筋肉を切るのは予想範囲だが、使わずに切るとは。――組織からの石素（せきそ）の漏出を見ても、状態は激しい運動の様相に似てはいる。だが実際は、手足一つ動かしていないのだろう」

「はい。そうなのです。最近では日光に当たる事は少ないので、燐酸数値の上昇はごく少量に留まってはおりますが。予定としては亜羅薬の経過を見てから、新たな対処を考える次第です」

「あの。ちょっと待って下さい」

居並ぶ局員は総勢で二十名余り。新薬の為と普段交代で休むものを全員が出席していた。多くの視線を受けて、香月は怯みそうになる己を叱咤しつつ――勇気を振り絞って続ける。

「先ほどから伺う限り、ただ薬を与えて数値を測っているばかりではありませんか。舜橙さんは病人かもしれませんが、果たして一面だけで判断を下して良いものでしょうか」

空気が凍りついたのが、発言した彼女自身にもはっきりとわかった。嵐の予兆だ。

「仰る意味がわかりかねますな」

額に手を当てて嘆息交じりに答えたのは、当の斎条ではなく仙丸だった。

斎条はと言うと、書類を手に呆然とこちらを見て停止している。

「滅多に発言なさらないと思えば。もう少し具体的に説明して頂かないと、小職には愚考すら浮かびません。それとも、何か名案でもあるのですか？」

香月は言葉に詰まった。

「――具体的にはまだです。でも」

「お話になりませんな。『でも』ですと？　まるで子供の反論ではありませんか」

「妄はただ、老人の身体の仕組みをもっと考えた環境が必要ではないかと思ったまでです」

謎は残るものの、舜橙が苦しんでいるのは確かだろう。

光を恐れて外にも出られず、緩やかとも言えない死の足音を座して待つ日々は辛いだろう。

だというのに彼に引導を渡すのは、病気だけではないのかもしれないのだ。

本来患者の味方である立場の者が――そう思ったら、黙っていられなかった。

「舜橙さんは患者であって、単なる実験の題材ではないのではありませんか？　結果が出ないからと言って強い薬を使うのは早道でも、副作用に耐えられる体力がなければ命を縮めるだけでしょう。その辺りをどの様に考えているのか、伺いたいと思います」

「……それは」

後に続く言葉を探して口を開閉させたものの、斎条は結局黙り込

んだ。
問いという名の叱責に聞こえるのはわかっている。局長とはいえ新参で、年若の自分から言われるのは屈辱だろう事も。
「具体的になるかどうかわかりませんが、食事についてはどうですか？　老人は歯が衰えるから、液体で栄養を摂取するでしょう。日光に当てないだけではなく、体力を保つ為に夜だけでも身体を動かしてみてはどうでしょうか。どの道昼はじっとしているのなら、眠っておいた方が良いのでは？」
言葉を連ねながらも、どうしても思考は河西のあのやつれた姿に辿り着いてしまう。
自分にとって、病を治すという事がどういう意味を持つのか。
仙丸はせせら笑った。
「莫迦な。それこそ本末転倒ではないですか？　老人は夜中起きて昼眠ったりはしないものです。――遊女ならいざ知らず」
室内はざわめいている。彼の言葉に反応したと言うよりは、今や局長と副局長の対決と化してしまった議論の行方に戸惑いを隠せないらしかった。
だから恐らく、最後の捨て台詞めいたものの意味を知るのは本人と、投げられた相手だけだったろう。
香月は両手を拳の形に強く握り締めた。
此処で萎縮すれば、きっと仙丸の思う壺なのだ。
静かに息を吐くと、彼女は部下の酷薄そうな双眸を真正面から捉えた。
「そういった考えも必要だと思うのです。遊女と例えが出ましたので、ついでに申し上げておきます――何故玲彰様が、皐乃街に介入

なさろうとお考えなのか」

仙丸の片眉が上がる。

素性が知れても構わないと思った。

「皆さんはあの街を、夜にご覧になった事があるでしょうか。華やかで毒々しい牢獄です。病に罹った遊女達は、医者がいても借金が増えるので治療も受けられず、環境の悪さ故にいつも死の危険にさらされている。遊女を卑しき職業とお考えかもしれませんが、少なくとも病は彼女達ではなく、客が持ち込むのです。人としての誇りを奪われて尚、病を得た者の絶望はどれ程のものか。……妾はあの街を知って、病を治す事はそれのみならず、人の希望をも治療する事だと思いました」

言いながらゆっくりと、視線を仙丸から斎条、そして他の局員達に移していく。不思議と緊張感は薄れていた。開き直ったのかもしれない。

「そして玲彰様も、あの街に棲まう遊女達を救いたいと考えてくださっているからこそ、変えようと動かれている。理想論だと言われればそれまでかもしれません。でも、皆さんにもある筈です。この道に入ろうと思ったきっかけが」

斎条は俯いて、ひどく気まずそうに目を伏せていた。

「もしそれが妾と指針を異にするものであれば」

香月は上司との会話を思い出していた。

『上に立つ者は責務を負わねばならない』と言った、あの言葉。

大きな事は出来なくとも。

自分の発言に責任を持つ、それぐらいの覚悟はある。

「――同じ様に考えて頂きます。これは局長命令です」

室内は静まり返った。

先日香月に素っ気無い態度を取った女性局員も、その他の者達もこちらを見てはいるものの、驚きを隠せないといった風情だった。無理もない、きちんと意見を言ったのは此処に来て初めてなのだから。

それでいきなり「命令だ」はないのかもしれない。

「……確かに、ご立派なお言葉ですが」

予想通りというか、仙丸のこめかみが震えている。相当怒っているのが看て取れた。

「失笑を通り越して言葉もありませんな。――我々をどこまで愚弄されるのか」

「え」

言葉の意味を図りかねている香月を、彼はこれでもかという程憎憎しげな眼差しでひと撫でし、椅子から立ち上がった。

「これにて今日の打ち合わせは散会とする。それぞれ業務に戻る様に」

「しかし副局長――」

止めに入った斎条は、仙丸のひと睨みに遭って絶句した。

戸惑いながらも次々と局員は席を離れ始める。
香月は仙丸に駆け寄った。

「ちょっと待ってください！　まだ妾は、貴方がたの考えを伺っておりませんっ」

「――説明する必要はありません」

冷え冷えとした黒い両眼が彼女を射抜くが、何に拠ってかふとその頸（つよ）さが揺らいだ。

「言われずとも同じであるから、改める必要はない。今こそはっきりとわかりました。――貴女がそうであるから、私は」

心底嫌そうに、彼は呟いた。
顔を寄せ、目の前の当人にしか聞こえない程度の大きさで。

「だから私はきっと、貴女が嫌いなのですよ」

「なっ……」

香月が鼻白んだ一瞬の隙を突いて、仙丸は調合室から出て行ってしまった。
勢い良く音を立てて閉まった扉を、眺めて多少憮然とする。
本当に彼は葉山に似ていると思った。彼女も最後に会った時、わざわざ自分を「嫌いだった」と宣言したのである。
香月自身がどうにも癪に障ったと。

――とりあえず、仙丸様の心証を更に害したのは確からしい。

好かれたいと思っていたわけではないが、愉快な心持になれないのもまた事実だった。

「あ……あの、局長」

局長室に戻ろうと扉を開けて廊下に出た時に、背後から声がした。振り返ると斎条が悄然とした面持ちで立っている。

香月は扉を閉めると「用事は済んでしまいましたから、仕事に戻って良いですよ」と微笑んだ。

しかし青年は動こうとしない。

「済みませんでした。僕は決して、実験なんて――そんな風に」

「どうやらその様ですね。妾こそ、偉そうな事を言ってしまいました。申し訳ありません」

言った事に後悔はなかった。それでも、勝手な言い分だろうという自覚もある。

だから頭を軽く下げたのだが、彼は「とんでもないっ」と勢い良く両手を振って打ち消した。

「……きっと僕も貴方と同じなんです」

「え」

目尻を下げて、斎条は儚げな笑みを浮かべた。大人の男性に適切な表現ではないのはわかっていても、「愛らしい」としか思えない表情を。

「この道に入ったきっかけですよ。僕は大切な人の病を治してあげ

たいと思ったのです。だから必死に勉強して、近所の医者に弟子入りしたというのに」

研医殿に入るには、局によって様々な入殿資格が必要だ。薬処方局は数年以上の実務または、薬学界において信用ある人物の推薦がなければ入れなかった。

それは決して容易(たやす)くはないと聞いている。

「局長のお話もそうでしょう？　皐乃街を救いたいという思いがすごく伝わって来ましたから。――僕は『治したい』と焦るばかりで、原点を忘れてしまっていたと気づかされました」

「斎条さん……」

「もし失態を取り戻す事をお許し頂けるなら、舜橙さんの治療にこれからも助言を頂きたいのですが」

香月は首を横に振った。

きっと斎条なら、一人でもきちんとやっていけるだろうと思った。

「失態だなんて、思っていません。あの人は貴方の患者ですから――それにきっと斎条さんなら、妾の思いつく事など簡単にこなされるでしょう」

「いえ。実は姉小路局長にお聞きしたんです。局長が最初にここに来た時の事」

自分の顔の血が、音を立てて引いていくのがわかった。

鷹信が毒を受けて危機に陥ったのは――極秘裏にされていたはずだ。

確かに治療には仙丸の許可を取ったし、施術要員として局長級の者が必要だと姉小路も駆り出された。治療に集中していた香月は、彼と会話した記憶がほとんどないのだが。
ただでさえ元来医術に携わる者は、患者の事をおいそれと他に漏らさない。基本中の基本ではないか。

「……妾の？　どんな事でしたか」

調子を下げた声音にも気づかないのか、斎条は興奮してさえ見える。

「局長は患者の命を救う為に、本当に必死だったと仰っていました。治療は勿論、常に手を握って声を掛け、励ましていたと。経験があまりないと後日聞いて、とても驚かれたそうです」

「え、ああ――そう、ですか」

不安が外れて、つい安堵の息が漏れた。
あの時の事でただ覚えているのは、横たわる鷹信の息遣いと血の気の失せた顔だけだ。
疲労と常に襲う絶望に、自分も気を失いそうになるのを堪えるので精一杯だった。
だがそれも、傍らで手伝ってくれる玲彰や姉小路がいたからこそ、助けられたのかもしれないと今では思える。

「あの時は姉小路局長にはとてもお世話になりました。患者は妾のとても大切な人だったのです。妾こそ、支離滅裂な指示に迅速に対応して頂いて――感謝しているというのに」

感極まって答えると、斎条はふと目を丸くして静止した。

次いでからかう様な笑みを浮かべる。

「もしかして、その患者は局長の恋人ですか？」

香月は目を伏せ俯いた。つい最近にも、他から似た様な質問をされた時の事を思い出したのである。

「……いいえ。でも恩人なのです」

もし失ったら、恐らく自分も生きてはいけないだろうという程の。

「成程――姉小路局長もお気の毒に」

え、と顔を上げると斎条は「何でもありません。忘れてください」と笑った。

「話は戻りますが、助言して頂きたいのは本当なので、ぜひ宜しくお願いします。それと――」

ちょっと来て下さい、と廊下を先立って歩いた彼は局長室前辺りでこちらを振り返った。

「ご内密に局長にお話があるので、お時間を頂けますか？　出来れば薬庫の中で」

「え、ええ。構いませんが、一体どうして」

近寄って気づいたが、それまでの柔和な印象が一変、斎条の面は曇っている。

声も低い。

「ちょっと見て頂きたいものがあるのです。……もしかしたら、薬処方局にとって重大事ではないかと思いまして」

## 鳥の子（とりのこ）

薬処方局の重大事――

彼の言葉で真っ先に香月の頭に浮かんだのは、先日発覚した麻珍毒の減失だった。

「い……」

薬庫に入り、後ろ手に扉を閉めながら次にどう言葉を継ごうと考える。

先に入室した斎条は、足早に部屋の中央の卓近くに歩み寄ってこちらを振り返った。

何か質問しなくてはと気ばかりが焦る。万一違う内容だった場合には、重大事項を漏らす羽目になってしまうのだ。慎重にならざるを得ない。

「一体――どうしたと言うのですか」

結局紡がれるのは、狼狽を押し隠した陳腐な質問だった。

「僕は今日、調温器を使おうとして管理簿を見たのですが。最後にこれを使ったのは局長ですよね？」

「え……ええ」

「変な事を訪ねるとお思いになるかもしれませんが――薬は大丈夫でしたか？」

質問の意図を量りかねて、香月はやや困惑した。

「確かに散薬を乾燥させる為に使いましたけど……大丈夫、とは何を指して仰るのですか」

こちらに来てください、と差し招かれるままに調温器の側に寄る。機械に特に変わった様子は見られない。一昨日開けた時と全く同じ温湿度を保っているはずだ。

と思いつつ、正面にある計器部分の数値を観察していた香月の面が凍り付いた。

「――これは」

湿度が変更されていた。

しかも通常の適湿度を遥かに超える数値に。

生薬を粉末状にした散薬だったが、手順としてはまだ水分が多少ある為腐りやすい。故に直前まで決まった湿度で乾燥させ、一種の「蓋」を粒子に行うのが通常だった。それを。

言葉もなくただ驚愕に立ち尽くす上司の前で、斎条もまた不安気に機械を見下ろしていた。

「もし、もう薬を誰かに渡してしまったのでしたら――至急ご確認なさった方が宜しいかと」

視界が暗く傾いで、無意識に香月は近くの卓に手を突いた。

「だ、大丈夫ですか」

斎条の腕が身体を支える。自分のものとはまた違った、薬の匂いが鼻腔をくすぐった。それすらも眩暈を覚える程に息苦しい。

何とか押し退けて立ち上がるのにどれ程時を要しただろうか。

「すみません……大丈夫、です」

混乱した頭で昨日の経緯を辿る。

そんな筈はない、と結論はすぐさま彼女自身を打ちのめした。念入りに何度も確認したのは間違いないのだから。

しかし現実に機械は一目瞭然の異常を訴えている――となれば、考えられる可能性は二つ。

「故障ではないと思います」

考えを見透かしたかの様な言葉には答えず、香月は駆け出していた。

「局長！？」

「後は頼みます。すぐに戻って来ますから！」

故障でなければ、誰かが故意に装置に手を加えた可能性しかない。だが今は――今重要なのは、そんな事ではなかった。

局長室にとって返し馬車を呼んだが、退勤の時間でもない為手配には時間が掛かる。

登記装置に「外出」と打ち込み、出入口前で歯噛みしながら用意が整うのを待った。

ようやく目の前に馬車がやって来て、乗り込もうとする時に背後に人の気配を感じて振り返る。

「僕も付いていっていいですか」

「斎条さん？」

青年は何処かふてぶてしく――といっても元来が菓子のごとく甘い風貌なのであまりそうは見えないが――笑って、当然の様に馬車の扉を上司の為に開けた。

「僕一人ぐらい乗れますよね。こんな立派な馬車なんですから」

「え、ああそれはそうですけど……」

「薬庫はきちんと元通りにして来ました。調温器は後々の為にそのままですし。ああ、きちんと外出の登記はしてきましたのでご心配なく」

戸惑いと焦りに判断を躊躇っている内に、彼は軽々と馬車に乗り込み、香月の向かい合わせの席に座った。

役割を取られた馬丁が困惑の面持ちで室内を覗き込んでいる。

「お嬢様、宜しいのですか？」

一瞬の沈黙の後、香月は「ええ、出してください」と答えた。

細かい事は後で考える事にしよう。今は河西の病状が心配だ。

――もしあの薬が腐っていたら、一体どんな反応が出るのか計り知れない。

単に効かないというのであればまだ救いはある。もう一度作り直せば済む事なのだから。

しかしこれまで、そんな初歩的な過ちで出来たものを患者に与えた経験はなかった。結局、実践で患者と向き合う機会自体が、香月はこの目の前の青年にも及ばない。

――だから仙丸様は、あの様にお怒りになったのだろうか。
実務経験もないくせに、とかつて言われた記憶。
彼の罵倒は事実だった。
信念そのものに揺るぎはなくとも、自分には圧倒的に足りないものがある。
「……先ほど言いかけた事なのですが」
香月は思わず視線を上げた。斎条はまたも深刻な表情に戻っている。
「故障ではないと思う、という話の続きです。調温器は解体していないので、あくまでも憶測に過ぎません」
「え、ええ……」
走り出した馬車はまだ王都の整備された路を走っている為、中は静かなものだった。緊張感がそのまま伝わる程に。
「しかも非常に申し上げにくい事で……昨日、局長が施術局に行かれた後に副局長が薬庫に入るのを僕は偶然見かけました」
まさしく考えていた人物の話題に、香月は息を呑んだ。
「仙丸様が？」
斎条は頷く。

「局長が施術局に向かわれたのは、恐らく昼二刻辺りでしたよね」

「そうですね……多分、その頃だったかと」

研医殿を出る時に時計を確認したが、後は漠然とした記憶だった。河西の薬は昼過ぎに完成したのは間違いないので、逆算すると恐らく二刻かもしれない。

「僕は業務に必要な薬剤を求めて薬庫に向かったのですが、ちょうど部屋に入る副局長を見かけまして。施錠等面倒なのでこれ幸いと、後に続いて入ろうと思ったのですが――」

すぐさま扉は閉められてしまい、しかも中から再び施錠する音が聞こえたという。

「普段はそんな厳重にはしないでしょう？　これは迂闊に入っては大目玉を食らうなと思いまして、僕はまた別の作業をして時間を置いたのです。結局そっちの作業が難航して、入れたのは夕四刻前でしたが」

言い終わって流石に決まり悪そうに「もしこれだけなら、僕も何とも思いません」と付け加えた。

「でも副局長は最初から局長を目の敵にしていました。正直どちらの肩も持つつもりはなかったけれど、余りに大人気ない。――今回の事も、あの人ならもしかしたらと思ってしまって」

香月は答えられなかった。

心配そうに見つめる斎条の目が反応を待っているのに、答えるべき言葉の何ものも浮かばない。

それから皐乃街へ到着するまでの一刻の間、遂に彼女の口が開かれる事はなかった。

※※※※

もうそろそろ午(ひる)を迎えようかという皐乃街は、陽光にさらされてただの街と化していた。他のそれとは違うのは、大路はひどく閑散としている所ぐらいである。

初めて遊里に入るらしく物珍しげに市中を見回す斎条に構わず、香月は真っ直ぐ河西のいるであろう切見世に急ぎ足を向けた。

鷹信がどの様に手配したのか、具体的には何も聞いていない。一日一度見回るものなのか、それとも始終誰かを張り付かせているのか。

一見周囲に誰もいないと思える荒家に辿り着いて、恐らく前者なのだろうと考えた。

近寄るにつれ、香月の不安は増大していった。

格子の中に河西がいない。

「姐さん！？」

駆け寄って格子を両手で鷲掴み、顔を食い込ませて中を窺う。六畳ばかりの部屋は汚れた布団が敷き詰められていた。

年中取り払われる事はないのだろうと思われる床には、今はほとんど使われている気配はない。だが一つ、一番奥にあるものが小さく膨らんでいた。枕に流れる、もつれた黒髪も。

「河西姐さん！」

入り口を探して左手に回る。格子の横手に段差のある上がり框(かまち)を見つけて中に踏み込んだ。

家の中は静かだった。人が息をしている気配など感じられない。

――まさか。

枕元に近寄り、横たわっているのが紛れもない河西その人だとわかる。

身体の芯が一瞬にして冷え、震えが襲って来た。

「局長！　しっかりして下さいっ。まだ生きてますよ！」

悲鳴を洩らしかけた香月は、すぐそばにある顔に驚いた。

我に返って初めて、自分が彼に抱えられていると気づく。

「――ほら。きちんと呼吸もしています」

いきなりの抱擁に何の言及もせずに香月から手を離すと、斎条は膝を付いて河西の額に手の甲を当てた。

「しかし熱が高いな……皮膚に硬結（こうけつ）がありますね。瘍頭の症状に似ていますが、そうなのですか？」

落ち着き払った声と眼差しに、彼女もまた何とか平静を保とうとする。

「は、はい。此処から動かせず、まだ血液を調べてはいませんが。実際に聞き知る瘍頭の初期症状にそのまま当てはまります。……なので硬結と腫瘍を防ぐ調薬をしました」

「成程。潜伏時期は？」

「一昨日診た時はまだ第一期程度のものでした」

「第二期には発熱するとも聞いていますが、そんな短期間で転換するとは考えにくいですね……これはやはり、薬が変異していたのかもしれません」

悄然として床に座り、膝に両の拳を握り締めて香月は俯く。

ごめんなさい、と小さく呟いた。

堪えていた涙が頬を伝う。

「妾の、せいで」

「――局長」

どうしてこうなるのだろう。

これは自分の考えが甘かったという事に対しての罰なのだろうか。だとしたら、河西を巻き込むなんてあんまりだ。

頬を撫でる感覚がした。斎条が零れ落ちた涙を布で拭って苦笑している。

「先ほどの話ではありませんが……副局長が貴方について話していた通りですね」

まだ諦めなくても大丈夫ですよ、と柔らかく微笑んだ。

「局長は何て言うか、懸命過ぎて危なっかしいです。此処に付いてきて正解でした」

「斎条さん……？」

「とりあえず薬は止めて、解熱薬を飲ませましょう。残りを持ち帰って調査する、今はそれが急務ですよね」

言って彼は上着の懐から小さな玻璃の器を取り出し、更に蓋を開け中から匙を取り上げた。河西の口元に向ける。

僅かに開いた唇の隙間からそれを差し込んで、掬い取る仕草をした。

静かに抜き取った匙をまた器に戻し、そのまま香月に手渡す。

「血を採れないのであれば、何か手がかりになるかもしれません」

「何と言っていいのか……色々とありがとうございます」

きっと自分一人では、脆く心砕けていただろう。

座ったまま深々と頭を下げると、すぐさま手を添えて顔を上げさせられた。

「気にしないでください。僕も最初は局長みたいな状態でしたよ。今でもこんなんですし」

それより患者の看病ですが、と表情を改めた。

「誰か傍に付いていてあげないといけませんね」

「薬を飲ませる様に頼んでいる人が少し離れた場所にいるから、聞いてみます」

立ち上がろうとして、香月はふと傍らの河西に目を向けた。

化粧すらもしていない血の気の失せた面は皮膚も荒れていて、瞼は微動だにしない。それでも耳を寄せると、僅かながら呼気が感じ

られた。

「……姐さん、また来ます」

重ねての謝罪も励ましも、今は無意味に思えたから――短く、それだけを。

立ち上がり斎条の待つ戸口に向かう。と同時に、近づく第三者の足音に気づいた。

「おや、またあんたなの」

二人の目の前に立ち塞がったのは、先日見かけた端遊女だった。

女は相変わらず不躾な視線で香月をひと撫でした後、斎条を穴が開こうかという程眺め倒した。

「こちらの兄さんは何だい？　まさか端女郎を買う趣味があるとも思えないけど。あんたの情夫かい」

斎条は目を白黒させている。白粉に血の様な口紅。襟を大きく抜いた背徳的な着物姿の女に、面食らっているらしかった。

「どちらも違います。――それより姐さん、お願いがあるんですが」

「は？」

あの人を、と香月は部屋の中の河西を指し示した。

「見守る程度で構いませんから、看病してやってくれませんか。定期的に他の人も来ますが、それ以外の時に何かあるかもしれないので」

「ああ、あの瘍頭持ちかい？」

冗談じゃない、とその渋面が物語っている。

「瘍頭は一緒にいるだけでは伝染りません。私達は医者です、安心してください」

「でもねえ、あたしも結構忙しいのよ。あんたそんな事言うなら、さっさと引き取れば？」

「もう少ししたら引き取ります。短い間だけでいいんです」

煮え切らない女の態度は、香月が懐から金子を取り出すや否や豹変した。

「ああ、わかったよ。様子見てりゃいいんだろ」

上機嫌に部屋に入る女の背中に一礼する。

歩き出した香月の後から、「いやあ初めて見ました。強烈ですね」という斎条の呟きが聞こえて来た。

切見世の遊女は概ねあんなものだと言ってやりたかったが、心は河西の看病の事で一杯である。

特に何も言わずに彼女はそのまま寿楽へと急いだ。

## 一斤染（いっこんぞめ）

「河西に飲ませた薬は、それで本当に腐敗していたのか？」

香月は悄然とした面持ちで、鷹信の問いに「はい」と力なく答える。

朝からずらりと料理の並んだ食事にも、少ししか手を付けていない。食欲がないのは昨日の疲労が取れないから、だけではなかった。

昨日あれから彼女は皐乃街から取って返し、薬の検査に取り掛かった。

だが原因を突き止め代わりの薬を作るという作業はひどく時間が掛かり、倉嶋邸に戻ったのは夜十一時を越える辺りだったと記憶している。

前日に引き続き夕餉も摂らずに自室に直行した為知る由もなかったが、鷹信が自分が戻るまで眠らずに待っていたのだと翌朝苑寿が教えてくれた。

心配させない為に「今日は遅くなりますので食事はいりません」と、供の者に連絡させたのが仇となったらしい。気遣いへの礼と一緒に、香月は昨日の出来事を彼に相談した。

「検査の結果では、ごく少量の黴（かび）が発生していました。本来あるはずの薬効成分が黴に食べられてしまった様です。本来すぐさま乾燥させるものなので、見た事のない種類のもので……姐さんの熱はそのせいだと思います。瘍頭は抵抗力を奪いますから……」

「私も河西が熱を出して寝込んでいると、報告を受けていたからちょうど昨日其方に伝えようとしていたところだったのだが……まさか薬に原因があったとはな。他の原因の可能性はないのだな？」

香月は頷いた。

「だとしたら確かに、今の所は仙丸殿が一番怪しいという事になるな」

それまで手にしていた箸を止めて、鷹信もまた渋面を作って考え込んでいる。

「麻珍毒の盗難についても、犯人はまだわからないのだろう。同一人物の可能性も捨てきれないが、だとしたら河西の薬については目的が不明だな。一体何の得があるのか……」

目的、の言葉に香月の表情は一層暗くなった。

「――妾を排除したいから、かもしれません」

「香月」

「卑屈で言っているのではありません。実は仙丸様は私が局長の地位にいるべきではないとお考えなのです。新薬の開発にも関わって欲しくないご様子でした。姐さんの方が心配だったから、構わないと答えたのですが」

望み通りに引き下がったのに。唯一の目的さえも、奪おうと思われるほど嫌われていたのだろうか。

鷹信はどこか納得いかない様子だ。

「まだ尚暁殿が犯人と決まったわけではないだろう。それに彼は――」

言い淀んで口を閉じる。

「鷹信様……？」

「いや、何でもない。ただ、私にはどうしても尚暁殿が其方を憎んでいるとは思えない理由があるのだ。他の犯人の可能性も考えた方がいいと思う」

何か含みを持たせた様子に、香月は眉をひそめた。

きっと鷹信は知らないに違いない。仙丸の外面の良さは身に沁みて知っている。

だが流石に、彼よりも玲彰の近くにいる自分に嫉妬しているのでは――などとは言えないので言及は避けた。

「ところで香月、麻珍毒は苦味無臭の白色の粉末と聞いているが、河西の薬の方はどうなのだ」

「え、はい。そうですね……色は少し黄味がかっているでしょうか」

「ではすり替える事も出来ないか。麻珍毒を盗んだのなら、必ず彼らは誰かをまた毒殺しようとすると思ったのだが」

今はとにかく薬庫から目を離さずにいるしか方法がないな、と彼は視線を香月から外して宙に泳がせた。考え込む時の彼の癖だ。

だが程なくして再び香月を見据えた時には、その顔には柔らかさが戻ってきていた。どこか悪戯を考え付いた様な笑みさえ浮かべている。

「私の部下を入れられれば良いのだが、玲彰様は許可を下さらないのだ。技術者以外を入れると、薬の管理の妨げになりかねないと。

だが用事の『ついでに』私自身が薬処方局に出向くぐらいは構わないだろう」

鷹信の提案は、驚くと共に香月の心に希望を与えた。

「ありがとうございます。ご迷惑をお掛けして申し訳ありません」

「迷惑などではないぞ。元良候の研究も常々興味があったのでな。いつも亳令宮で報告を聞いているだけだから、そちらも見たいと思っているのだ」

河西の命に比べたら、もう自分のささやかな矜持など取るに足らないとしみじみ思う。

このお方ならきっと、という絶対的な信頼が彼女の中にはあるのだった。

「元良候の研究――舜橙さんという患者を観察して、『声なき声』の仕組みを調べるというものですね」

ああ、と彼は頷いた。

「聞けばその患者は、普通に話す事が出来ないそうだな」

舜橙の存在を思い出して、ふと香月は浮かんだ疑問をそのまま口に出してみた。

「あの、唐突に思われるかもしれませんが。長塚伯の研究で、その……彼の様な人を『創った』という事例はないのでしょうか」

自分の父を知っているという様子を見せた、特殊な能力を持った

人間。『げんきゅうてん』という言葉、そして知られる以上の大きさの刹氏。
もし舜橙が尾上の仲間で、患者として研医殿に潜り込んでいたとしたなら？
だがその疑問は、鷹信の次の言葉で雲散霧消してしまった。
「いや、そこまでの報告はないな。言いたい事はわかるが、聞けば舜橙という患者は筋肉が衰えて病室付近しか動けないのだろう？薬庫まで行って麻珍を持ち出すのは難しいだろう。万一演技であったとしたらすぐに姉小路に知れるだろうし」
「そうですよね……」
様々な検査の結果で彼は「月下病」と認定された。確かに身体の成分まで偽るなど無理だろう。思わず落胆を顔に出してしまった香月に、鷹信は優しく言った。
「あまり気落ちするな。念の為舜橙の身元を調べてみるといい。姉小路に言えばすぐにわかるだろう。全ての可能性を一つ一つ、消して行けば進展もあるかもしれない」
「はい」
「長塚の研究内容は確かに謎の部分がまだ多いのだ。知られているのは『特殊な食物を摂らせて生き物を変異させる』と『異種の生命の肉体を繋げる』というものの二つだった。後者は研医殿で成功例を見ない内に終わったらしいが、前者はある程度成果があったという」
香月はすぐに反応出来ずに戸惑っていた。想像もつかない実験で

ある。世の役に立つというよりは、単に知的好奇心の満足の為ではないのか。
と同時に、やはり、と確信めいて頭の隅をよぎるものがあった。
「勿論『特殊な食物』の中には、毒の存在もあった。元々、ごく微量な毒を摂取して耐性を付けるのは王侯貴族の中でも伝わっていたが、彼はそれを更に強化させていったのだ。実験された対象は毒を以ても殺せないし、爪に毒を仕込んでも全く身体に害をなさないそうだ」
香月は尾上が皐乃街で河西を人質に取った時の事を思い出していた。
考えてみれば、毒は皮膚からも吸収されるものもあるのだから、その様な事情があったのだとしたら頷ける。あの時は何か爪に細工をしていたのだと思っていたのだが。
「で、ではもしかしたら」
思考が先走って、熱中のあまり今が出勤前だという事もすっかり脇に追いやっていた。
「通常よりも大きな生物なんかも摂取によって創れていたのでは――」
「姫様？」
横から声がしてふとそちらを見ると、苑寿が唖然とした顔で自分と鷹信を見つめていた。
「お二人とも、特に姫様はご出勤の時間ではないのですか？　それ

にまあ何です、食卓で話す様な内容ではないでしょう！」

「あ、ああ済まない」

「ごめんなさい、苑寿」

二人はそれぞれ「職場」に向かうべく、逃げる様に席を立った。

「香月」

馬車に乗ろうと廊下を急ぐ背中に、同じく執務殿へと歩いていた筈の鷹信の声がした。

「行って参ります」

振り返った視線の先に、自分を見送る姿がある。

「ああ。気をつけて」

「頑張れ」とは言われなかったが、柔らかく向けられた微笑みはそれまでの疲れなどどこかに吹き飛ばしてしまうぐらいの威力を持っていた。

「はい！」

花の蕾が綻ぶのにも似た嬉しげな表情を浮かべて、香月は身を翻し屋敷を出て行った。

※※※※

新しく出来た薬を乾燥させる間、香月は外出を控えて局長室で仕事をするふりをしつつ外を伺うという方法を取った。覗き窓があるわけではないが、廊下を薬庫に向かう人の足音ぐらいは聞く事は出来る。今日は仙丸達は終日新薬の打ち合わせの筈だから、薬を取りに来る者は限られていた。

――そんなに打ち合わせばかりで、一体いつ実験に取り掛かるのだろう。

不思議に思ってさりげなく斎条に聞いてみると、「どうも方向性が定まらないんですよ」と複雑そうに返って来たものである。

「病を治療する薬なら、今までも散々作って来ましたからね。それに通常の業務も同時進行しなければならないので、中々まとまらないのですよ」

皐乃街での一件以来、斎条の態度は以前よりも気安くなった気がする。少なくとも、腫れ物を扱う様な不自然さはなくなった。河西の病状も、熱はまだややあるらしいが大分落ち着いたと聞く。後は新しい薬が完成すれば、今度こそ回復するだろう。

そうすれば、自分は長塚の残党探しに専念出来る。

香月は机の上にある玻璃の器に目をやった。昨夜散々調べた、腐敗した薬。器には蓋がされて密封状態だ。まだ縦置き型の拡大鏡の下に置かれている。

――姐さんの口から採取した組織片を入れたら、黴が一気に増殖した。それを撃退する為に熱が出たのだろう。

苦々しく思いながら器の中身を眺める彼女の目が、やがて驚きに見開かれていく。

昨日は見えなかった状態に、粉末が変化していたのだ。

「……これ……！」

慌てて拡大鏡を覗き込む。

確かに黴は増殖して組織片の周囲についていたのだが、肝心の組織片の色が昨日とは全く変わっていた。

瘍頭の患者にありがちな鈍い色ではなく――まるで、健常な人間のものの様に。

――そんな馬鹿な。でも、もしかしたら。

黴は異物だから、人の体内に入れば抵抗する力が働く。健常な人間ならば何事もなく速やかに排出されるが、抵抗力が落ちている場合一部を侵食され、身体は撃退しようとして戦う。それが発熱の正体だ。

黴には種類があり、薬処方局内でもまだ全てを発見したわけではないと言われていたが――

今までは、これらは毒にも似た扱いをされてこそすれ、治療に役立つという概念はなかった。

――昨日の調温器の温度、数値は確か。

心臓が早鐘を打っている。落ち着こうと深く息を吸った。

机の引き出しを探って、覚書を探す。実験結果を書きとめた記録の中に、書いておいた筈だ。

「……あった！」

半分だけ完成させて、もう半分はあえて黴を生えさせる。

後は河西の病状次第だ。元の薬で回復する様なら、なくなるまでにまた作ろう。その間に研究を進めればいい。

香月は覚書を掴むと局長室を出て薬庫へと向かった。

## 滅紫（めっし）

喜び勇んで局長室を出たものの、香月はすぐさまある問題に気付いて落胆した。

新たな薬を、どうやって試すのか。

通常は施術局に該当の患者がいれば、低量を投与し経過を診る。それがこの国では――研医殿では合法的な実験の仕方となっていた。

だが今施術局に瘍頭の患者はいない。

治りにくい難病に指定されているにも関わらず、だ。

皐乃街内では珍しくない病でも、一般的には不名誉なものと忌まれている。故に入院して来るのは皆無に近かった。

「いいんじゃないですか？　場所が変わるだけで道義的に何が変わるわけでもなし」

「で、ですが斎条さん。外部の患者に試薬を投与するのは禁じられているではありませんか」

「そんなもの、事後承諾ですよ。上手くいってもいかなくても、何かしら罰は受けるでしょうがね――もしかしたら登殿資格を剥奪されるかもしれない」

あまりにあっさりと言い放つものだから、驚愕を通り越して唖然としてしまう。例え薬庫内にての二人きりの会話であるにしても、不遜に過ぎはしないか。

二種類の薬を作る為に調温器を操作していた彼女の元に、丁度「薬がそろそろ出来る頃かと思いまして」と斎条がやって来た。

迷っていた事もあって、実践経験が自分より遥かに多いであろうからと相談してみたのだが。

「僕も最初は黴のせいで発熱したのなら使えないと思ったのですが。局長の話で納得しました。一時的なものでしょう、むしろ完治出来なかった瘍頭の治療の第一歩かもしれませんよ」

腕組みをしてどこか思案げに、煙る様な金色の睫毛を伏せて調温器を見つめる。

不意に視線を上げてこちらを真っ直ぐ射ぬいた。

「従来のやり方では、彼女は生涯瘍頭を宥めながら生きていかねばなりませんよ。そこまで快復出来るかどうかもわかりませんし」

「……かもしれません。それでももし、失敗したら。姐さんは一体どうなるか」

「局長が恐れているのは『失敗』ですか？　それとも彼女の死？」

香月は改めてまじまじと斎条の顔を見つめた。

返される笑顔は無邪気そのものとしか言いようがない。

「……両方です。ただでさえ人で薬を『試した』事などないので。危険な賭けに自分ならばともかく、誰かを巻き込むなど……」

「なるほど。そうでしょうね」

斎条はまたもあっさりと「ではこの話はなかった事にしましょう」と返した。

唐突な話の終了に鼻白みはするものの、決断出来なかったのは自分だ。食い下がるわけにも行かなかった。

「……そうですね」

「薬、皐乃街に届けるのでしょう。お供してもいいですか？」

「は、はい」

「変質した方の薬は廃棄しますよね。もし良ければその前に僕も見たいのですが、お借りしても？」

「構いませんが……」

先日の事もあるから、彼が手伝ってくれるのは嬉しかった。自分一人よりは、遥かに心強い。

それにしても新薬の開発に関わっている上に患者の投薬を担当している斎条は、本来なら身体が空く暇もない程忙しいのではないだろうか。

局員の誰もがそう掛け持ちをさせられるわけではない。患者を任されるのは能力に一定の信頼を置かれている証だ。

だからこそそんな人物を個人の都合で振り回すのはためらいがあった。

「あ、気にしないでください。新薬は手詰まりだし、舜橙さんに関しても今は様子見です。あまり急ぐ仕事もないですし」

これは全くの僕の学術的好奇心というものですから、と彼は香月の心配を読み取ったのか付け加えた。

「非常に興味深い――といったら不謹慎になるかもしれませんけど。瘍頭患者はなかなかお目に掛かれませんからね。局長がもしご迷惑でなければ、補佐させて頂きたいです」

「そ、そんな。迷惑なんて事ありません。むしろとても助かります」
「本当ですか？　だったら良いのですが」
満面に喜色を浮かべる様子はあどけなくさえ見えて、とてもさっきまで冷静に禁忌を破ろうなどと言っていた人物とは思えなかった。
「薬、すぐに持っていくのですか？」
「そうですね、出来るだけ早く――夜が来る前に渡せればいいのですが」
香月が調温器から薬を取り出した時、いきなり背後の扉が開いた。
「……ああ、これは邪魔をしてしまいましたか」
恐らくは耳に快く響くであろう声なのだろう――聞く者が自分でなければ。
だが生憎と香月には不吉の前触れにしか思えない。思わず身構えてしまった。しかも声の持ち主は相変わらずひどく不愉快そうだ。
「いえ、構いません。調温器を使うのでしたら、どうぞ」
脇に避けた上司から視線を外して、仙丸の冷ややかな双眸は部下へと照準を変えた。
「斎条。お前処方箋の変更報告出したのか？　私はまだ見ていないが」

「あ、はい。石動(いするぎ)さんがお休みで承認を頂いておりませんでした」
「今日彼女は登殿しているだろう。確認して来い」
「わかりました。――局長、まだ外出はされませんか？」
会話の後半、斎条は香月に顔を向ける。
「は、はい。午前中はもう無理かと思いますので、午(ひる)過ぎに出る予定です」
「午過ぎですね。では後程」
にこやかに彼は立ち去り、薬庫内には香月と仙丸の二人が取り残された。
彼女もまた薬を掴んで足を踏み出し、扉付近に立ったままの彼をそそくさとやり過ごそうとする。
扉の把手に横から手が伸びて来た。金属音と共に内錠が下ろされる。
「副局長……」
「局長にはお話があります」
全身から剣呑な気配が立ち上っていて、一気に香月の緊張が増した。
「話なら、局長室で伺います」
冷静を装っても、どうしても声が硬くなる。

「いえ、ここがちょうどおあつらえ向きです。実は最近、薬庫から定期的に薬が紛失しているので、内密にご報告申し上げるつもりでした。――もしかしたら、局長はすでにご存知だったかもしれませんが」

「それは」

彼女は己の迂闊さを責めたくなった。

仙丸が有能な副長なのはわかっていたではないか。自分などよりもよほど局内を把握している、薬の在庫に目がいかないわけがない。遅かれ早かれこういう展開になるはずだった。なのにただ黙っていて、自分が調査すれば済むだろうと心のどこかで思ってしまっていた。

尤も、彼自身が犯人である場合はそれはそれで黙っているだろうと、高を括っていたというのもある。

「やはりご存じだったのですね。何故ご自分の胸に収められていたのか、理由を伺ってもよろしいですか？」

問いかけの形を取ってはいたが、明らかな弾劾だった。

――では仙丸は犯人ではないのだろうか。

「……まだ、確証を掴めていなかったのです」

本当は玲彰から極秘裏に依頼を受けたものの、頓挫していたとはとても言えなかった。

調査が滞っていたのは事実だからだ。

「確証？　現に麻珍は減失しているではありませんか。本来ならこれは局員総出で犯人を挙げるべき大不祥事ですよ」

声を荒げないところがまた抑えられた怒りを如実に表していて、反論が出来ない。

黙ったままの上司に、仙丸のただでさえ険しい眉間が一層狭められた。

「それとも、隠さなければならない理由でも？　まさか、局長ご自身が持ち出されているわけではありませんよね？」

この場をどうやり過ごそうかと視線を外していた香月は、驚きに顔を上げた。

「違います！　私ではありません」

「では黙って減るに任せていた本当の理由は、何ですか？　まさかこんな風に疑われるとは、露ほども思っていらっしゃらなかったとでも？」

「黙って見ていたのではありません。上には報告してあります、しかし」

「局長が玲彰様から何を言われているにせよ、私には私の責務があります。発見してしまった以上、見過ごすわけには参りませんね」

踵を返して部屋を出ようとする仙丸に、香月は追いすがった。

「待って下さい、どちらへ」

「局員に盗難だと公示します。明るみに出ればなりを潜めるか、逆か。何らかの行動を起こすでしょうから」

「今は駄目です。せめて玲彰様に改めてお話をしてから――」

「局長ご自身はどうお考えなのですか？」

漆黒の瞳は蔑みの色をたたえてこちらを覗き込んでいる。少なくとも永久凍土と冷たさ争うのではと思える位に。

局長室で喉元を絞め上げられた時の恐怖が蘇って、香月は瞬時に身を引こうとした。

その手首を掴まれる。

「――放して、ください……っ」

「誰を疑っているのか、聞かせて下さい。そうしたら放します」

強く引き寄せられ、息が掛かるほどに顔が近い。困惑して見上げ、迫力に呑み込まれそうになる。悲鳴にも似た声が漏れた。

「ですからそれは……っ、まだお話出来る段階にないと申し上げているではありませんか。情報が集まれば皆さんにも知らせます」

「――貴方の行動は迂遠に過ぎる」

手首を握る力は強く、精一杯抵抗しても振りほどけない。

「玲彰様から直々に命を受けたのではないですか？　皐乃街にばかり目を向けられている様ですが、手が回らないのでは？」

真正面から『手際が悪い』と批判されて、香月の忍耐が限界を越えた。
何故ここまで、執拗に責められなければならないのだ。
それに――似ている。仙丸の目は冷たいのに――かつて自分はこんな眼差しに始終さらされて夜を恐れた――
幻惑だと、振り払って彼女は声を精一杯荒げた。
「昨日、この調温器に触れませんでしたか」
仙丸が眉をひそめる。指し示された器材を眺めた。
「いいえ。これがどうかしたのですか」
「設定した温湿度とははるかに違うものになっていたのです」
「まさか。では乾燥に失敗して、腐っていたと？」
疑いの被膜が覆う目で見れば、彼の狼狽はひどく真に迫っていたと言わねばならない。
「一体誰がそんなくだらない真似を」
「貴方では、ないのですか。鍵を自由に出来る人間は限られています」
「馬鹿な！」
苛立たしげに、短く吐き捨てる。
「鍵ならば許可を得られさえすれば誰でも手に入れられる。局員の

誰かを抱きこんだ外部の人間の可能性も考えればさらに広がります」

「しかし。実際ここしばらく薬庫の出入りを観察していましたが、妾の他には貴方と斎条さんしかいません。記録簿だって」

「一日じゅう見ているわけではないでしょう。第一そこまで邪魔をするほど、私は暇ではない。生薬も無尽蔵ではないし、無駄にする様な愚挙は致しません」

「非効率な行動が大嫌いなので」と鼻で嗤う態度は決して好印象ではないものの、嘘を言っている様には見えなかった。

「……なるほど、そういう事でしたか」

香月の手が、突然開放される。

弾みで軽く一歩、後ろによろめいてたたらを踏む。掴まれていなかった右手で解放された左手首を擦った。抵抗していなければ、恐らくは彼にぶつかっていたのではないだろうか。

「どうやら、疑われているのは私の様ですね。ならば気を付けた方がいい」

仙丸は昏(くら)い愉悦をたたえた笑みを浮かべた。

「周りの者を信用してはなりません。貴方が見ているものは恐らく、真実ではなく『誰かに見させられているもの』だ。あまり寄り掛ると、霧が晴れた時にその『誰か』に捕まってしまうかもしれませんよ」

「……何が仰りたいのですか」

「つまり私も貴方を信用しないと言う事です。こちらはこちらで麻珍を持ち出した犯人を捜しますので」

扉の錠を開け、把手に手を掛けた。

「副局長！　お願いですからこの事はまだ、公開しないでくださいませんか」

それは確約出来ませんね――一瞬だけ顔をこちらに向けたものの、捨て台詞を残して彼は部屋から出ていった。

## 青丹（あおに）

「仙丸がそんな事を？」

三日ぶりにようやく面会が叶い、芭墨の間で香月が直接の報告をすると、玲彰はほんの少しだけ顔をしかめた――様に見えた。

「まだ麻珍の盗難についての調査は公にはしていない様ですが……昨日の話なのでまだ何とも申せません。どうしたら良いでしょう」

「放っておけ」

「しかし」

「彼は恐らく問題はない、と思う。尾上に最後まで刃向かった男だ。万一それが、『奏』として研医殿に残る為の込み入った演技であれば話は別だが」

「も、もし『万一』の場合はどうなさるおつもりなのですか」

「いずれにせよ、麻珍を盗んで奴らが何をするのかが謎だ。私は最初、誰かをまた毒殺するのではないかと思っていたが。だとしたらとっくに誰かが殺されているのではないだろうか」

「玲彰様！　滅多な事を」

「だが事実だ。毒薬を使って今まで長塚は様々な人間を殺して来た。なのに今回はまだ誰も殺されていない。それもあって、手の者が他の目的で研医殿に残されているとも考えたのだが。『奏の鳴声』が

尾上によってどこかに隠されていて、見つからないのだと」

彼女は椅子から立ち上がって室内を歩き回り始めた。元良が絵に描きたくなるのが頷ける流麗な後姿を目で追いつつも、香月は調査結果を報告する。

「薬庫内や局長室など探してはみたのですが、それらしい隠し場所がそもそも見つかりませんでした。調合室も器材が雑然としているだけで、鍵の掛かる場所は保管庫と部屋の扉しかありませんし。部屋は常に人がいます」

「保管庫は？」

「尾上が使っていた器材がそのまま残っています。一度必要に応じて使ってみましたが、ごく普通の器材に思えました。もちろん何かを隠している様な引き出しも見当たりませんし」

「ああ、あれか……」

「刑吏府より廃棄を命じられていない為残っていると、伺いましたが」

いや、と玲彰は振り返って怪訝そうにした。

「廃棄こそ命じてはいないが、処分は勧めたはずだ。誰がそんな事を？」

「局の者が、そう申しておりました。許可が出るまで、仙丸副局長が――」

説明する香月自身も驚きで言葉が続けられない。もう処分が決まっている？

「また奴か。解せぬな」

「話の行き違いという事はありませんか」

「私が直接言ったわけではないが、通達を出した。取り違えはしないだろう」

玲彰は立ったまましばらく何かを考えていた。

「局長室の書物は全て開いてみたのか」

「いえ――申し訳ありません。まだです」

床から天井までという高さの本棚、四方を埋める膨大な書物。全てを見るには圧倒的に時間が足りない。香月は肩をすくめた。

「いや、河西の病の治療の方が優先事項だ。引き続き調べてくれれば良い。もしかしたらあの書物の中に何か、手がかりになるものが含まれているかもしれないからな」

尾上の器材については、再度仙丸に聞いてみよう――そう言って彼女は机に近寄り、登記装置に何やら番号を打ち込んだ。

「お出かけになるのですか？」

「ああ。ちょっと二階の禾管（かかん）局までな。行くぞ」

「えっ？」

香月が意味を飲み込めずにいる内にも、もう扉を開けようとしている。

「倉嶋候から話は聞いている。『食物から通常とは違う生物を育てる』とは面白い考えだと思ったのだ。新薬の開発の参考になるかもしれない」

廊下に出、歩きながらも非常に珍しい事だが彼女は嬉しそうに見えた。

「ああ、それで禾管局を――」

二階は農産業についての研究をする棟である。特に禾管局は穀物や果実など、食用のものを専門に育て分析する業務を行っていた。

「それはそうと、河西の容態はどうなのだ」

昇降機に足を踏み入れ、把手を操作しながら玲彰は話を変えた。

「薬が腐敗していたとか」

「……はい。投薬を一旦中止して、昨日新たに精製しなおしたものを与えて来ました。その時には熱は下がっていたのですが……ひどく消耗してしまっていて」

声の調子が暗くなるのを、極力押さえて何とか冷静に答えようとする。

「腐敗した方の成分も記録しているか？」

「一応は。斎条さ……局員も興味を示しまして、引き続き調査をする予定です。少し気になる事がありますので」

「気になる、とは」

香月は調温器の目盛が動かされていた一連の出来事を説明した。

「なるほど。特定の生薬に生える黴は、効能があるという実例かもしれんな。面白い」

「玲彰様っ」

「ああ、悪い。つい興味深くて」

白い頬が歪に引きつっている。言葉からすると喜んでいるらしいのだが、よほど笑い慣れていないのか。

「その嫌がらせの犯人も気にはなるが、全くの無関係という場合もある。引き続き警戒する必要はあるだろうが」

「はい」

「河西の病にしても栄養の悪い皐乃街の環境を思えば、これから行く場所に役立つ情報があるだろう」

そうこうしている間に昇降機は二階に着き、降りた二人を出迎えたのは至る処に草木の満ち溢れた緑の空間だった。

研医殿の吹き抜けの天井は玻璃が嵌まったものなので、光が射し

ているのはどの階も同じだが何故かここは最上階よりも明るく思える。緑の合間に見える色彩豊かな花々のせいか。

「廊下と壁にもこんなに緑が……」

壁の等間隔に立つ柱の合間にも背の低い木が植えられていた。

「植物同士に影響はないのでしょうか？」

あまりに四季の草花が乱雑に植えられていはしないか。

玲彰も苦笑している。

「あるかもしれんな。これも研究の為に行っているそうだ。種に拠って隔離して植えている場所もきちんとあるぞ」

こちらだ、と導かれるままに進んでいき、ある一室の扉の前で立ち止まる。

「周布（すふ）。入るぞ」

言うなり扉を開けると、玲彰は躊躇なく室内に足を踏み入れた。

何の変哲もない白壁の部屋である。さっきまでいた空間を思えば、逆に不気味なほどに何もない。突き当たりに書類が積みあがった机と椅子が一揃いと、手前に白い瓶と布が載った収納匣が二つ。

「中の部屋にいるか。香月、ここで術着を着替えてくれ」

扉近くにある収納匣の一つを開けて、玲彰は花浅葱色の衣服を二つ取り出した。

「随分と目立つ色ですね……」

「花に見えない色がいいのだそうだ。虫が寄って来ないからな」

「虫――」

香月の顔がやや青ざめた。

それでも何とか着替えて、よく室内を見れば、部屋の左手壁側にもう一つ扉が付いている。匣の上にあった薬剤で手を拭い着替えて、準備が整うと二人は奥の扉を開けた。

「……これは凄いですね！」

余りに広々とした内部に、思わず驚嘆の声が漏れた。

整然とした列を成して棚が設置されてはいるのだが、上に載っている作物の鉢が各々の成長をしている為に密林の中を歩く感覚に見舞われる。

窓は他の部屋に比べて倍の大きさがあり、日差しが燦燦と降り注いでいた。

温度も調整されているのだろうがやや蒸し暑い。鳥の声や、虫の羽音もかすかに聞こえる。

「周布。どこだ？」

口元に掛けた布越しに玲彰が叫ぶと、部屋の遥か向こうから遠く男のものらしき声が聞こえた。

「これはこれは、ようこそいらっしゃいました」

かろうじて残っている通路の細長い空間を、こちらに向かってく

る青い人影。

「玲彰様と、そちらは――」

「あ、はい。嵯峨と申します。お仕事の邪魔をして申し訳ありませんが、よろしくお願い致します」

「薬処方局の局長だ」

「ほお、局長会議でそう言えばお見掛けしましたな」

周布と呼ばれた男は布の境目から覗く細い目を少しだけ見開いた。歳の頃は四十代程度だろうか。室内勤務にしては日に焼けている。頭にも布を被っているので正確な年齢は判別しがたい。

「お若い局長だとは思っていましたが――いや、こちらこそよろしく」

本日は何の御用で、と彼は玲彰に問いかけた。

「『作物亜種』について話を聞かせてくれ」

「作物亜種？」

聞き返したのは、依頼された当人ではなく香月の方だった。

「食物について調べるのではなかったのですか？」

「そうだが」

周布は不思議そうに目をすがめた。

「嵯峨局長は、亜種についてご存知ないのですか。生薬原料にも亜種は存在すると思いますが……」

「いえ、存じ上げないわけではありませんが――今回の目的と、その」

噛み合わないのでは、と言いよどんだ。

そうですな、と彼は通路を奥に向かって歩き出した。二人にも来る様に促す。

「従来の『亜種』とはその言葉の通り、『二番目のもの』として標準種には劣ると思われておりましたからな」

中肉中背、小柄な彼はともすればすぐに草木の合間に隠れてしまいそうだった。

「あれを見てください」

ただそう言っただけなのに、香月は何を指しているのかすぐにわかった。

「な――何ですか、あの植物」

遥か向こうに生えているはずなのに、近くに思えてしまう。濃い緑色の楕円形の葉に、白い花弁。中央には丸い蕊(しべ)がある。形自体は薬草の芳苓(ほうれい)に似ているが、大きさは通常の数倍はあるだろう。

「芳苓の亜種です。気温と土壌成分の変化で稀に出来ますが、標準

種に比べ遥かに薬効が弱く、生薬原料には向きません」

その代わり、種子が大きい為良質の作物として食べられるのだと説明した。

「主食の代わりにも出来るでしょうな。我々がよく食する粲(いい)の実よりも薬膳的な成分に優れています。数が少ないので、実用化にはまだ遠いのですが」

香月は思わず玲彰を見た。力強い眼差しが返って来る。

「ここは亜種ばかりを集めて研究している部屋だそうだ。其方の話を聞いてから、ふとここの存在を思い出してな」

あまりの衝撃に心臓が早くなるのを感じる。もしそうなら、色々な問題に光明を与えるのではないだろうか。

「では現在の亜種とは『標準ではないもの』全般を指すのですか？」

「良くも悪くも、そういう事になりますね」

熱のこもった香月の質問ぶりに、周布は楽しそうだった。

「芳苓の様に利用出来るものばかりではありませんが、食用果実の亜種に毒性があった、という報告もなされています。ここでの研究は亜種を人為的に確実に作れるか、というものなのですよ。中々奥が深くて日々試行錯誤です。しかし歴史は案外古く、遥か以前にも書物に書かれている位ですから」

「そんなに昔からされているものだったとは……知りませんでした」

特定の条件で育つ食物。特定の目的で育てられる生命。
脳裏に鷹信の言葉が蘇る。逸る心を宥めつつも思い切って聞いてみる事にした。

「あの、かつてここでは、生き物にも特殊な育て方をしたと聞いていますが。亜種食物を与えたというわけではないのでしょうか？」

その瞬間の何とも言えない雰囲気は、簡単には忘れられないだろうものだった。
周布は眉をひそめただけで答えない。凍りついた表情が、禁句だったのだと雄弁に語っている。

「そうだ。だが――今は行っていない。少なくとも以前行っていた様な、雛から亜種のみを与えるやり方は禁忌だ」

代わりに答えたのは玲彰だった。

「尤も、以前それを行っていた人物は毒草ばかりを改『悪』していたものだから、とても認められるものではなかったが」

「玲彰様、その事は」

周布は明らかに狼狽していて、見ているこちらの方が不安になる。

「隠しても仕方なかろう。長塚が亜種に興味を持っていたのは事実だ」

何故か突然に彼は一回り小さくなった様に見えた。悄然と肩を落としているからだろうか。

「……やっぱりそうだったのですか」

思わず口に出してしまってから、香月は慌てて「いえ、何でもありません」と打ち消した。

今はそれよりも、舜橙の病気について助言をもらうのが先だ。

「患者に亜種食物を与えるのは問題がありますか？　効能が認められているという事は、試したのですよね」

「その点は構わない。認定されているものに限られるが、詳しくは周布に聞いてくれ」

玲彰は黙って呆然としている彼を一瞥すると、「頼んだぞ」と声を掛けて部屋の扉へと踵を返した。

「玲彰様？」

「実はこれか仄音局（そくいん）に向かわなくてはならないのだ。元良が実験をするらしく、立会う事になっている」

其方も来るか、と問われて香月はほんの少し考えた。前回の記憶が蘇って少し気が引けたが、今日は鷹信から研医殿に来ると言われていたのだった。

「そうですね、お供させて頂いてもよろしければ。ぜひ」

「わかった。――周布、また後で来るぞ」

上司が重ねて声を掛けたにも関わらず、周布は返事をしなかった。

あまりにも尋常でない様子に、迷惑なのだろうかと心配になる。

「周布局長、どうかなさったのですか」

「気にするな。行くぞ」

「は、はい。――失礼します」

振り返りもせず事もなげに言い放つ玲彰はもう扉を開けて外に出ていて、閉じそうになる隙間に慌てて手を掛ける。

最後にどうしても気になって後ろを振り返ったものの、緑の草葉に妨げられて、立ち尽くす周布がどんな表情をしているかは全く窺い知る事は出来なかった。

**洗朱（あらいしゅ）**

「長塚も、最初は人を救う為に懸命だったのだそうだ」

廊下に出てしばらく歩いた頃、考え込む香月の耳に上司の呟きが聞こえてきた。

思わず顔を上げる。

「それがいつの頃からか、偶然に薬の亜種が毒になる事がわかってから奴は変わった。そう周布は申しておった」

「やはりあの方は長塚伯に仕えていらしたのですか」

「片腕として、局長に抜擢されたのも長塚に拠ってだ。本来更迭すべきところではあるが、毒薬を改変させようとしていた主に反発し一線を退いた。命を狙われて王宮に保護を求め――再び引きずり出したのが私というわけだ」

「亜種研究においては第一人者なのですね」

「という名目の軟禁でもある。長塚に取られない為の、な」

玲彰は昂然と頭を前に向けたままなので、一歩遅れて歩くこちらからは白い頬と長い睫毛しか見えない。恐らくは無表情なのだとわかってはいても、そこに何らかの感情の起伏を探してしまう。

「……意外です」

「そうか？」

「長塚伯はもっと、私利私欲の為に動かれたのだとばかり思っていました」

実際、彼女が聞いていたのはそんな内容ばかりだった。

研医殿の利権を巡って楠王と対立し、敗れたと。

「仕えていた人間の話だ。真偽の程は定かではないな。奴が殿主に就任して数年、研医殿が技術的に目覚しい躍進を遂げたのは事実だが」

目的の仄音局は三階の、ちょうど禾管局とは対角に位置した場所にあった。昇降機に乗り込みながらも言葉は続く。

「時折思う事がある。私と奴の何処が違うのかと。本心はわからずとも、研究者が対象物に『取り憑かれる』というのが理解出来るのだ。奴は毒薬に憑かれてしまった。薬を役立てるのではなく、操る道を選ぶ。そこに善悪は存在しない。世の中に迷惑をかけるものが悪と判断されるだけで、当人にとっては効能を試しているに過ぎないのかもしれない」

「玲彰様……」

余りに危険な考え方だ。確かに普段から玲彰は手段を選ばない遣り方に走る嫌いがある、と鷹信から聞いてはいたが――

「奴が何故、麻珍毒で陛下を弑逆しようとしているかわかるか？」

昇降機が動き出した。眉をひそめる香月には構わず、手摺に凭れた姿勢で斜め下の床を見る様に問いかける。

「あ、はい。麻珍は現在研(ここ)医殿にしかない毒だから、『使う事に拠って陛下に二重の屈辱を与えようとしている』と伺いました」

「王宮で知られている理由はそうだな。だが本当の所は、単に毒薬に執着しているからだとは思えないか。恨みを晴らすのが本懐なら、麻珍でなくともっと陥穽(かんせい)に落として謀殺しても良かろう。少なくとも私ならそうする。ただでさえ陛下に毒は効きにくい」

「何を仰るのです！」

慌てての制止にも、玲彰の表情は変わらない。むしろ何処か面白がっている風に見える。香月は憮然とした。

「其方は何故人を――河西を救うのか、明解な理由があろう。それを忘れぬ事だ。大義を見失った時、闇の深淵は殊の外甘美な姿をして傍らに現れる」

ちらりとこちらを見て微かに笑う。顔に出すという事は、よほど楽しいのだ。つくづく、この人はわからない。

はい、と頷きながらも香月はついこの間、その『深淵』に落ちかけていたのかもしれないと己を恥じた。

「しかし良識ばかりを追い求めていては発展の妨げになる場合もある……加減が必要だな」

呟く様に言って彼女は停止した昇降機から降り、すぐ目の前にあるやけに派手な色――朱色にしては紅梅に近い――の扉の前に立った。扉のすぐ脇にある丸い突起を押して、「玲彰だ。入るぞ」と声を掛ける。突起の上部の格子状の鏡板から何事か声が返って来た。

他の局とは違い、仄音局は公共部分と中を繋ぐ内廊の前に既に扉がある。外部の者から見れば、壁に一つ扉があるだけの部署に見えるのだが、開けると内部はそう変わらないらしかった。音が漏れない配慮なのだろうか。
廊下も扉も、禾管局の極彩色から来たからか殺風景なほどに普通だった。扉の脇に必ずさっきのと同じ鏡板装置がある以外は。

「ここはな。これから行く弦響室という部屋は中々興味深い造りだぞ」

思わず感想を口に出すと、玲彰はそう答え廊下を進んだ。背中を追いながら、辺りがやけに静かなのを訝しく思う。

「倉嶋候もそろそろ到着している頃だと思うが――」

廊下の途中で右に曲がり、すぐ左手の扉の鏡板の前でまた例のやり取りをして扉を開ける。
中に入った途端香月は驚愕した。

「こ……これは確かに……」

まず第一に天井がやけに高く、扉の外からは想像が出来ないほどに部屋は広い。これだけなら禾管局のあの部屋も広かったが、違いは向こうは全てが植物だという点だ。
目映い装飾と見紛う内壁は、よく見れば所狭しと張り巡らされた金属管だった。中央には無数の把手と、真っ直ぐ上に向かって伸びる同じ数はあろうかという弦。

「まるで……大きな楽器の中にいるみたいですね……」

「玲彰様。それに香月」

壮観に呆然と辺りを見回していると、部屋の中央から聞き慣れた声がした。ごく小さな空間に置かれた長卓と椅子の所に数人の人がいる。

「来ていたか、倉嶋候」

「おおっ、玲彰様！　それに姫も来てくれたのだね」

答えて玲彰が歩み寄るまでもなく、元良は上機嫌だ。今日もまた、目が眩む際どい茜色の柄物衣装を着ている。隣の鷹信が青朽葉に支子（くちなし）、という難しい色を優美に着こなしているだけに、一層対比が目立った。

控える部下の術着が桔梗色なのは、どう見ても侯爵の趣味だろう。

「こんなに美的素材に囲まれるなんて、絵筆がないのが残念でなりません！　どうですか倉嶋候、嵯峨局長とお二人で肖像画を描かせてはもらえませんか？」

「その話は後にしてくれ」

あっさりと遮ったのは当人ではなく、玲彰だった。

「舜橙という患者の『声』を解析したと聞いてきたのだが」

「え、ええ。それはもう、興味深い内容となっておりますよ。もしかしたらこれは世にも稀な大発見になるかもしれません。まあお座りくださいませ」

すげない扱いにも何故かむしろ嬉しそうに、元良は手元の分厚い紙と、細長い巻紙を指し示した。　全員が椅子に座るのを見届けて、「こちらが蓄音装置を解析にかけた結果です」と細長い方の紙を引き伸ばして見せた。小さな黒点が不規則に飛び散っている様にしか見えない。

「そして、これが解析結果を言語に変換したものです。阿の段一の音、という風に諧声数全てに区分けをしています。ひどく複雑な音声だ、というのがおわかり頂けますでしょうか」

もう一方の百枚近くはあるだろうという紙には、言われる通り数字の羅列が何列にも重なって延々と書き連ねられていた。

「……まあ、複雑だという点は理解出来るが」

玲彰も鷹信も今一つ理解しがたい、という顔をして元良に目をやった。

「しかし元良候、果たしてこれが人の喉から発せられるものなのでしょうか？　病と関係があるのかどうか、その辺りは判明したのですか」

「い、いえ。残念ながらそれはまだですが」

慌てて「比較として、ごく平均的な人と、多重音声楽器の記録をお持ちしました」とまた別の書類を取り出した。

眺めていた玲彰の眉がひそめられる。

「そうだな。人の肉声にしては舜橙のものは多重過ぎる。しかも音域というのか？　両者を見比べるに全く同じ『段』がない。人の耳

には聞こえないというわけだな」

「仰る通りでございます。一体どれだけの諧声数を持っているのか未だ全ては判明致しません。これまで記録しただけでも数百を超えておりまして」

「入院してから今までの経過はどうなのだ。筋肉が衰える事に拠って、声帯への影響はないのか」

「はい。今の所は」

同様に不思議そうに書類を見ていた鷹信は、隣の香月がさっきから一言も発していないのに気づいた。しかも何やら凍りついた表情をしている。

「香月？　何か気づいた事でもあるのか」

返事はすぐには返って来なかった。忙しなく動く両眼からも、必死に書類を追っているのがわかる。

「……これは楽譜に似ていますね」

言いながらも目は休む間もなく符号を追い続けていた。

「楽譜？　もしかして琴のか」

「はい。通常琴は耳で覚えて会得するので、楽譜などはほとんど使いません。ですが文献としては遺して行くのです。弦の数だけ斗、為、巾といった風に名称が付いています。ですから音階は『斗二十一』、といった風に」

「おお、よく気づいてくれたね！」

元良の頬が上気して赤くなっている。興奮しているらしい。

「流石琴の名手の血を引くだけはある。そうなんだ、再現しやすいだろうと思って楽譜の様に文字を当てはめてみたんだよ」

「再現出来るというのか？」

玲彰が鋭く問いかけた。

「可聴域にまで諧声数を下げてなら、皆様がたにもお聞かせ出来ると思いまして」

彼は書類を手に持ったまま背後に聳え立つ装置――先ほど香月が『巨大な楽器』だと思った――に近づいて、目の前の把手を次々と押し下げていった。

「まず短いものから。これが、数日前記録した『声』です」

一旦手を止め、右端に一つだけ離れた位置の黒い把手を押すと、微かな機械音がした。

次いで聞こえてきたのは、無機質な長音。

元良は更に把手を押し下げる。こちらの把手は押されてもすぐに元に戻り、押されている間は音を奏でる、その作業を何度も何度も繰り返した。

不協和音が室内に谺（こだま）する。

「本当に楽器に似ているな……すごい装置だ」

呟く鷹信はだが元良を見ていなかった。香月の呆然とした横顔を見つめている。
やがて小さく、彼女の紅い唇が動いた。

「……壺の一……那の五……」

それきり口を噤む。短い元良の「演奏会」が終わる頃には、既に顔色がひどく悪かった。

「どうした、どこか具合でも悪くなったのか」

鷹信が背中に手を当てて身体ごと支えてくれなければ、床にくずおれてしまったかもしれない。暖かい掌に安堵しながらも、香月は強く首を横に振った。

「い、いいえ。少し考えた事があって。……でも、まさか。きっと偶然です」

「考えた事？」

「可聴領域に下がった多重音を琴の楽譜に置き換えたのです。琴は一弦で何音も表現するので、弦によって段が決まっているのです。なので昔やった、ちょっとした遊びを思い出して段の符号を繋げてみたのですが……」

「いいから、話してみなさい」

語調は少しも強くはなかったが、どこか叱責の気配を感じて彼女

は戸惑った。見上げた鷹信の顔はいつも通り穏やかなのに。

「……このむすめをよくみておけ、と」

遠巻きにこちらを見ていた玲彰も表情を険しくした。

「舜橙がそう『言った』のだな？　其方にか」

「い、いえ。これはですからただの偶然だと思います。いくら舜橙さんに特殊な能力があるとしても、音を下げる前提で使いわける理由がありません。それに第一、あの時話しかけていたのは刹氏という鳥ですし」

引きつれた力ない笑いのせいか、二人の疑念を晴らすには全く用をなさなかった。

考え込んだままの鷹信に、おずおずと声を掛けてみる。

「あの、もう大丈夫ですから。放して頂いても構いません」

「あ、ああ」

鷹信は苦笑して手を離した。

間近に彼の端整な憂い顔を長らく見る機会はそうそうない。心臓が早鐘を打っている。

息苦しいのに、離れた気配をもどかしく思ってしまう自分がよくわからなかった。

「――ありがとう、ございました」

「いや。それよりも香月」

「え」
「舜橙がその時言っていたのは、本当にそれで全部なのか？」
「はい」
「そうか。いずれにせよ、彼は何かの目的に其方を必要としているのかもしれないな。言葉云々が偶然にしても、行動が不可解な点が多すぎる。出来るならもう直接は関わらない方がいいだろう」
「……そうします」
元良の報告はその後もしばらく続いたが、もう香月には半分も頭に入って来なかった。他の二人は熱心に聞き入って時折質問を投げている。
続きはないという返事が早すぎたのに、鷹信は気づいていただろうか。
勿論、舜橙の言葉には続きがあった。とても口には出せない内容の続きが。
――鷹信様はやはり、全てをお見通しでいらっしゃる。
昔、自身は楽器を演奏しない父が教えてくれた遊び。
母から――師匠について琴を習い、一曲を弾けるようになった頃、父は言った。
お前の母が教えてくれたのだと。
“この娘をよく見ておけ”
ていしょうのもとへつれていくから

だから恐らく、香月が気づいたのは偶然などではないのだ。

## 洗朱（あらいしゅ）（後書き）

脚注：琴の楽譜は実際にあるものを参考にしたので、一部内容が異なっております。

## 猩々緋（しょうじょうひ）（前書き）

ほんの少し性的・暴力的な表現が含まれます。ご注意ください。

**猩々緋（しょうじょうひ）**

全く字の違う、別の言葉という可能性も確かに皆無ではない。むしろそちらであってくれたらと強く願う。

でなければ、父が母を「病で亡くなった」と自分に話していたのが嘘になってしまうから。

「……つ、香月」

研医殿に寄って見学したい、と言った鷹信を案内する為に廊下を歩きながらもともすれば思考は先程聞いた『歌』に舞い戻っていた。

勿論、父の言葉こそが自分にとっては真実だ。だから信じていればいい筈なのだが――となると、何故あんな記憶が『封じ込められた』のだろう。それに覚えている限りでも、父は自分が客人の前に出るのを極端に嫌っていたのは間違いない。

まるで、何かから隠すかの様に。

「香月」

もしそれが舜橙からだとしたら――一体どうして。

『げんきゅうてん』という言葉が何か手がかりを握っているのだろうか――

「香月っ！」

「ふっ！？」

吐息が掛かる位すぐ耳元で鷹信の声が大きく響いて、心臓が飛び跳ねる。思わず奇妙な声を出して後じさってしまった。

鷹信は苦笑している。

「済まない。余りに何度呼んでも反応がないので、つい」

「……っ、でしたら……叫んで頂いても……」

恥ずかしさとそれ以外の何かで、顔が茹で上がった様に熱くなる。

「大きな声を出しては周囲に響くだろうから」と返されて、確かに鷹信は正しいと思った。

場所は既に彼女の勤務部署、しかもどういう因果か拠りによって仙丸が内廊下に立ってこちらを睨んでいるのだから。

「……副局長」

硬い香月の呼びかけには答えず、仙丸は鷹信に向かってにっこりと笑って会釈した。さっきまでの渋面が嘘の様に。

「これは倉嶋候。薬処方局へようこそいらっしゃいました」

「尚暁殿か。久しいな」

鷹信もまた、まるで旧知の友人に対する如く朗らかな笑みを見せた。

「しばらくそちらの邸にも伺っていないから、一年ぐらいか。父君とはしばしばお会いするのだが」

「こちらこそ無沙汰をしておりました。しかし変わらずご健勝な様子で何よりです」

唖然とする香月を尻目に、仙丸と鷹信の会話は続いた。

――そうだった。お二人は本当に『旧知の仲』なのだった。

ただでさえ華やかな貴族の優美さを持つ鷹信と、怜悧かつ威風堂々とした外見の仙丸が並ぶと、如何にも王の重臣といった風格が漂っていて近寄りがたい。

「しかし今日はまたどうしてこちらに？　玲彰様にご用ですか」

「ああ、それもあるが」

鷹信はいつの間にか少し離れた場所――局長室の扉の前に立ち尽くしている香月をちらりと見た。両眼には不安の色が浮かんでいる。

「ちょうど良かった。卿と少し話がしたいと思っていたのだ。――出来れば別室で、人払い出来る場所はあるだろうか」

「た、鷹信様！？」

――局内の様子を見たいと仰っていたのでは？

思わず叫んだ香月は言うまでもなく、この申し出には流石に仙丸も面食らったらしかった。

「は――はい。では局長、薬庫をしばし応接に使用しても宜しいですか」

この局内で他者の介在を拒否出来るのは局長室と薬庫のみ。調合室に部下と席を共有する仙丸は、表立っては上司に許可を取らねば

ならない。

「構いませんが。もし良ければ、局長室をお使いになってはどうですか」

良かれと思って提案したのだが、仙丸は「結構です」と却下した。

「局長のお仕事の妨げになるといけませんからね。薬庫には元々しばらく人は来ないでしょう。斎条も先ほど入ったばかりですから」

「そ、そうですか。では」

貼り付いた笑みが何とも恐ろしい。香月は縮み上がりそうになるのを何とか堪えた。

自分の仕事よりも、薬が保管されている場所に部外者――一般的な見方であって、彼女にとっては見解が異なる――を入れる方が差し支えがあると、仙丸なら考えそうなのに。そう思ったが、むしろこれは鷹信に薬庫の様子を見てもらうまたとない機会だ。

「では、香月。後ほど屋敷でな」

「はい」

ふわりと笑んだ鷹信につい笑みを返しつつも、では話が終わったらすぐにお帰りになるのだと――多少憮然としながら局長室に戻った。

――何か新たな発見があるといいのだけれど。

毎日の様に部屋を出たり入ったりしている香月にとって、麻珍の

重量が減っている以外に違いを見つけるのは難しい。こうあるものなのだ、と言われればその通りなのかもしれないと思ってしまう。その点全くの専門外な鷹信なら、客観的な目で状況を見れはしないか。仙丸と知己ならば、彼から情報を引き出せる可能性もある。

室内に入ると、卓の上に書類が積みあがっていた。椅子に座り最初の一枚に目を通そうとするのだが、目は字面を滑っていくばかりで集中出来ない。

『長塚は麻珍で誰かを殺そうとしてるわけではないのかもしれない』

玲彰はそう言った。だが、乾燥した麻珍の使い道が毒殺以外に何があるというのだろう。

――そしてもし玲彰様の仰る通りだとしたら、犯人はあれを一体いつ使うつもりなのだろう。

手当たり次第に押印しながら、様々に考えを巡らせても明確な答えは出ない。ついに溜息を付いて手を止めた時、扉を叩く音がした。

「……どうぞ」

もしかしたら鷹信だろうか、一瞬期待したもののすぐにそれは裏切られる事となった。

「書類の決裁ならば、もう少しお待ち頂けますか」

だが入室者は答えないだけでなく、扉を後ろでに閉めたまま退出する様子がない。

かちり、と音がした。

「副局長、どうかしたのですか。た……倉嶋様から何か重要な言伝でも？」

聞き間違いでなければ、今のは扉の鍵を閉める音。それに随分と彼は緊迫した表情をしている。

「――理解出来ませんね。倉嶋候は何故、そうまで貴方を重要に扱われるのか」

細い糸が張り詰め、今にも切れてしまいそうな不穏な気配がした。怒り、悔しさ、憎しみ。どれとも取れる、負の力が凝縮された声音。

「せ……一体何を」

「それとも、恋は盲目という事なのか。遊女などという不特定多数の男を相手にしてきた様な女に、あのお方程の人物が騙されるなんて――実際、ここに来てからの貴方は実に巧く隠しおおせていますからね」

これ見よがしな嘲笑にも、恐怖を感じて以前の様に言い返す事が出来ずに彼女は黙っていた。じりじりと近づいて来る気配。一体鷹信との会話で何が出れば、ここまで狂気に支配されると言うのか。

「あ……！！」

距離を開けようと同じく後退した香月は、自ら引いた椅子に足を取られて床に尻餅をついた。

「じっくりと化けの皮を剥いでみようと思っていたのですが、いっその事試してみましょうか」

仙丸は覆い被さる格好で四つんばいになり、両手両脚が彼女のそれを挟む様に置かれた。

「や……お止め下さい、副局長……」

吐息が掛かるほど、顔が近い。

皐乃街にいた頃に感じた、客達の欲望にまみれた視線ではなく。

理性を失って酷薄さだけがぎらついた双眸に、香月の背に悪寒が走った。

「それも手管なのですか？　か弱い生娘の振りなどして、正論ばかり振りかざす」

薄く口の端だけで笑って、彼はその堅く閉められた術着の襟に手をかけた。

暴れようと両手に力を入れようとしても、仙丸の身体そのものが彼女を押さえつけていて、しかも首筋を掴まれている。何度試みてみても跳ね除けられない。

「貴方の様な女に現を抜かしては、候の前途に傷が付きます」

「い！　嫌――！！」

剥き出しになった鎖骨の下の、なだらかに円を描く白い双丘に。

彼の唇が触れた瞬間――

香月の脳裏に、いつも見ていた夢の世界が鮮烈な稲妻となって蘇った。

※※※※

――無人の屋敷を、逃げ続ける夢。最後には、朱塗りの格子と無数の手に捕まってしまう。

いつの間にかすり替わった、何者かが父の部屋を荒らしている気配も同じだ。

――何故、こんな時にこんなものを見る。

理性の片隅で疑問に思いつつも、記憶の謎を解き明かす必要がある気がして香月は意識を凝らした。

――ああ。

朱塗りの格子や無数の手は、皐乃街の客達だ。彼女の恐怖の象徴。と同時に、思考を停止させる為の逃げ場所でもあるのかもしれないと、ぼんやりとした意識の中でそう思った。

『だからさっさと殺さずに、拷問にかけてでも吐かせれば良かったのに』

『吐かないさ。自分の妻さえも犠牲にして研究した男だ……も恐らくは一刻も早く抹殺したかったのだ。未練を断ち切る為には必要だと仰るのだから』

『……あんな女の何がお気に召したのやら……』

『知らぬ。琴の名手だという以外に……はない様だが……むしろ玄達の方が問題だ……』

室内を動き回る音。ふと足音が止み、不気味な静寂が訪れた。
逃げてはいけない。香月は必死で目を扉の隙間に当てて、中の様子を窺った。
背格好からして、若い男の二人組に見える。いずれも鈍色(にびいろ)の面布を被っていてこちらに背を向けている。当然顔は見えない。

『こいつには確か、子供がいなかったか。何処に行ったのだ』

来た、と身構えそうになるのを堪える。これは過去なのだ。自分が「本当には何処まで見たのか」を見極めなければ。

『遊郭に売られたらしいよ。……が手を回したんだろうさ……ていたからね』

男の言葉に香月は頭を殴られた様な衝撃を受けた。
この記憶は、父が亡くなった時のものではない。
後であるのは間違いないにしても、では何時のものなのだ？
父が亡くなってから皐乃街に入りしばらくするまでの間、香月にははっきりとした記憶がない。
てっきり辛い日常の余り時間感覚がよくわからなくなっていたのだと思っていたが、もしかしたら。

『……残念だな。子供がいれば、前日なりとも奴の行動を聞き出せたものを』

男の言葉に、香月はそうだ、と確信めいたものを感じその場を離れた。
あの時も。あの時もここで私は気づいた筈だ。だから引き返した。
映像は遠ざかる。

――夢はこれで終わりなのだろうか……

けれど最後に一つだけ強く心に焼きついたものがある。父が亡くなる前日に何をしていたのか思い出したからだ。貸してくれ、と珍しく頼んできた。戻って来たのは一刻の後だった。

――『香月』を、持って行かなければ。

琴造りの名人、柳幻（りゅうげん）の手に拠る楽器。龍腹と呼ばれる台座の裏に、精緻な彫刻を施された名品。かつては王宮で国王が所持していたと言う。

父が琴に何をしていたのかはわからない。ただその時とにかく、琴と一緒に皐乃街に行かなければならないと思った。

なのに次に空白が途切れた時、香月はそれらを忘れてしまっていたのだった。

※※※※

「――局長！！」

せり上がる意識と共に感覚が戻ってくると、息苦しさに胸は重たい。手足は血が通っているのかどうかわからぬ程冷たく、全身が震え出す。

「か……はっ……！」

激しく咳き込んで呼吸さえもままならず、香月は暴れた。さっきと違って仙丸の拘束は緩んでいる。だから力の限り逃げたいのに、苦しくてそれどころではない。吐き気さえ覚える。

「落ち着いて、息をゆっくり吐いてください」

背に手を入れて半身を起こし、彼はそのまま香月の背中をさする。

「――さ！　触らないでっ……！！」

呼吸を取り戻しかけたと同時に、彼女は手を払って両手の力だけでその場から後ずさりした。まだ下半身には力が入らず、しかもいくらも動かない内に壁が背に当たって退路を絶たれる。

「出て行って、ください。もう二度と、ここには入らないで」

歯の根の合わない唇で何とかそう言うと、仙丸は瞳を伏せた。体を起こして、床に両膝を付いた状態になっている。

「書類、なら、私から」

行くから。そう続けようとした時、彼が両の掌を床に下ろし頭を下げた。

「……どうやら、私は貴方を誤解していた様です。申し訳ありませんでした」

地に額を付け、土下座の体勢である。

絶句して言葉が出ない香月の前でしばらく彼はそうしていたが、やおら立ち上がり踵を返すと、扉の鍵を開けて足早に部屋から出て行った。

## 緑青（ろくしょう）

仙丸が出て行った後しばしの間呆然と扉を見ていた香月は、あられもなくはだけられた首元に気づき、慌てて襟を締めた。

その指が震えたのは、彼に対する恐怖のせいばかりではない。

落ち着いて考えなければと頭ではわかっているのだが、ふとしたはずみに蘇るのは、遊女時代に客達に抱かれた記憶。心を身体から切り離す事で苦痛を和らげようとした、あの日々。

鷹信だけが、欲望の為でなく彼女を労わる為に触れてくれた。

――しっかり、しないと。

仙丸に素性が知れた時から、いつかこんな扱いを受ける事になると予想すべきだった。むしろ気を失ったとは言え、彼が途中で思いとどまったのを幸いと思うべきかもしれない。脅迫めいたものまでしていたのに、理由はよくわからないけれど。

衣服をようやっと整え、香月は中断されていた書類の決裁を再開した。「後で」と約束した禾管局での講義までまだ時間がある。

――過去の夢について気づいた事は、帰ったら鷹信様に話してみよう。

仙丸との出来事は、話せないし話したくもない。

思い出しかけてまた嫌悪感を催していた時、登記装置が呼び出し音を鳴らした。

装置の盤面に打ち出される文字は『施術局　姉小路呼出』となっていた。

――何の用だろう。

盤面の下に整列した文字盤の一つを押して、それから『諾』と入力して席を立つ。
姉小路からの呼び出しならば、舜橙の事かと思い至った。
実は昨日の内に施術局を訪ね、彼に舜橙の素性について詳しく知りたいと話していたのだった。
調べるのに時間をくれ、と言われていたのだがようやく回答が聞けるのか。
喜び勇んで局長室を出ようとして、行き先を仙丸に告げるべきか否か迷う。
ほんの少しの間考えて、香月は扉の把手に置手紙を書いて紐で下げる事にした。登記装置で知らせる事すら、今は出来そうにない。
そのまま局を後にした。

「お尋ね頂きました舜橙さんについてですが、出身は彭沢（ほうたく）という辺境の村の様です。代々農業を営む家の息子で、南部の領境に恒山（こうざん）という険しい山があるのですが、そこで暮らしていたとか」

いつも施術局に入ると最初に通される部屋で、姉小路は訪問客に向かい合って椅子に座り、記録文書を読み上げる。

「彭沢、ですか」

香月は眉をひそめた。聞いた事のない地名だ。

「五辻（いつつじ）侯爵領にある村、とご説明した方がわかりやすいでしょうか。王都からは南西端に位置する土地です。先ほど申し上げた恒山が、珍しい生物が多いというので有名ですね」

「月下病に罹患したのは何時頃からですか？」

「十九歳を迎える頃に身体に変調を訴えたそうです。怪我をしても治りにくい、慢性の疲労状態が続く。他愛もない所から始まって、二十歳になった時には顔に皺が現れていたと。それから髪も白くなり、あまつさえ抜け始めて皮膚もたるみ、訝しいというので母親が五辻候に嘆願書を書いたのがきっかけでここに入った。そう記載があります」

という事は、発症して八年の計算になる。

「他の症例の記載が残っていれば比較も出来ましょうが、ごく古いものが一件のみなので対象としては確実性に欠けます。しかも前例はわずか五歳で発症し、三年後には亡くなってるので」

「若いほど進行が早いのかもしれないし、単に偶然かもしれない？」

姉小路は表情を曇らせた。

「そうなんです。記録を更新するだけで患者にとっては、何の手がかりにもならないというわけで」

「前例は何年前のものですか」

「五十年程前とあります。当時の担当者も、聞いた事がない名前で。治療に使われた薬も今では見かけないものですね。恐らくは患者が亡くなったので、禁じられたのでしょう」

香月は思わず身を乗り出した。五十年前、禁じられた治療法。

「ま、まさかそれって。——どんな薬剤を使ったのか、教えては頂

けませんか」

「ええと、『乃之(のし)の畸形を煎じて与え』とあります。『通常のものより堅実な生薬を用いたが発熱し、嘔吐と下瀉を繰り返して振戦を起こし』……消耗して亡くなったそうです」

――亜種療法だ。

やはり、と思うと同時に実験に利用され、短い生涯を終えさせられてしまった子供の事を考え声が沈んだ。

「……きっと研医殿は、そうやって発展して来たのですね」

楠王の治世まで、研医殿は代々磴侯爵家が踏襲して来たと聞いた。五十年前ならば、長塚の父親辺りが殿主だったのだろうか。そう言えば、鷹信からも玲彰からも、長塚の正確な年齢を聞いた事がない。さして重要な事とも思えなかったが、ふと気になった。

「かもしれません。個人的には、承服しかねるやり方ではありますがね。私も時折記録の整理をしていて胸が悪くなる事がある」

姉小路は珍しく、渋面を浮かべていた。

「昔のここでは、患者を実験生物としか見ていない節があった様です。事実、残っている事例でも失敗例の報告が多い。殿主が箕浦候、そして玲彰様に変わってからは大分方針を変えたと、私も聞いていますが。当時ならとっくに上層部と衝突して辞めていたでしょう」

殊更突き放した口調の中に、激しい嫌悪が看て取れた。

温厚な人物と思っていたのだが、険しい表情をすると彫の深い顔

立ちなだけに凄みが増す。子供が見たら泣くかもしれない。

「姉小路局長は、その……あるのですか？　上の方と喧嘩した事が」

恐る恐る聞いてみると、虚を突かれたらしく一瞬目を瞠ってから、彼は苦笑を浮かべた。それで取り巻いていた近寄りがたい雰囲気は去り、いつもの様子に戻る。

「それはありますよ。薬処方局の前局長とも衝突しましたし、上司というか身分が上の方ともやりあった事もありますね。未だに局長を解任されないのは、研医殿だからではないでしょうか」

「意外でした。とても穏やかな方だと思っていましたもので」

思った事を正直に言ってみたのだが、何故か彼の笑顔は消え真顔になった。

「あの、私何か失礼な事でも？」

いえ、と声は低く短い。視線を外さず、濃藍色の双眸で真っ直ぐにこちらを見つめて来る。

「私が優しく見えるとしたら、それはきっと――相手が貴方だからでしょう」

言葉以上に、何かを訴えかけて来る姉小路の眼差しに戸惑う。払う様に力を込めて香月は否定した。

「そんな事ありませんよ！　姉小路局長はお優しいから、時にお怒りになれるのだと私は思います。患者さんにも、局員の方々にも慕

われているではないですか」

今の彼女に、言外の意味を考える余裕はなかった。考えられなかったと言うべきか。それに実際、いつやって来ても彼は常に暖かい談笑の中心にいたという印象がある。人望がある証拠だ。

「いや、私はですね」

慌てて更に言葉を繋ごうとした姉小路の背後で、扉を叩く音がした。

「失礼しまーすっ。……あれ、もしかして邪魔しちゃいました？」

いつも通りの能天気な口調で許可も待たずに入って来た斎条が、二人の顔を見比べて後ずさりしようとした。

「すみません、後ほどまた――」

香月は思わず右手を伸ばした。

「待って下さい、斎条さん！」

「え、でも」

「ちょうど良かった。お話があるのです。舜橙さんの治療について、お二人の同意を頂きたいと思いまして」

怪訝そうな顔をしているのは斎条だけではない。香月は息を深く吸い込んだ。

如何に姉小路が自分に優しくとも、この提案をした後でも変わら

ず接してくれるかどうか。

「実はこれから、禾管局に伺おうと思っています――」

※※※※

「――河楸（かしゅう）の亜種は果皮をすり下ろして使います。正種は良性の腫瘍などに効能があり、亜種は体液の流れを整える効果がある。生薬は大抵乾燥させてから粉砕して精製するでしょう。亜種はむしろ生のものを使用した方が良い」

周布の説明は非常にわかりやすかった。傍らで漏らさぬ様に記述しながら、香月は何度も頷いて話を聞く。指し示されれば実際の植物の様子を観察出来る、講義としてはこの上ない環境だ。

「筋組織の再生を図るのであれば、これに川弓（せんきゅう）の亜種を掛け合わせると良いでしょう。筋損傷の快復を助けるし、補血効果もあります。根茎を湯に通して粉砕し、流動食として使うのです」

「河楸の亜種ですが、正種とは違って腫瘍の治療には効果がないという事ですか？」

「逆ですね。正種が出来てしまった腫瘍を縮小させるのに対し、亜種は腫瘍を作らせない方向に働く。体液の流れを正すとは、体質そのものを正すに繋がります」

普段まともに人と会話するのを苦手とする香月だが、この一見風采の上がらない研究者の話は興味深く質問が尽きなかった為、気づけば三刻を費やしていた。

「お時間を取らせて申し訳ありません」
慌てて言い添えると、周布は「いえいえ」と笑う。
「私は普段からここで世捨て人同然に亜種の研究のみをしている偏屈者ですから。嵯峨局長こそ、お忙しいのではありませんかな」
休憩を、と彼に進められるままに以前も入った殺風景な白い部屋に戻って椅子に座った。
一つきりの小さな卓の上に、二人分の茶器が置かれる。
「ありがとうございます」
「桂皮(けいひ)の亜種で作った茶です。血の凝りを和らげるでしょう」
「やはり食べ物も亜種なのですね」
少し抵抗がない事もなかったが、これから患者に同じ経験をさせるのだ。思い切って口に流し入れてみた。
「……ほのかに辛いのは、正種と同じですね」
芳香は亜種の方が強いだろうか。予想以上に飲みやすいのは驚きだった。
おっとりと周布は笑う。
「味はほぼ変わらないですな。中には苦味甘味が強い、或いは弱いものもありますよ」
「河楸も川弓も苦味がややありますよね。味付けで誤魔化せるでし

ょうか？」

「問題ないでしょう。亜種も同じかやや薄いぐらいです」

しかしそれにしても、と周布は湯飲みを手に持ってしみじみと呟いた。

「亜種食物での治療などよく皆様が承知なさいましたね。こう申しては不敬に当たるやもしれませんが、玲彰様は良くも悪くも既成の概念に囚われないお方ですからな」

「そうですね、反対されなかったわけではないのですが……」

局長会議など公式なものでは提案していないものの、先に患者の担当者には説明をと、斎条と姉小路に話した先刻の事を香月は思い出す。

予想通りというべきか、姉小路ははっきりと難色を示した。傷ついた表情さえ浮かべていたものである。

『例え有効なものだと認定されているものだけだとしても、合わせる事に拠って予想外の効能が出たりはしませんか？』

対する斎条は何やら考え込んでいたが、ややあってから『まあとにかくやってみましょう』と割とあっさり同意してくれた。

「担当者の一人は渋々、最後には何とか同意してくれました。『あくまで通常の治療の補助として』という条件を付けられましたが」

「姉小路局長でしょう。頑固というほどではありませんが、彼は常に正道を好む嫌いがある。研究者ではなく行使する側としては適材

ですな。正義感ゆえに局長内では異端でさえあります」

多少皮肉めいて笑う周布を見て、香月は姉小路が言っていた事を思い出した。確かに玲彰といい元良といい、研医殿の上役には個性的な人が多いのかもしれない。

「私がそう思っているだけかもしれませんがね。貴方はまだ着任して日が浅いから、全ての局長と話をした事がないでしょう。……いずれおわかりになりますよ」

「はあ……」

わからないでもない様な、と少し首を傾けてから、彼女は不意に疑問を覚えた。

「周布局長はここに、いつもお一人でおいでになるのですか？」

禾管局に来るのは僅か二度目だが、仄音局でも施術局でも必ず何人かの部下の存在を認めたのに、ここにはそれが全くない。廊下で見かけないのは仕事中だからかもしれないが、三刻の間に外部から何の音沙汰もないのは奇妙だ。急ぎ案件の一つもあって良さそうなものを。

血の気の薄い顔で周布は複雑な表情を浮かべた。諦観と哀愁がない混ざった様な。

「局内の他の部署には人員がおりますが、この部屋には私以外基本的に入るのを禁じておりましてな。玲彰様がおいでになるまでは、そもそも他の局からも忌避されていたもので」

「えっ」

そんな話は全く聞いていなかった。

「もしかして、私などが入ってはいけなかったのでは――」

「忌避、と申し上げたでしょう。禁じられているのは局員です。局長以上は自由に入室出来るのですが、ここ何年か来た者はおりませんでした。この部屋も私自身も、本来はとっくに排除されていたはずでしたからな」

ですから亜種食物の治療も、局長会議に出すと却下されるかもしれませんよ――自嘲気味に彼は付け加える。

香月は躊躇った。周布が忌避されるのは、恐らく長塚に与したからだろうと察しがついた。ここで話題を逸らすのが善意なのだろうとは思うのだが、しかし。

「……ですが、玲彰様は貴方を登用なさった。過去に何をしたにせよ、今の研究を買われて局長の位を頂いているのではありませんか？」

流石に直球では聞けずに婉曲な言い方をした。

「おや、玲彰様から私について何も聞いてはいないのですか？　てっきり話してあるものだとばかり」

「少しだけ伺いました。確かに亜種食物の研究成果を奪われたくもないのでしょうけど、でも――」

玲彰は軟禁だと言うが、本当に閉じ込めたいのなら、研究を続けさせるものだろうか。

「違いますよ。研医殿が、いえ玲彰様が私に研究をさせるのは、植物達の一部を外に出さない為なのです」

## 緑青（ろくしょう）（後書き）

脚注：一刻→一時間でお考えください。

## 甕覗（かめのぞき）

「それは一体、どう……」

続きを待って香月が沈黙していると、周布はややしばらくの間を置いて再び口火を切った。

「磴候が殿主の座を追われる時、彼は全ての知識の放棄を罰として科せられました。しかし頭の中のものまでは消せない。決して流用してはならないと誓約はしましたが、証拠さえ掴ませなければどうとでもなる。結果、多くの技術が彼の元でより歪んだ形で改悪させられ、犯罪に使用される事となったのです。しかし――亜種植物はそうではなかった」

亜種とは元々変異を偶発的に起こして出来るものだから、育て方も難しく、種の保存は中々出来ない。故に効能を記しても、肝心の同じものが手に入らない事になる。

国内でそれを可能にしたのは、生きている人間では自分だけだろうと周布は言った。誇らしげな口調ではなく、哀しげに。

「侯爵は以前、ある亜種の研究を私にさせておりました。それは私がここで行った結果出来たものです。だが外界で同じ条件下にして行って出来るかというと、これに限っては不可能に近い。元々、原料が寡（すく）ないというのもありますが」

「長塚伯」ではなくかつての呼称「磴候」と呼ぶ周布に、香月は彼の危うさを感じた。

「そ、その亜種とは一体……どういうものなんですか」

「古い時代の植物です。正種は猛毒として恐れられ、今では研医殿に眠るのみとか」

「まさか――麻珍ではありませんよね」

“長塚は、麻珍を一体何に使うつもりなのだろうか”

玲彰の言葉が脳裏に浮かんだ。

――あのお方は一体『どこまで』を予測していたのだろう？

周布は頷く。

「そうです、そのまさかです。麻珍の亜種は正種とは反対に、霊薬として書物にも伝えられているのです。しかし記された書物が紛失してしまい、記録は私の頭の中にのみ存在する事になりました」

他にも門外不出となっている亜種を保持する為に自分は閉じ込められているのだと――続けた彼の言葉は、だが香月の耳にほとんど入ってはいなかった。

※※※※

果たして周布の言葉通りに、明くる朝の局長会議の場は紛糾した。

「慣例や法規を守れというわけではない。むしろ同じ轍（てつ）を踏む愚を冒さないと言えるのか」

「万一患者に異変を来たした時、嵯峨局長が責任を取れば良いという問題でもなかろう」

「しかし効能を認定されているものもある」

「亜種などという不確定なものに頼ってどうする。我々が求めているのは恒常性だ」

喧喧囂囂（けんけんごうごう）たる非難の中、香月が口を挟む間も与えられず議論は続く。てっきり、自分が責められているかと思いきや、どうも流れは別の方向へ行っているらしい。

「私は悪くない試みだと思う。結果病が快癒すれば問題なかろう」

相変わらずの抑揚のない口調で言ったのは玲彰だ。

すかさず局長の一人が反論する。

「亜種の効能については、悪しき実例が多い。周知の話です」

「それは前任者の選択に問題があったからだ。効能はあるのだろう、周布？」

芸術的ですらある造形の口唇から発せられた名前に、一同は動揺のざわめきを見せた。

周布は前日と同じく、淡々と亜種について説明した。気負うでもなく厭うでもない、何の作意も感じられない声音だった。

「恒常生産性の問題ですが、大量というのでなければほぼ同等の品質を保つのは可能です。この舜橙という患者一人分の食物ならば確保出来るでしょう」　やはりな、とまた別の局長が吐き捨てた。

「であれば単に実験ではないか。亜種の栽培などするよりも、生薬

の改良をしていった方がよほど人道に適っている」

「お言葉ですが」

それまで黙って考え込む風にしていた姉小路が口を開いた。腹の奥底から出される美声が、瞬時にして全員の耳を奪う。

「月下病の前例は僅か三年で死亡しています。記述を見る限り、投薬の問題以前に進行は充分早かった。現患者は発症後八年を経過しましたが、改良が成功するまで永らえる保障はありません」

続けて彼は言った。舜橙が既に言葉を発せられない事、その他に特殊な能力を持っている事を。今の治療法では、保って一年であろうという見解まで。

――姉小路局長。

あんな消極的だったのに、公の場で庇ってくれるとは思わなかった。香月も他の者と同じ位唖然とする。

更に驚くべき事に、同席していた元良もこれには賛同を見せた。

「彼の『声』は実に失うに惜しい研究対象だ。寿命が延びるというのなら、是非推し進めてもらいたい」

元良は福福しい顔に満面の笑みを浮かべている。理論の巧拙はともかく、暗に「研医殿とはそういう場所だろう」と示した事に本人以外が気づき、場の空気が困惑に変わる。

「……嵯峨局長は、どう考えますか」

穏やかな声がして、呼ばれた香月は円卓の上手に座るその声の持ち主を見やった。

――坂ノ内副官。

年は五十半ばぐらいか、一見見には特に印象強いわけでもない、人の良さそうな雰囲気の男ではあるが、今まで公の場で目立った発言をした所を見た事がなかった。

なのに彼が言葉を発した途端、一同の意識が瞬時に研ぎ澄まされた様に空気が変わる。

ごくさりげない中に、有無を言わせぬ威圧感があった。

香月は彼の、開いているのかどうかという程に細い双眸を捉える。

隙間から覗く薄萌黄色の小さな眼が、鋭く自分を見つめ返しているのを知った。

瞳が湛えたものに、背筋を正される。

自己主張が強い者ばかりを集めた、自律を求められる世界。

「私は、亜種食物で作られた飲み物を口にしました。普通の食物とそう味も変わりません。そして今どうともならずにここにいます」

「戯れ言ですな。一が可だから全が可とは限らない」

どこからか野次が飛んできた。香月は俯く。

「……それでも、ただ死を待つよりは……」

声が小さくなるのが悔しい。

「逆もまた然り、でしょうかな」

思わず顔を上げると、坂ノ内の優しげな笑みとかちあった。

「坂ノ内副官……」

「ここは玲彰様のご推薦もある事ですし、試みてみては如何ですかな」

しかし、と先程野次を飛ばした男の一人が言い募った。

「もし失敗して患者が亡くなった場合はどうなさるのです。嵯峨局長一人の責任で済むのですか」

「ああ、それは勿論玲彰様も何らかの責任をお取りになるでしょう。そうですよね？　玲彰様」

笑みを掃いたまま右隣の上座を振り返れば、当の本人は無表情のまま「無論だ」と頷く。

「玲彰様――」

会議の間は更なる衝撃に包まれた。

当事者の香月が一番驚愕しており、散会を受けて一目散に駆け寄る。

「れ、玲彰様」

申し訳ありません、と頭を下げる香月に「構わぬ」と答えは短い。代わりに隣にいる、愛想の良さそうな初老の副官を皮肉げに一瞥した。

「久々にやってくれたな」

坂ノ内は面白がっている風に見えた。

「話が治まるには結局ああなるしかないでしょう。皆主張が強い者達故、一枚岩にはなりにくうございます」

勿論、お二人の首が繋がると確信すればこその発言ですよ――そう言って、彼は肉の薄い背中を向けて去っていった。

「……お怒りなわけではないのでしょうか」

思わず殿主と不仲なのかと聞きそうになった。だが玲彰自身はさほど気に留めてはいないらしく、

「偶に短気を起こしてあの様な真似をする。普段は核心を誰より早く捉えるくせに何もしないのだがな。……奴等は己が研究出来ればそれで良いのだ」

供を連れるわけでもなくただ一人で去ってゆく玲彰の後ろ姿に深々と頭を下げて、香月は自分に味方してくれた二人を探した。

周布はもう自局に戻っているらしく見つからなかった。もう一方、昇降機近くに立っている長身を見付けて駆け寄る。

「賛同頂いて、ありがとうございます」

礼には及びません、と彼は笑みを浮かべた。昇降機に乗り込み、把手を操作しながら答える。

「会議で話した通りです。舜橙さんにはもう余り時間が残されていないと思うので、一進一退の経過を変えられるかもしれない」

しかし、とこちらを振り返った顔はひどく深刻な様子だった。
「心配なのは貴方です。万一の場合の事を考えると……」
「そうですね。仮にも人一人の人生が懸かっているのですから。責任重大です」
視線を伏せた香月の両肩に、姉小路の手が置かれる。
「姉小路局長」
「……私は貴方の味方ですから」
自らの視界に覆い被さる影に何故か多少の恐怖を感じたが、香月はしばらく彼を見上げてから――微笑んだ。
「ありがとうございます。期待に応えられる様に頑張ります」
姉小路の顔がこちらに傾いて、口を開こうとした時。
「あっれ～、また間の悪い時に出くわしちゃいましたね」
「斎条さん！」
機械は既に四階に着いていて、乗り込もうとしたのか入口付近に立つ青年がこちらをにやにやしながら眺めている。
「済みません、特に姉小路局長」
悪戯っぽく笑い掛けるが、笑みを向けられた方は憮然として返事

をしなかった。

「斎条さん、しばらく戻られませんか？　亜種治療についてお話したい事があるのですが」

「いえ、そう時間は掛からないと思います。施術局に伺えば良いですか」

香月が姉小路局長を見ると、肯定の頷きが返って来た。

「では一刻の後に打ち合わせをしましょう」

いつもの書類に決裁をする仕事があるだろうと戻ると、調合室に入ったすぐ右手に昨日まではなかった書類箱が置かれていた。

『決裁書類』と札が付いている。

室内を見回して奥に座る仙丸を捉えるが、顔を上げて説明をされるわけもない。他の局員がちらちらとこちらを盗み見ている。

――気にしない。

言い聞かせつつ、書類を持って局長室に向かった。

――そう言えば、周布局長に先に礼を申し上げた方がいいだろうか。

ざっと見て急ぎ期限のあるものだけを処理し、禾管局の植物園に向かう。

「周布局長……」

扉を叩こうとした、その時。

「――帰ってくれ！！」

室内から怒鳴り声が聞こえて、香月は驚いた。

――わ、私まだ何もしてないのに？

「もう全て昔の話だ！　それともまさかお前、私を」

どうやら誰かと話をしているらしい。

相手の声は小さい上に低くて、よく聞き取れない。つい耳をそばだてようとして、悪趣味だと居住まいを正す。

――邪魔をしない方がいいのだろうけど、でも。

どういうわけかこのまま帰っては良くない気がして、少し躊躇ってから扉を叩いた。

「周布局長、嵯峨です」

人の話し声は止み、ややあってから開いた戸口から周布の顔が覗く。

気のせいか、青褪めて見えた。

「お話中でしたか？」

いや、と彼は視線を剃らした。

「誰もおらんよ」

座ろうと椅子を引き寄せる手が震えている。

「先程の会議のお礼を申し上げたいと思いまして」

「礼？　何かしましたかな。私はただ、亜種に付いて説明を求められたから答えただけですよ」

気を遣ってくれているのかと最初は思ったが、どうやらそうではないらしい。

どことなく心ここに在らずな様子で、「済まんがこれから急ぎの仕事があって……」と立ち上がりさえした。今座ったばかりの椅子から。

「失礼致しました。実はこれから治療に付いての打ち合わせを行いたいと思いまして、周布局長にもご同席頂ければと」

「いや、悪いが私はここから長く離れるわけにはいかないのだ。助言も協力もしようが、打ち合わせには参加しない」

薄くなった額には汗が滲んでいる。

――何故。一体何にこれほど怯えているのだ？

「そうですか、ではせめて担当者と共に、一度ご挨拶を」

「止めてくれ！！」

悲鳴に近い声に驚いて、香月の身体が軽く跳ねた。

「あ、いや。済まない……いいんだ、そんな気遣いは無用だよ」

「こちらこそ、ご不快にさせてしまわれたのですね。申し訳ありません」

釈然としないながらも立ち上がり、香月は部屋を出ようとした。

その両腕を掴まれる。

「一つ約束してもらえないか」

「は、はい？」

縋る様な眼差しが真っ直ぐ彼女を捉えていた。浮かんでいるのは、明らかに恐怖に見えるのだが――

「治療には協力するが、局員達にはここに来させない様にしてくれ。もし見付かったら――いや、もう手遅れかもしれないが」

「わかりました……？　あの、何か気懸かりな事でもあるのですか」

ついそう聞いてしまった。

「何でもない……大丈夫だ、まだ、今のところは」

意味深な呟きの意味を追及する間もなく、香月は室内から追い出されてしまった。

気になったのは、彼が決して見ない様にしていた、植物園の扉。

あの部屋に、もしかして誰かいるのだろうか？

## 墨染（すみぞめ）

明くる日は七日ぶりに休日となり、朝いつもの様に鷹信と差し向かいで食事を摂った後、香月は持ち帰った薬草の書物などを読んで昼までを過ごした。

――皐乃街に行って、河西姐さんの様子を見て来ようか。

鷹信が遣わした者からの報告に拠れば、元の治療薬に戻した後は一進一退を繰り返しているという。

――行くなら、昼の顔見世が終わる頃の方が人目に付かないだろう。

顔見世が終わる夕四刻までにはまだ時がある。香月は書物を読み進めた。

「お休みの日でも勉学でございますか」

茶の入った器を差し出して、苑寿は呆れて見せる。

礼を言ってからふと気づいて、香月は振り返った。

「ねえ、苑寿。私が皐乃街に連れて行かれた時の事、覚えてる？」

老婆の面に苦悶の表情が浮かんだ。

「……あれは忘れようと思っても、おいそれと忘れられるものではありません」

「ごめんなさい、辛い事を思い出させる様だけど。出来たら詳しく教えてもらえないかしら」

「何故、今になってその様な」
「必要なの。父上の死の謎がそこにあるかもしれないのよ」

父の、と口に出すと彼女も渋々ではあったが、記憶の引き出しをあちこち開ける様に話し始めた。香月が人買いを生業にする『女衒』に売られてしまった後、屋敷もいつの間にか玄達の従兄に当たる夸道に奪われてしまった事。住処を失くし嘆く暇もなく、苑寿達使用人もまた、散り散りに売り飛ばされてしまった事。

「再会してすぐに、一度お話させて頂いているではありませんか」
「ええ、そうね……屋敷が従叔父様に渡る前の事が知りたかったのだけど……もしかして、私一度屋敷に戻っていないかと思って」

まさか、と苑寿は目を丸くして驚いて見せた。

「もしそんな事があれば、妾が覚えていないはずがありません。お見かけしてはおりませんよ」
「そうよね……」

しかしむしろ、苑寿が覚えていないという事は、無人の屋敷を彷徨う記憶を裏付けるものでもある。

「あの屋敷は今、どうなっているのかしら」
「夸道めは搾取するだけしておきながら、使用するでもなく荒れるに任せているそうです。余人の立ち入りを禁じ、倉嶋候が買い取りを申し出たのすら拒否したとか。昔から何かと旦那様と対立しておりましたが、単なる意趣返しにしても卑怯な遣り方ではありませんか！」

――無人という事は、侵入者も入りやすかったのではないか。

屋敷についての問題は今は置いておくとして、香月は自らの悪夢が現実の記憶だったに違いないという確信を強くした。

「ありがとう、苑寿。よく話してくれたわね」

眼を潤ませ、懐紙で鼻を押さえ始めた乳母の背を撫でると、幾分落ち着いたらしかった。

「いえ……妾こそ申し訳ありません。取り乱してしまって」

「三刻になったら皐乃街に出かけるから、それまで貴方も退がっていて構わないわ」

苑寿が部屋を出て行った後、香月は書物を卓の上に置いたまま、片隅に立てかけてあった琴を引き寄せた。

指を滑らせ、おもむろに楽を奏で始める。様々な思索に耽りながら。

――母は今もどこかで、生きているのだろうか。

舜橙の言葉を確かめたわけではない。あれから彼の病室には行っていないし、行ってはいけない気がしていた。

会いたくないといえば嘘になるが、禎祥の面影を彼女は知らない。せめて相伝の曲でもあれば、謎の手がかりになろうものを――残念ながら、楽譜遊び以外は全て師匠から学んだものだ。

それとも、と彼女はふと手を止める。

師匠に聞けば何か教えてくれるだろうか――

「おや、止めてしまったのか」

残念そうな声が廊下から聞こえて、驚いて見上げると鷹信が立っていた。

「せっかく琴の音が聞こえると真っ直ぐやって来たのに」

「今日は王宮で会議ではなかったのですか？」

彼は破顔した。

「ああ。会議が予想以上に早く終わったのでな。たまには明るい内に屋敷に帰ろうと思って」

確かにいつもなら王宮での仕事の後でも、領地での責務をこなして宵八刻ぐらいまで彼は帰宅しない。自分の休みが重なる偶然など、滅多にあるものではなかった。

「邪魔でなければ、続きを待ってもいいかな」

「そんな。邪魔だなんてとんでもありません」

慌てて香月は弾いていた曲を再び演奏し始めた。

ひとしきり楽の音を披露した後、「実はお話したい事がありまして」と口火を切る。

ここ数日で気づいた事を報告した。先ほどの苑寿との会話も含めて。

「……確かに妙だが、確かめるのは難しかろう。女衒の名前など、手がかりになりそうなものは？」

「いえ……あの時はいきなり現れて、有無を言わさず荷車に押し込まれました。目隠しをされた事までは覚えていますが、その後は」

鷹信の疑問も尤もで、女衒は住居を定めない流れ者が多い。しか

も逃げ帰れない様、猿轡（さるぐつわ）に目隠しをして目的地に連れて行かれた為、男であっただろうという声の記憶がうっすらとあるだけで、顔を見覚える機会はなかった。

「皐乃街は一度入ると、抜け出るのは至難の業と聞く。戻れるとすれば街に入るまでの間しかあるまい。何らかの方法で一度其方は屋敷に戻り、侵入者の家捜しを目撃した。彼らの目的は――」

香月は頷く。

「この琴に、父が何かを隠したのではないかと思います。彼らはそれを探していたけれども、見つからなかったのでしょう」

無意識に琴を撫でる彼女の指先を眺めながら、鷹信は眉をひそめた。

「しかし、見る限り手を加えられた様子はない。玄達殿が確認していたというのなら、割って取り出す様な隠し方ではないのではないか。楽器について詳しくはないが、少しの弦の緩みなどで音が変わると聞いた事がある」

「仰る通りですが、他に父が狙われる理由は思いつきません」

「だとすれば、それはいかなるものか――という問題になる」

端整な顔に憂いが浮かぶ。

「鷹信様。妾は舜橙さんが言っていた『げんきゅうてん』が、ここに入っているのではないかと思うのです」

「ちょっと待て。では舜橙という患者が、御父君の死に関わっていると言うのか？」

「証拠はありません。そうだと仮定すると、あの人の質問の意味も

わかる気がしまして」
「確かに元々は王宮にあったものだ。誰かが中に隠し、玄達殿がそれに気づいたという可能性もあるな」
「本人に聞ければ話は早いのですが……」
「いや、あまり彼には関わらない方がいい。其方の推測が当たっていたら、尚更だ」

鷹信は琴ににじり寄り、柱(じ)の並ぶ地板――竜甲と呼ばれる――をしげしげと観察した。原木の年輪が細かにくっきりと浮かぶ、それは琴でも一級品の証ではあったが、特に仕掛けが施されている様子は見られない。

「裏を見せてもらっても良いか」
「はい」

柏葉、竜角など各部を見た後、裏返して腹を見る。

「切れ目がない様に見える。一体どうやって作られているのだろう」
「琴は大きく分けて綾杉と裏板の二枚から出来ています。中はほぼ空洞なのですが、並甲(なみこう)という組み立てだと脇に接ぎ目が入るのでわかるそうです。刳甲(くりこう)と言う技法であれば、合わせ目が斜めに入っている為、この様にわからなくなります」

鷹信が不意に顔を上げた為、同じく覗き込んでいた香月は少し慌てた。吐息が触れそうな程に近い。

「中は空洞なのか？」
「は、はい。ですが中に物を隠せば、先ほど言われた通り音が変わるどころか、使い物にはならないでしょう」

竜腹の彫刻を挟む様に開けられた穴を覗き込んで「確かに何かを仕掛けられている様子はないな」と鷹信は溜息をついた。

「となると、残る可能性は一つだ。この彫刻」

月夜を表した浮き彫りを指差す。恐らくは名だたる絵師の図案に拠るものだろう、月を取り巻いて筋状にたなびく雲が美しい。天に届きそうな程に高い峻峰が右に聳えている。山肌を縫って流れる滝は地に伸び、枠に施された枝葉と合流して流線型の紋様を形作っていた。

「劉幻は山水画を好み、よく旅で現地に出かけたと言われている。もしかすると、この彫刻にも実在する風景があるのかもしれんな」

木目を生かして彫られた風景は、だが香月には全く見覚えのない場所だった。そこに意味を読み取ろうと凝視すればふと、ある一点に気づいて思わず声を上げる。

「見てください、ここ」

山の頂近くに、小さく生えた木がある。そこに一見見には木目に見えそうな黒く小さな染みを見つけたのだった。

鷹信も頷く。

「見ようによっては木の葉に見える。なるほど、『そう思ってみなければ』わからないな。修史府（しゅうしふ）に劉幻の経歴を問い合わせてみよう、彼に縁ある場所がないかどうか」

「よろしくお願いします」

軽く頭を下げてから、「経歴と言えば」と香月は姉小路から聞い

た舜橙の出自について告げた。
考え込む様にして話に聞き入っていた鷹信だったが、説明を終えると黙り込んで何やら思案している。こういう時に邪魔をしてはいけないのだと知っている彼女は、黙って反応を待った。

「……まだ、繋がらないな……」

どれくらいの時が経ったものか、ようやく彼はぼそりと呟いた。

「いずれにしても、彼についてはもう少し仔細がありそうだ。彼だけでなく、周りの人間についても調べる必要があるだろう」

「……周りの？」

「一連の出来事には二つの拮抗する謎がある。長塚と相対する人物か、それとも全く別の思惑か。姿はまだ見えない……いや、見えてはいるのだがどうも釈然としない、といった所だな。もしかしたら、見えていると思っているだけで単に『見させられている』だけなのかもしれない」

意味深な鷹信の言葉に、香月は目を見開いた。

「どうした？」

「……いえ。ただ最近、同じ言葉を言った人がいたものですから」

今最も思い出したくない人物だ。何故、よりによって。

「ほう、それは一体誰が」

「忘れました。ところで鷹信様、昨日薬庫で仙丸様と何を話されたのですか？」

唐突に話を逸らすと、今度は鷹信の方がどういうわけか決まり悪

そうな顔をした。

「いや、まあその。薬処方局についてなど、色々探りを入れただけだよ。特に収穫はなかったが、薬庫の内部だけは観察出来た――確かに外部の者が入るのは難しい部屋だ。薬も何が何処にあるのか、把握するのは相当内部に精通していなければならないだろう」

「やっぱり、そうですよね……」

ではやはり、局内の人間が犯人という事になるのか。

心証が悪いだけで仙丸が筆頭に上がっているが、他の局員でも充分可能ではある。

それにしても、仙丸と言えば――彼は何故そんな会話であそこまで怒ったのか、理解出来ない。

首を傾げる香月をちらと見て、鷹信は立ち上がった。

「ただ、局員でなくとも局員を抱き込めば研医殿の者でも犯行出来ないわけではない――」

言葉の語尾に重なって、廊下を慌しく走る足音が聞こえてきた。

「ひ、姫様はいらっしゃいますか！　侯爵様、失礼致します」

転びそうになったのか、不規則な音を立てて扉の向こうに辿り着いた気配がする。声は侍女の楸のものだった。

「どうした」

鷹信が鋭く問う。

「皐乃街から火急の使者が参りまして、姫様においで願いたいそう

です。容態が急変したと、伝言が」

誰の、と確認する必要はなかった。香月は立ち上がり駆け寄ると、勢い良く扉を開けた。

「――出かける支度を、お願い」

他ならぬ自分の声が、恐怖に上ずっている。

「私も行こう」

「いえ、鷹信様はここにおいでになっていてください。これは、妾の仕事です」

しかしいざ支度をして馬車に乗り込もうとすると、既に鷹信は奥の座席に外出着姿で座っていた。

「鷹信様」

「邪魔はしない。約束する」

本当は一人じゃないのが心強い。でも、それを口に出す事は出来なかった。

硬い面持ちで頷いて、香月は手にした鞄を強く掴む。座席について馬丁に出発を命じた。

※※※※

瘍頭の第一段階で死ぬという事例は今までにない。しかし抵抗力が弱まっている今、もし他の病に罹ったとすると話は別だ。

使者の男は鷹信の部下だった。街に辿り着き、馬車から駆け下りる二人を先導して走る。

「昨日までは一進一退ながらも穏やかなご様子でした。今日の昼、次の薬をと研医殿から使いの方がいらっしゃいまして。その薬を飲んだ一刻後辺りから、発熱しだした模様です。ひどくお苦しみになって」

「次の？　そんな筈は」

小走りに急ぎながら香月は声を上げた。この間十日分を渡して、今日は三日目だ。次の薬など自分は出していない。

「使いの者の人相などわかるか」

横から鷹信が口を挟む。

「それが、面布で顔を隠していたそうで。背格好からすると、男ではないかと。同僚の遊女が申しておりました」

「――河西姐さん！」

昼過ぎの皐乃街は閑散としていて、まばらに歩く人々が走る足音にこちらを振り返る。河西のいる切り見世に近づくと、格子の内に見慣れぬ派手な着物の柄が垣間見え、目を惹いた。

駆け寄り、擦り切れた座敷に上がり込む。薄い布団の枕元、こちらに背を向けるようにして病人に縋っていた人物が振り返った。

「……姐さん。これは一体どういう事なんですか」

「浅尾、ちゃん」

見世からそのまま来たのか、艶やかな打掛姿は浅尾のものだった。脇には禿二人も座っている。紅を施した元後輩遊女の、白粉顔が怒りに歪んでいた。

「香月姐さんが治してみせると言うから、あたしは時折遠くで眺めるだけにしておこうって思ってた。でも、今日見世が終わって覗いてみたら――こんな。以前より悪化してるとしか思えない」
「ち、違うのこれは」
「何です？　何かの間違いとでも言うんですか？」

正直に答えればそうとしか言えない。今決して言ってはならない言葉だとしても。答えを探す様に周囲に視線を這わせると、部屋の奥に膝を抱える女の姿が見えた。以前河西の事を頼んだ遊女だ。
ちらりと香月を盗み見た彼女と目が合う。

「し、知らないよ！　あたしはただ、あんたの使いだっていう男から預った薬を、こいつに飲ませただけだ」

忌々しげに吐き捨てて、女は足元にあった紙袋を蹴り飛ばした。
それを手に取り、袋と中身を確かめる。

「香月」
「……確かにこれは、薬処方局で出しているものです」

鷹信の問いに、返事は消え入りそうなほど小さかった。
河西の事を知っていて、香月が出したものと寸分違わぬものを作れる。そんな事が出来る人物は一人しかいない。

「とにかく研医殿に持ち帰って、成分を検査しなくては」
「検査？　何を言っているんです。姐さんの病気を治しに来たんじゃないんですか！？」

詰め寄る浅尾の声は悲鳴に近かった。宥めようと伸ばした手は、

だが振り払われる。

「結局――香月姐さんもそこいらの医者と同じじゃないですか。患者を人として見ていない」

「落ち着いて、浅尾ちゃん。河西姐さんは、最初に渡した薬に戻せば症状も治まるの」

「こんなに弱っているのにですか！　信じられません。まだ街の医者に見せた方が増しに思えます」

帰ってください、と浅尾は香月の身体を勢い良く押し出した。

勝気そうな双眸から、はらはらと涙が零れて化粧が崩れた。朱の隈取は朱い涙に、まるで血を流す様に。

「こんなのおかしいです。姐さんは誰よりも幸せになれる人だったのに……こんな酷い目に遭うなんて、許されるわけない……！」

押された衝撃で力なく後ろに倒れた香月を、鷹信が抱きとめる。

呆然と立ち上がれないままの彼女の足元に突っ伏して、浅尾は泣き続けた。彩と桂の嗚咽が加わり辺りに谺（こだま）する。

静かな街の中に響き渡る慟哭は、そのまま香月の世界に穴を穿ち、黒い闇を形作った。

## 墨染（すみぞめ）（後書き）

脚注：琴は実在のものを参考にしています。柏葉→奏者から向かって楽器の末尾にある、布などで装飾された弦を掛ける部位。竜角→柏葉とは逆の奏者側にある、弦を支える櫛形の橋です。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3579o/

禄遒の奏

2011年10月24日01時01分発行